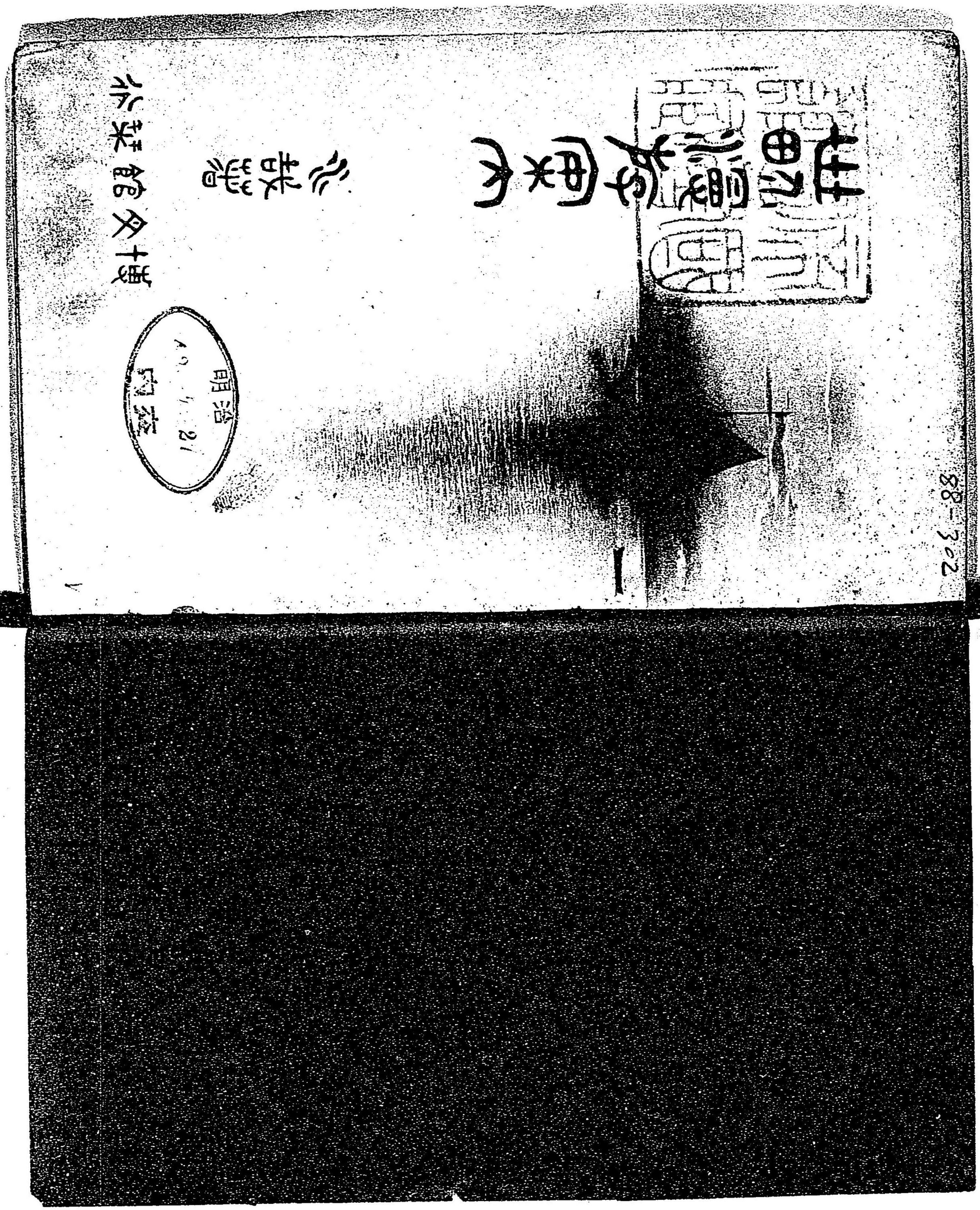


第十冬 結果分析

88-3702

凡例

一各國旅行案内記と、地理の參考書と、娯樂の讀物とを兼ねたいとは本書著者の希望だが、二兎を追へば一兎をも得ざる俚諺の通り、希望が多いだけ、實效が擧らぬも知れぬ。が、要するに奥行の深きよりも、間口の廣きを望んだのが本書の趣旨だ。

一記する所は總て著者自ら巡廻して見た所のみだが、著者の歸朝後、博文館主大橋新太郎君一行も、また略ぼ同じ順路を逆行して通過せられたので、其の最近の消息をも聞き、余が觀察を補足したることも多い。で、最近に二回歴巡したる事實に原づいて居る故、甚だしき誤謬は無い積りだ。

一著者が巡廻の國々は、精しからんよりは廣からんことを期し、

平生人々の巡廻する所は、勿論、其他にも、餘り多く人の行かぬ所の、愛蘭、西班牙、土耳其、希臘、丁抹、諾威、瑞典等まで巡つて、地理、歴史、風景、風俗等、視るに隨つて説た。要するに奥行主義よりも間口主義を執たのだ。

一同じ地方でも、春夏秋冬の時節に依て、所感が大いに違ふ。で、本書には、倫敦は霧が深かつたとか、波羅的海は氷結して居たと云ふても、年中然うかと疑はるゝを避る爲に、著者が經過した時日は、必ず記事中に加へた。

一本文の不備を補ふ爲に、百四十餘種の寫眞を挿入した。何れも多年博文館で集め貯へたものと、大橋君及び著者が、各國で買ひ集めた寫眞數千種の中から、粹を抜たのだから、此れだけは、本書の特色として誇るに足ると信ずる。

一附録の海外旅行手びきも、出發前の準備から、滞外中の注意まで、總て著者自分の經驗に依て書たのだが、主として今後始めて洋行せらるゝ人々の參考に供したのだ。

一書中の記事には、まだ誤つた觀察もあろう、旅行心得にも尙ほ一層便利の方法もあろう。其等は大方の指導を待て、再版の場合には、訂正する積り故、何卒十分の忠告を賜りたい。

一著者が海外へ出發するに際し、農商務省からは、各國出版印刷事業の視察を囑託せられ、東京市參事會からは、各國都市制度の調査を囑託せられた。爲に在外國の我が各官憲から、幾多の保護指導を受け、また在外各地の同胞知友諸君から、到る所で款待を蒙り、短い時日間に、比較的に廣く視察することを得たのは、何れも著者が深く感謝する所である。

一著者の海外旅行中、終始殆ど總て同行して、膝栗毛の道連と爲り、著者を幇けられた大阪北濱銀行取締役小塚正一郎君と、太平洋航海、米國旅行及、巴里の滯在中、最も親切に案内せられたる文學博士姉崎正治君とには、本書の成るに就て殊に負ふ所の多きを感謝す。

一本書の印刷は東京築地活版製造所、寫眞版は博文館寫眞製版所、コロタイプは光榮社、製本の意匠は博文館出版部、製本は大谷富次郎氏が、各熱心に力を盡され、現時の我が出版界に在ては、實に最上の注意を加へられたのだ。で、内容が其れに副ざるの誹りあらば、著者は慚愧に堪へぬ次第で、深く其等の人々に謝す。

明治四十二年六月下浣

著者識す

世界漫遊案内目次

著者各國旅行線路略圖
紐育のブルークリン橋
倫敦の倫敦橋上
巴里のグランドオペラ
伯林のシャロッテンブルヒ皇廟

押圖

第一編　亞米利加

太平洋の航海……一頁
意氣衝天、横濱港出發――趣味多き船中生活――航海中氣候の激變――
同じ日の二日續き――船中一日の樂しい課業――愈よ北米大陸へ到著

米國の西海岸……三
ヴイクトリヤ港暫時の上陸――シヤトル上陸の大困難――膨脹急遽のシヤトル市――北太平洋鐵道の汽車

整頓せるホテル……三七
ホテル到著、客室選定——最も注意を要する食堂——給仕の氣轉と熟練——何所までも金の世の中——旅客に必要な總ての設備——能くある湯殿と便所との失敗
加州跋渉記……三五
大火災後の桑港市——桑港市中の日本人——滿目沃野カリホルニヤ平原——オークランド日本人の花園業——サンノキン川流域の馬鈴薯農園——リヴィングストンの大和植民地——フレスノ町の同胞の樂園
ヨセミテ溪遊記……三三
六十年前黄金の洪水地——遊覽專門のヨセミテ鐵道——山中に四頭立の乘合馬車——深山中の贅澤ホテル——雄渾秀麗なる溪山の奇勝——馬蹄蹴て躋る懸崖の巖角——直立懸崖四千尺の絶景——シイラネバダ山嶺の壯觀——輕快便利なる天幕旅館
北米大陸の横斷……二九
サクラメントの日本同胞——ソートレーキの一夫多妻教本山——海拔一萬二百尺ロッキー山上の鐵道——好避暑地のコロラド鑛泉——

大博覽會後の聖路易——シカゴ市の地獄境と極樂境——ナイヤガラ瀑布水陸の壯觀——一夜の中に五百哩の汽車
紐育繁昌記……二五
地上の紐育市——空中の紐育市——地底の紐育市——水上の紐育市
米國東部の跋渉……二四
米國獨立の發端地ボストン市——ボストン郊外の秋色——冬の朝のモントリール市——英領加奈太の首府オタワ市——特色多きヒラデルフイヤ市——居心地最も好き華盛頓市——煤煙黯淡たるピッツバルグ市
太西洋の航海……二六
豪奢無類の大西洋航路——宛然是れ浮き宮殿——是れ船か、是れホテルか——船中に盛なる演藝會——船中の葬式と祈禱
第二編　英吉利
倫敦繁昌記……二九
流石に自由貿易國——夜半に著た倫敦——始めて見たる倫敦市中——大倫敦の中心倫敦市——倫敦塔と塔橋との壯觀——晝夜間斷なく

走る地下鐵道――世界金融の中心英蘭銀行――平地に大船舶を浮ぶる倫敦港――議長の行列麗めしき上院の傍聽――議場の意外に狹き下院の傍聽――甚だ活氣ある市會の傍聽――ウキスト、ミンスター寺院――夜の倫敦の中心ピツカデリー街――英國史を縮寫したる倫敦塔――セントポール大寺院――綠りの芝生の大公園――博物館と美術館――蠟人形と水晶宮――シエークスピヤの悲劇――寄席で演ずる技藝――日英合併の大角力――ウキンゾルの離宮參觀 …… 二六二

英國內地跋涉記 …… 二六二

濃霧中の倫敦出發――ニウカツスルの一晝夜――古雅掬すべきエヂンバラ――フオースの世界最大鐵橋――スターリングの古城址――湖上の美人で名高き湖水――日曬のグラスゴー市――激浪を冒して愛蘭へ上陸――愛蘭東海岸の鐵道――活氣無きダブリン市――整頓せる滊船と汽車の連絡――大汽船群がるリバプール――工業の中心マンチエスター――マンチエスターの大運河――鐵器製造地のシエフイルド――毛織物產地のリーツ――金屬類製造地のバーミンハム

第三編　南歐羅巴

巴里繁昌記 …… 二七〇

航程一時間英佛間の天險――佛國近世の活動寫眞――蕩敎の大本山ノートルダム――感慨多きルーブルの故宮殿――グランドオペラのゲーテ劇――華麗無類のコンコルド廣場――シヤンゼリゼー街と凱旋門――一里四方の大公園――那勃烈翁一世の墓と國葬寺――ヴエルサイユの故宮殿――サンクローの故宮殿

西班牙旅行記 …… 二七二

佛蘭西と西班牙との國境――サンセバスチアン往來――言語不通なる汽車中――地久節のマドリツド――大富籤の發表日――クリスマスの前日――西班牙名物の鬪牛――質素なる王宮と御園

常夏の地中海岸 …… 二七三

地中海の初對面――基督降誕祭日のバロセロナ港――西國南部の田園生活――西佛兩國の境界――粗末極まる佛國の汽車――佛國南方の咽喉馬塞耳港――機業旺盛なる里昂市――氣の利きたる汽車の辨當――歐洲第一の避寒地――モナコの國立賭博場――佛伊兩國の境界――歲晚のゼノア港

伊埃の新年旅行 …… 二八五

ミラノの元旦――ゴンドラ船の初夢――トリイストの日章旗――殿
冬の維納――活氣に富むブダペスト

バルカン半島跋渉記……四〇
東歐禍亂の噴火口――土領の一公國セルビヤ――活氣ある勃牙利の
首府――土耳其の國都へ到著

君斯坦丁堡滯在記……四三
四百六十年來土耳其の帝都――風俗全く異る君士坦丁堡――宗教中
毒の國民――犬の勢力範圍と羊の祭り――土耳其固有の蒸し風呂――
――全市唯一の日本商店――海峽對岸の亞細亞洲――ボスポラス海峽
往來

希臘近海五日の旅……四四二
君士坦丁堡解纜――船中から見たる君士坦丁堡――ダーダネルの海
峽――ピリウ港の錨泊――歐羅巴大陸の最南端――パトラス港の投
錨――コーフーと聖クアランタ――伊太利半島の東岸へ到著

伊太利南方の旅……四五四
プリンデッシ港の上陸――特色多き汽車中の眺望――ポムペイの發
掘市街――ヴイスビヤスの噴火山――外國人で賑ふナーポルス市――

――盛慨多き羅馬――チボリーの自働車旅行――花の里のフローレンス

雪中の瑞士……四八一
失敗し易きミラノの乘換驛――伊瑞兩國の境界――夏時好避暑地の
ルガノ――アルプス山脈の分水嶺通過――穏波鏡の如きルサルン湖

南獨逸と白耳義の旅……四九一
瑞獨の國境に苛酷の稅關――普佛大戰の媾和談判地――活氣生動す
るライン河の沿岸――コロン市ドムの本山寺院――富象の多きブル
ッセル市――ワートルローの古戰場日章旗翻へるアントワープ港

第四編　北歐羅巴

和蘭獨逸跋渉記……五一五
春の月夜に北海の航行――海より低きロッテルダム市――萬國平和
會議々場の海牙府――水上の都府アムステルダム港――クルップの
製鐵工場――勤儉尚武の伯林――勤儉尚武の皇宮と寺院――勤儉尚
武の料理、寄席、見物人――シャロッテンブルヒの皇廟――ポツダムの
離宮――巧妙の廢物利用、伯林市の下水――出版業の都府ライプチヒ
――サクソン王國の首府ドレスデン――獨逸聯邦の一なる漢堡市――

自由港の濱堡――ハーゲンベックの動物園
スカンデナビヤの冬の旅……五六四
寢ながら海を渡る汽車――丁抹の國都コツペンハーゲン――一晝夜に三國を走る――諾威の王都クリスチヤナ――北歐名物の雪滑り――產業博物館と大學の古代船――諾瑞兩國の汽車――美なる瑞典の王都
氷上のバルチツク海横斷……五八四
ストツクホルムの解纜――アランド島間瞰――海面盡く氷結の壯觀――氷上航海に特殊の美觀――船中食堂の賑ひ
露西亞紀行……五九三
雪中のフインランド――結氷中の聖彼得堡――終歲主人不在の皇城――寶庫内の裸體像――壯大美麗を極むる寺院――感慨多きネバ河の對岸――夥多しき私生兒收容所――モスコーの舊都府――那物烈翁一世大敗北の遺蹟――寒暖計氷點下七度
第五編　亞細亞
西比利亞紀行……六一九

夜半の風雪、モスコー出發――時間異なる時計二箇――世界無類の特別なる汽車――踏み破る歐亞の二大陸――無事に困む車中の日課――最も困しき未明の乘換――滑稽軍事探偵――肉菜缺乏の大閉口――曉風殘月滿洲に入る
南北滿洲踏破錄……六三四
日露戰役中の哈爾賓――不愉快極まる東清鐵道汽車――露國鐵道の終點寬城子――南滿洲鐵道の沿道――奉天の北陵と故宮殿――相識の遼陽新戰場――遼河の咽喉なる營口――露人置土產の大連市街――腥風一掃し去た旅順の新戰場――花紅柳綠神州の快天地
附錄
海外旅行手びき
上　出發前の準備……一
最も有效に旅行する方法――旅行の時季――旅行の順路――巡廻の日程――旅行の經費――海外旅行券――準備すべき衣服――大小鞄と携帶品――手提小鞄中に容るゝ物――持參すべき土產物――同行者の選擇――豫め地理歷史の研究
下　出發後の注意……三

世界漫遊案内目次

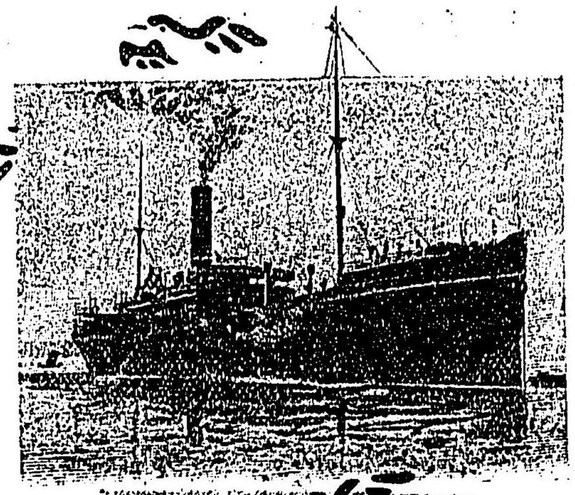
第一編　亞米利加

太平洋の航海

意氣衝天、横濱港出發

途中の汽船――途中の汽車――税關通過――ホテル到著――大使館公使館等訪問――市中の巡覽――巡査の厄介――貨幣並に郵券――歸朝の土産

水哉　坪谷善四郎著



世界漫遊案内

第一編　亞米利加

太平洋の航海

意氣衝天、横濱港出發

グワーン、グワン、グワンと打ち鳴らす鑼の聲は、船中に響いて、出帆準備を報せると、今まで船中に充滿したる見送りの人々は、急

いで棧橋へ降りて行き、暫時にして二度目の鑼で、船に架けられた橋も撤去けられ、船中の客は皆な甲板で欄に倚り、見送りの人は皆な棧橋に立つ。頓て船は動き出し、帽と手巾とは、送る人と送らるゝ人との間に掉り動かされて、互に告別の情を交換する間に、船は緩く港内を進行し、防波堤の口を出るまで、尙ほ遙かに棧橋の上で白く手巾の動くが見ゆる。是れ横濱港頭に、日本郵船會社汽船信濃丸出帆の光景。

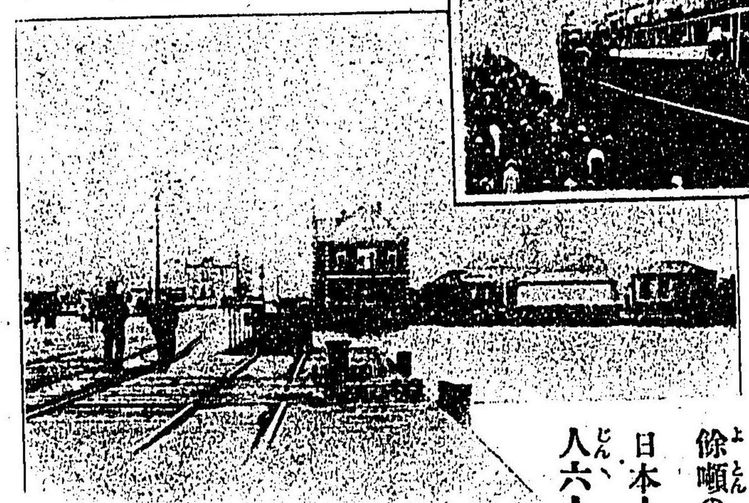
時は明治四十年九月四日の午後

船は港外に出て、客は船室に入り、小鞄を開いて輕裝に更め、山高帽が狩帽に變るとき、船は進行を停めた。何事かと出て見れば、船の背後から、水上警察署の小蒸汽船は、數十の白服巡査と、同じ數ほどの青衣の仕丁とを載せて追ひ來り、直ちに船中に乘り移つて何者かの捜索を始めた。三等船客は悉く甲板上に整列させ、一船客名簿に照らして居る間に、他の方では、警官數隊に手を分ち、船室、船倉、料理室から、石炭庫や煙突の中まで、殘る所なく捜したが、終に何者をも發見せぬ

らしい。聞けば外國へ密航を企つる婦人が無いかとの捜索であつた相で、之が爲めに殆んど一時間餘りを費やした。で、眞正に航進を始めたのは午後四時で、東京灣の口を出るとき、城ケ島の廻轉燈臺は、最早闇中に時々其の斷續する光を發ち始めた。

信濃丸横濱出發

横濱港棧橋



信濃丸は六千三百三十餘噸の汽船、一等船客は、日本人六人、外國人は婦人六人、男子五人、此外二等船客十二人は皆な日本人、三等船客三百五十人許りの大部分はまた日本人で、船中は恰も日本内地に在る樣だ。殊に一等船客中には、文學

博士姉崎嘲風氏、大阪北濱銀行取締役小塚蘇南氏など、久しい前からの親友が多い。船室の多い割合に船客少なければ、二人づつ入るべき船室を、一等客は皆な一人づつで占領し、誰に氣兼ねも要らず、殊に天氣は快晴で、波は穩かなれば、愉快此上も無い。

時は最早九月だ。で、余は夏服を携へる必要は無いと信じ、其の準備を爲なかつたが、出發間際に、雨後の殘暑燬く樣に激しいので、止むを得ず汚れた夏服を鞄の中に入れ、乘船後は之に著かへて、始て晩餐の食卓に出て見ると、卓は四に分れ、余等日本人は、事務長を主人として一卓に集まり、主人席の左側は、余が名を書て附けられてある。後に聞けば、席次は年齢順で定めた相だ。見廻せば何れの食卓も、主客とも皆な折目正しい黑い服の中で、余のみ汚れて皺くちやの白い服なので、面は少なからず赤くなつた。續いて困つたは、晩餐の料理目錄だ。美しく印刷して卓上にあるが、總て佛蘭西文で、毫も讀めぬ。食卓の席次は、一たび定めると上陸まで變更せぬもの、料理目錄は、世界何れの國でも、佛文で書くが例だと聞て、是から後が殊に心配を感じた。が、幸ひに隣席は、洋行に慣れた姉崎博士なので、一々竊かに聞て、ポタージ (Potage) とはスープで、オーフ (Oeuf) とは鷄卵だなど敎へられ、先づは無事に、曾て誰やらが、讀めない目錄を指さして、スープを二度注文したと云ふ樣な滑稽も無く、美味く晩餐を了すことを得た。

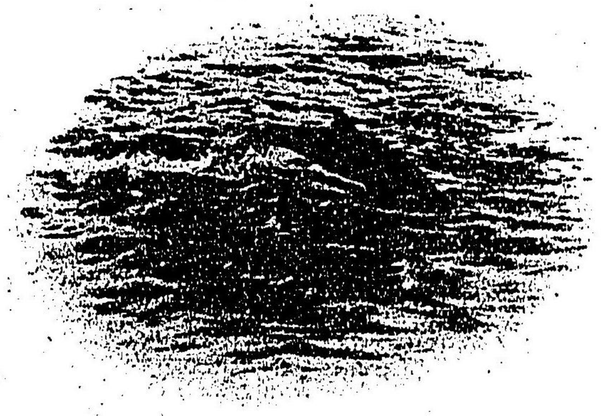
趣味多き船中生活

出發前、公私種々の事務取かた附けや、毎日の送別會に忙殺せられたとは反對に、船中の氣樂さ、信書の發著も無く、電話の送答も無く、當面に緊要なる用事は一も無いので、晩食後の喫煙室では、船客總て無邪氣なること小兒の如く、西洋人は骨牌を弄し、日本人は、圍碁、將棋、五目竝べ、或は懷舊談や失策談に、夜の深るまで語り樂しみ、蓐に入れば晝間の疲れで、前後も白河夜の船、浪風があつたか否や

毫も知らぬ。

翌る朝、船室の扉を姉崎君に叩き起され、壯觀！壯觀！早く出て見給へとの勸告に、倉皇甲板に出れば、今しも數千の河豚群が、横さまに數浬に連り、頻りに波間に出沒して居る。

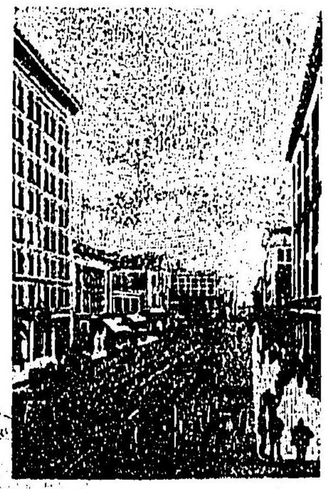
此の邊りは下總の銚子沖と聞けど、陸は遠くして毫も見えぬ。湯に浴し、服を改め、暫時甲板の上を散歩してから、朝餐の食*堂に入ると、缺席者が數人ある。海は穩かだが、航海の初日とて、多少船に酔ふた者があるのだ。余も食慾が少ないので、僅に「オーツミル」と「ライスカレー」一皿づつに、果物と咖啡で口腹を慰めた。



銚子沖の河豚

食後は甲板で、甲板球突と輪投げを試みる。昨夜は將棋で嘲風君に勝たが、今朝

は盡く負けた。朝餐の分量が少ない爲だらうと笑はれたが、午餐には、食慾更に無く、全く食卓に對はず、給仕に命じて水瓜を甲板に運ばせ、僅に渇を凌いだばかり。此日の午後も、河豚は列を爲して航路の前方を横ぎり、船は其の列の間を過ぐ。*

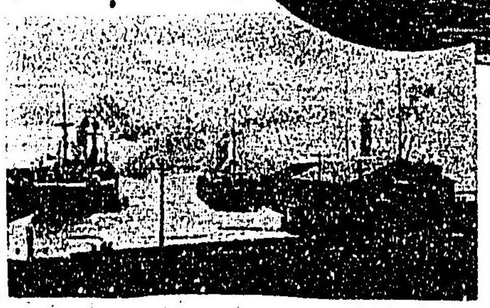


シヤトルヲ市第二街

湖シトンシヤ市ルトヤシ

*宛から敵の散兵線に對して突貫する樣で、無聊を慰むるには甚だ妙だ。

横濱から米國シヤトル港まで、途



港ヤリトクイヴ

中寄る所は英領コロムビヤ州のビクトリヤ港のみ。横濱ビ港間、四千二百六十浬。舊時は一直線に北緯三十五度から四十度の間を航進した相だが、近年に及び、斯くては地球の腹部の膨れたる線を過る爲に、距離遠しとて、今は北緯五十度附近まで北に偏して往來する故、余等の船も、頻りに東北に航進し、此日は本國の金華山沖の邊りを走ると聞けども、一點の陸地も見えぬ。また一隻の船にも逢はぬ。氣溫は昨日と同じく、正午八十三度、熱には困しめども、船には稍々慣れ、晩餐の食慾は大に進む。

茲に奇なるは外國婦人中に、三人一團の若き仲間がある。余等には何れも貴婦人と思つて居たが、何故か他の外國人は、彼等と言語をも交へぬ。唯だ機關長の外國人のみ接待の任に當り、食には卓を同くし、また球突き、運動などの對手ともなる。後に聞けば、其中には香港と米國の間を往來する醜業婦が居る相だ。それが一等船客中に居ろうとは、洋行赤毛布の余には、先づ一驚を喫した。

航海中氣候の激變

翌る日も、其翌日も、また次の日も、朝起きて入浴し、運動後に朝餐を了し、余等は雜談、將棋、五目竝べ、西洋人は骨牌などを弄し、朝から夕まで雲と水との外、何物をも見ざること一日また一日、毫も變化なく、變るものは唯だ次第に北に進んで、暑熱漸く減じ、五日目には、最早北海道の千島と竝行し、正午の氣溫六十一度に下りたるに驚くのみ。此日午餐の鰻の蒲燒は、甚だ奇らしく、其夜の食後、蓄音機で、東西の音樂戲曲の演奏も面白かつた。

熱い熱いと前日まで、暑熱に苦しんだのが、六日目から急に寒くなり、人々皆な衣服を更め、毛布を取り出し、外套を著る中に、其等の防寒衣を大鞄の中に收めた者は、乘船の即日船艙中に大鞄を入れられて、此日まで一回も出すことが出來ぬので、急に荷物係りに囑みて、船艙を開くと報ぜられたのが九日の午前十一時。余等

は細い鐵の梯子を降つて、恐わごわ艙中に下るに、外國婦人客は、寛い袴を掉り展げながら、平氣で梯子を降りるには、頗る感服だ。其時余は大鞄を開いて、先づ失敗したのは、自宅を出るとき、黑の山高帽子を邪魔だと思ふて鞄の中に入れて置いたが、船中で搖り動かされ、まだ一回も冠らぬ前に、散々に潰れ、羅紗の裂けたる所もある。此日から船室は、蒸氣を通じ、窓掛も黑羅紗に改めた。斯かる寒い中にも、三等船客の壯丁連は、甲板に出て、綱曳き運動の遊戯に、五六十人づゝ左右に分れ、露西亞人の三等客なども交り、曳々聲して輸贏を競ふ樣、勇ましとも勇ましい。

十日の朝、空晴れて日光耀く。此三四日以來の天氣が、雨こそ降らねど、日光を見ること稀なれば、今朝は皆な春が來たと喜び、甲板の上に運動したれば、午餐に饗せられたる日本料理は、珍らしきが上に、味ひ最も美、薩摩汁に薯蕷汁、奈良漬の瓜、茄子の芥子漬など、連日肉とパンのみ食べたる口には、米の飯とともに舌を

皷して賞味した。翌十一日は、氣溫再び下り、正午四十六度、宜なる哉今はカムサツカの東北方、アリシヤン群島に近く、正に北緯四十九度四十五分の地點を走り、午後二時には百八十度の想像線を過ぎたのだ。

同じ日の二日續き

英京倫敦のグリニッチを起點として、西に百八十度を西半球、東に百八十度を東半球と爲し、今や余等の船は、此の東西兩經百八十度の地點を過ぎ、西半球に入らんとするのだ。東に向つて世界を一週する旅客は、日々に時計を少々づゝ進めるので、其の出發點から元の出發點に歸るまでの間に、毎日進めた時間が集つて、一日だけ多くなり、西に向つて世界一週の旅客は、之と反對に、一日だけ減ずるのが例だ。で、其等の旅客が、東に行く者は百八十度經過の翌日再び同じ日を重ねる。即ち余等は、九月十一日の水曜日に、百八十度を過ぎたので、明日もまた九月十一日

の水曜日だ。之に反して西に行く者は、此所を過ぐるごとに一日飛び越えて、九月十一日に過れば、翌る日は九月十三日と爲るのだ。

此邊はベーリング海峽から來る寒流と西南から來る黑潮の暖流と會合し、爲に海霧を生じて、航路の前方明かならねば、船は頻りに汽笛を鳴らし、萬一前方より來る汽船と衝突の災害を豫防しつゝ走る。但し横濱出發以後、此時まで、一隻の船にも逢はず、一塊の土をも見ぬ。目に入るものは唯だ波濤の澎湃たると、蒼天の茫々たると、時に信天翁が、高く低く船の前後を翱翔するのみだ。

船中一日の樂しい課業

コツ〳〵〳〵、(戸を叩く音)『お早う……お湯が出來ました……』

湯番のボーイは入浴の準備成れるを報ず。時は午前六時三十分、寢床を出て、理髮具を携へ、直ちに浴室に赴く。湯は海水で、溫熱自在に加減するを得、別に淡水

は、石鹼とタオルとを添へて備へらる。浴し了つて船室に歸れば、室附きのボーイは既に寢床を片附け、靴を磨き、紅茶に砂糖にミルクと燒いたパンとを添へて運び置く。是れが毎朝の例だ。

齒を磨く。口を嗽ぐ。三日に一度位は髭も自ら剃る。船の動搖するとき、床机に腰かけ、簞笥の上に懷中鏡を立て、怪しげな手つきで剃刀を持つのは、自分ながら危險と思へど、同船中に、腮髭伸ばしたる客は一人もないので、力めて「ハイカラ」を粧はざるを得ぬ。幸ひに慣れては負傷もせず、先づは顏と頭との準備出來、衣服を更めて靴を穿くまでに、起き出てから約一時間かゝる。

一＝二＝三＝四＝五＝六＝七＝八＝九＝一〇＝一一＝一二

と、稍やく數日來姉崎博士から覺えた佛蘭西語の數を暗誦しながら、食堂甲板の上を廻ること十五六回、殆ど一哩許を歩行すれば、三十分時經つ。忽ち食卓準備の鑼の聲に、まだ七時半には早い筈だがと、自分の時計を檢すれば、正七時だが、食

堂の時計は正に七時半。是は船の東航するに隨ひ、毎朝二三十分時づゝ航走浬數に比例して、船中備附の時計の針を進める爲だ。驚いて自分のも針を進め、尙ほ暫時運動を續ければ、頓かて八時半の食卓開始は、また鑼で報ぜらる。

食堂に入て定りたる卓に著けば、毎食の料理目錄は印刷して卓上に備へられ、其の目錄には、毎回意匠を凝らし、二つ折りの半分は繪葉書として、船中食堂の光景や、横濱港または、ヴイクトリヤ、シヤトルなどの風景を、豫め美麗に石版で印刷し、または一枚刷りの稍や廣い石版繪の中へ、料理目錄だけ、日々に船中で印刷するのだ。食後、客は繪葉書を切り離し、紀念の發信に使ふことが出來る。

朝食後の數時間は、婦人室に「ピヤノ」の聲も起り、甲板の籐椅子に、仰いで小說を讀むもある。余は食堂内の卓に對ふて日記も書き、手紙も認めるが例だ。幾ばくもなく十二時の鑼は、また食卓準備を報じ、零時三十分には、午餐の食卓に向ふ。朝餐と午餐の間は、僅に三時間半ほどなので、食慾は兎角進まない。

午餐後、誰れも彼れも先づ往て見るは、日々に階段の上に掲示せらるゝ正午地點の報告だ。是は其日正午の、天候、船の位置、昨日以來の航走浬程、出發以來の距離、及び到著地までの距離等を報ずるのだ。玆に九月十二日の例を示せば、

天氣、曇り、北緯四十九度、五八＝西徑百六十六度、一五＝昨日以來の航走二百六十三浬＝横濱から二千五百十三浬＝ビクトリヤへ一千七百四十七浬、＝氣溫五十二度＝海溫五十度

之を見て船の速力が早いとか遲いとか評しつゝ、時に欠伸の聲も聽え、また船室に入て午睡を貪ぼるもあれば、喫烟室で骨牌を鬪はすもある。元氣の好き者は、甲板の上で輪投げ又は甲板球突きなどを試みる。輪投げとは、凸字形の的に對し、三間許りの距離を隔てゝ數個の輪を投げ、的の中心に立つ棒に箝める數の多きを競ふ遊戯で、是も隨分運動にもなれど、其れよりも一層多く身體を運動するのは、甲板球突きだ。是れは甲板の面に一定の區劃を設け、若干の距離を隔てゝ、徑三寸、厚

さ五分許の圓き板を、棹の先きで突き、目的の區劃内に入るゝ數の多きを競ふのだ。球の板は、赤白の二種に分ち、各六個づゝあり、之を突く棹は、短艇の櫂の如く、長さ六尺許の圓き木の握り太なる棹の、尖頭五寸ばかりを幅三寸ほどに廣げて平たくしたのだ。之を四間位の距離で突くには、仲々膂力が要る。方法は種々あるも、其の一種は、目的の目劃を一から九までと、別に一の十と十の十とに定め、其の球の入りたる區域を以て得點とするのだ。辛ふじて七八點を得たる後、次の球が一の十に入た爲に得點が零と爲る上に、尙ほ一の二三點を償却せねばならぬ事などあつて、雙方二人づゝ位に分れても、五十點も勝つには、仲々の勞力が要るので、消閑と運動とには甚だ妙だ。

『食堂にお茶が出ました』。＝是は毎日午後三時半に、ボーイが報じて來る例で、出かけて往くと、食卓の上には、紅茶と砂糖とミルクの外に、カステーラなどの菓子が添へて在る。是れが陸上の「お八ッ」の茶菓だ。

午後六時の鑼が鳴り、また晩餐の準備を報ぜられると、外國人は多く衣服を更めるが、無頓著な日本人は、船室内で鏡に對し、チョッと髮を櫛けづる位が最上の然強だ。尋で六時半、定りたる晩餐の食卓に著く。料理は何時もスープに始まつて果物と菓子とに終り、其の種類が約二十種位、何れも客の選みて命ずるに任せ、飲料は客の注文に應じて供し、毎次注文の小紙片を請ひ置き、後に代價を請求するのだ。外國人は、何所までも獨立自由主義で、銘々料理目錄を熟視して、好きな物を命じ、決して他人に雷同する事は無いが、日本人は能く氣が揃ふて、『君の其れは何？旨そ相だナア、では僕も其れとしよう』などゝ、二人も三人も同じい物を飲み食ひするのは、外國人から見れば奇異に思はれて居るらしい。

晩食後の倶樂部は、概して喫烟室で、其所には數個の卓を圍みゝ各三四個の圓椅子が備へられ、碁盤、將棋盤、西洋將棋、智惠の輪などの遊戯具が數多ある。また傍に酒舗があり、酒、烟草、其他各種の飲料も具はり、賭で敗けた者、または談話

中に此等消費品の必要を感じたる者は、何時でも求むることを得。室の外には、郵便函も掲げられ、信書は其の中に投げ入れ置けば、船が目的地に到著の數分時前に、函を開いて内外の發送地に配り送るのだ。

西洋將棊の組織は、日本の將棊と略ぼ似たるも、王の傍に女王あり、女王は、日本將棊の飛車、角、金、銀、何れの作用をも爲し、縱横無盡に戰場を駈け廻ること、巴、板額、ジョアンダークの諸勇婦の如く、奎馬は、前後、左右ともに、奎馬飛びに飛び廻り、京車は、飛車の如く、縱にも横にも飛び、此の三勇將が最も勇敢に戰ふのだ。金銀と飛車とは無く、角のみありて日本將棊の角と同じく、歩兵は第一線に整列し、捕虜は再び使用せず、敵陣地に入ても、成るといふこと無ければ、成金といふ語は、此の將棊には無意味だ。但し歩兵の前進して敵陣の最極端まで進みたるとき、一躍して女王となる。待合の女中が奥樣となりしよりも一層甚しき出世だ。

斯かる遊戯に時を消して、毎夜船室に入るのは十時を過ぎ、疲れて眠れば、夜な

夜な猾鼠が船室内に現はれ出で、陸上から携へた果物などを貪ぼり喰ふも、殆ど之を知らず、之を捉へさせんとて、料理室に飼ふた猫を雇ひ來ても、小猫で用を爲さぬなど、また船中の好話柄だ。船室内は、蒸氣で温められ、毫も寒を知らず、また電燈が輝いて、晝間より明かだ。實に船室内の晝間は、窓の光線淡く、細字の書を讀む能はざるも、夜間は如何なる細字も讀むを得。去りながら運動と遊戯とに忙しく、退屈を感ずる暇も無きだけ、陸上にて計畫したる幾多の勉强は、船に入ては全たく空想に歸して了ふ。

愈いよ北米大陸へ到著

十七日の午後三時、先づ左舷に鋸齒の如き山影を認め、續いて一隻の帆船を發見し、ヤア陸！、ヤア船！と騷ぐ間に、山は次第に長く連なり、船は二隻三隻と出現し、漸く英領コロムビア州の晩香坡島に近づく。明朝は同島のヴイクトリア港に投

錨すると云ふので、此夜船客一同は、三鞭酒の盃を擧げて、船長の勞を謝した。食後は拭ふが如くに霽れたる半輪の月を仰いで、甲板の上には歡聲沸くばかりだ。翌る朝眼を覺せば、船は既に合衆國領を右に、英領を左にして、英領のウキルリヤムヘッドに投錨して居る。見渡せば近き陸地は盡く眞ッ直ぐな亞米利加松の林に蔽はれ、遠き山々は最早腰の邊まで雪を戴いて見ゆる。

斯くして十有七日間、四千三十海里の航海、一回の船暈も感せず、食卓の出席も缺かさねば、毎朝の入浴も休みしことなく、元氣に、愉快に、余等は暫時此所に上陸して、始めて暫時米大陸の土を踏むことになつた。此所からまた六時間で愈よ北米合衆國ワシントン州のシヤトル港に上陸するのだ。で、航海中の所感、一言洒落て言へば、案じるよりも海が易い。

洋行の準備は成る丈輕裝を可とす。歐米各國到る所、如何なる必要品も求められざる無く、而かも品質好く、流行に適ひ、價も高くなし。然るを無人島へでも行く樣に、旅中一切の著替から、シヤツ、靴下類まで、邪魔な思ひして携へるは、念が入り過て滑稽なり。

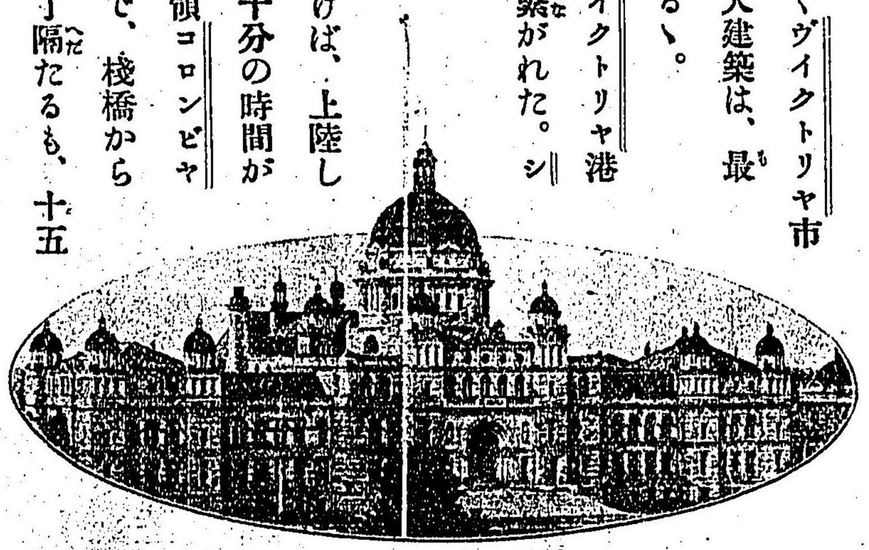
米國の西海岸

ヴイクトリヤ港暫時の上陸

十七日間、秒時も間斷なく走り續けた船が、今は始めて碇を投じた。平生より一時間早く、六時半に打ち鳴らす鑼の聲に喚び起され、甲板に出て見ると、米國船インヂヤナ號が、布哇から晩香坡行の日本移民を滿載して、同じウイルリヤムヘッドに、余等の信濃丸と近く、碇を下して居る。其の彼方の丘の上に、粗末な建物の見ゆるのは、傳染病者の隔離室で、何れの船でも患者を上陸せしむる所な相だ。檢疫官が來て、信濃丸の乘客一同を檢して去り、更にインヂヤナ號に行た。信濃丸の船客中で、加拿太行の勞働者は、皆な此所に上陸したので、三等船客の方は急に寂しくなつた。彼等の上陸を見送りながら眺むれば、東南方の陸地は、皆な松林で、而かも日本の松とは違ひ、眞ッ直ぐに天を指して茂る。遙に東方の山頂は雪を戴いて

居る東北方に近くヴイクトリヤ市の政廳や寺院の大建築は、最早歴々指點せらるゝ。

船は進んでヴイクトリヤ港に入り、棧橋に繫がれた。シヤトルへの解纜は、此日の午後四時頃と聞けば、上陸して見物するには十分の時間がある。此所は英領コロンビヤ州政廳の所在地で、棧橋から市中まで、四五丁隔たるも、十五分毎に發する電車ある故、余等日本人六人、直ちに上陸して其の電車に乘り込んだ。五仙均一の乘車賃も、六人以上は割引があつて、六人で二十五仙だ。普通は乘車券なく、乘替にだけ乘替券を渡すが、而も六人に對しても唯だ一枚だ。



ヴイクトリヤ市の州廳

北米大陸の土は、始めて踏んだので、見るもの盡く珍らしく、市街廣く、建築大に、店頭裝飾の巧みなる、或は木を敷いた道路や、石造の政廳や、郵便局で、お婆さんの書記が、繪葉書まで賣て居るなど、一々感服を連發して、正に是れ赤毛布の東京見物といふ體裁だ。此地に日本人の店は、僅にドグラス街に大阪人河合某と、外に一軒あるばかりで、二軒とも陶器や雜貨を賣て居るが、何れも其の規模は甚だ小だ。

此の邊りは支那人部落だ。『南京蕎麥を喰はふで無いか』と、誰やらが發議すると、一同忽ち贊成で、直ぐに二三の支那料理店を訪ふたが、時はまだ午前十一時、何所でも午後二時過ならでは出來ぬと斷はられ、今は名物の果物を買ひ込で、之を小脇に抱きつゝ、將に本船に歸らんとする途中、余は政廳の撮影に夢中に爲り、トウトウ一行に遲れ、上陸劈頭先づ失敗の皮切りを始めた。

午餐を船中で了し、再び上陸して、ベーコン丘の公園に遊び、自然の丘陵に、日本の春花秋草が、此所では一時に咲き香へるに驚ろき、去て林間の動物園を覗き、

に政廳の傍の動物博物館に入ると、入口に掲示があつて、『傘は何卒此所に置いて下さい』(Please leave umbrella here) とある。一語先づ其の慇懃なるに感服した。

此夕發すべき余等の船は、荷揚人夫缺乏の爲に、時間遲れ、日暮れても未だ纜を解かぬ。船中から眺むれば、此所はシャトル、晩香坡及びアラスカ往來の汽船が、皆な通過する所とて、出船入船甚だ賑はしく、忽ち見る白色三階にして無線電信機を備へた三本烟突の汽船が、十七八浬の速力を以て客を滿載して矢の如く走り去る。開けば是れシアトルからアラスカに行く船なる相だ。近時アラスカ鑛業の盛んなることが、是でも其の一端を察せらるゝ。

シヤトル上陸の大困難

翌る十九日の朝、起き出れば、船は最早ヴイクトリヤ港から六時間の航程を走つて、ポート、タウンセントに碇泊中だ。西南を望めば、海岸に大市街が横はり、所

所に、山の如く木材を積で居る。是れが即ち米國太平洋岸北方の要港シヤトル市だ。昨朝は英國檢疫官の檢疫を受けたが、今はまた米國に入るに臨み、檢疫醫、移民官など、交る交る入り來り、更に嚴重なる檢疫と「トラホーム」の有無を檢査する。面倒なる旅券の取調べも了り、無事に入國認可を裏書せられ、余等は始めて上陸することゝ爲た。

時に船客中に一少女が居る。東京新橋竹川町の花月樓女將の女で、芳紀十四歲、女優になりたい志願で、シヤトルの日米タイムス記者藤岡某氏に托せられ、此所まで來たのだが、年齡が幼い上に、保護者が無いとて、上陸が許可せられぬ。航海中は大元氣の少女も、此れには大いに困つたが、藤岡氏先づ上陸し、在米日本人の領袖山村音高氏と謀つて、同氏自ら責任を負ひ、保護者と爲て引取ることゝし、少女は漸く上陸が出來た。余等も上陸した。が、更にまた稅關の通過が容易で無い。何人の行李も、一々開いて底まで盡く檢査する。同行の姉崎嘲風君は、各國で講義の資

料にと、携へたる雜誌國華を、美術品として巨額の税を課せられた。余も英文で書いた營業案内の小冊子が四五百部あるので、英文の出版物だから有税品と見認むるとて、評價人を呼で評價の濟むまで、通過を許されぬ。而かも評價人は其所に居らぬ。其の來るを待つ間に、同行諸氏は先發してホテルに行き、余は後に殘された。午後に評價人が來て、二弗ばかりの關税を徴せられ、其れが濟んで、始めて北米大陸の旅客と爲り、シアトル市第二街の、バットラーホテルに入た。

膨脹急遽のシヤトル市

八年前には人口四萬三千と數へられたシヤトル市が、今は最早二十五萬を算し、二年後には大博覽會を開くといふのでも、如何に其の發達が迅速であるかゝ推測せらるゝ。で、現在の日本同胞も約七千人あり。其中から、シヤトル商業會議所會員が四人あるといふので、此地の日本人は、甚だしく米人間に排斥せられて居らぬ事も

分る。が、日本人には土地所有權無く、買はんとするには、米國人と合名ですのだ。

此地が斯く俄かに膨脹したのは、大北鐵道が、北米大陸を横斷して來て、更に我が日本郵船會社と聯絡し、東洋へ往來する旅客や貨物を吐呑する咽喉と爲た上に、アラスカやシベリヤが、近年俄かに開けて、其所へ往來する關門とも爲たので、人口は日々夜々に殖えるのだ。で、本來海岸の丘陵に沿ふて開けた市街は、今は盛んに市區改正を實行し、高い所は五十尺も切り下げ、低い所は三十餘尺築き上げ、其等の作業は盡く機械を働らかせて、在來の家屋は營業して居ながら、下から徐々と押し上げる。道路の低い所は、先づ橋の如くに下方を空虛にして築き上げ、後に木材の斷片を空所へ運んで塡めて居る。此の附近一帶は頗る木材に富むので、家屋も倉庫も、道路橋梁も、多くは木造で、時とすると道路が火災で燃んに燃る奇觀もある相だ。

市の水道は、二十八哩を隔つるシイラ川から引き、貯水池を公園に利用し、また水力電氣を市自ら經營して電燈に利用し、交通機關は電車の外にケーブル車もある。市費の財源は、水道、電燈の收入と、財産税とで、其の税率は、實價百分の三許を收むるのだが、收税吏が來て、屋内を見廻し、好い加減に評價するので、主人が出て話しながら、葉捲烟草の二三本も與ふれば、千弗の財産を三百弗位に定めて行くといふ。

余等のホテルバットラー附近は、市内第一の繁華地で、ホテルは六階の石造だが、余等が三階の室まで、昇降機で釣り上げらるゝとき、同じ函中に米國婦人が居るので、日本人のボーイから、帽子を御取り下さいと注意を受けた。但し此家には、給仕ボーイとも、總て四十人の日本人が居るとは、以て同胞發展の盛んなるにも驚く。對ひ側は、アラスカビルデングと云ふ十三階の巨屋で、日本の領事館は、其の五六階の後ろ側に、僅に二室を借りて、事務を取て居るのが甚だ心細い。

此夜月下に市中を散歩すると、市區改正工事が、夜間も電燈の下で作業を續け、高い丘陵を崩すのに、水道の水を木造の長き管で運んで來て、喞筒で噴水を注射して崩しながら流し去り、其の崩した泥水は、直ちにまた海面に流れ出て塡め立てと爲り、一舉兩得の結果を收めて居る。之に從事するものは、僅に喞筒の口を動かす人夫二人切りだ。斯くて埋め立てた土地は、間口二十間、奥行六十間ばかりを一區劃として賣り、其の賣買價格は大約三百弗位な相だ。

去て日本料理店『まねき亭』の小宴に臨む。余等の席は二階で、座に日本婦人が五人待べる。其内に女將と他の二人とは、何れも大阪人だ。で、此家が、一に『大阪ホテル』とも呼ぶ理由も知れた。料理には、名物の蟹や牡蠣と鮑の酢の物など、椅子に腰かけながら膳に對して箸を運ばせるのだ。時に三階にも客があり、三味線の聲が賑かだ。余等は其夜十時に歸つたが、翌る朝聞けば、昨夜半、此家に殺人犯罪あり、被害者はアラスカの金鑛から歸つた日本人で、前夜余等の頭上で、彈かせた

り歌はせたりして騒いだ客が、卽ち其れで、懷中した五百弗ばかりの金が仇敵となり、途中から黑奴の强盜に附け覘はれたのな相だ。

新開地は物騒だ。去れども恐い物は見たい。同夜余等は市内の暗黑部落を覗いた。勸工場の樣に區劃した二階三階の室々に、白人も居る、黑人も居る、中に黃いろい人種で、紡績工場の女工の如き服裝して、「シャグマ」とか云ふ髷を結ふた若い婦人も並んで居るのを見た時は、急に恥かしくなつて逃げ出した。門前には雲突く樣な巨漢の巡査が、麥酒の看板の樣に腹を膨らせて、紺羅紗に金釦の制服著ながら、ノソリ〳〵と月下に徘徊して居たが、余等を案內した友人が、路を聞きながら、彼れの背後にしたる掌中へ、葉捲煙草を一本握ませると、彼れは親切に大通りまで連れて出た。

日本から余等と同船したる三井物產會社員尾上金吉氏は、慶應義塾出身で、曾て尾道商業學校に敎鞭を執り、今は任に紐育に赴く途中だ。翌る朝直ぐに大北鐵道で

出發するのだ。會たまシアトルに、尾道商業學校出身の青年が數人ある。彼等はホテルの給仕や、商店の書記で、夕刻は暇なきまゝ、氏が出發の早朝、バットラーホテルに集まつて、歡迎兼送別會を朝餐の席に催ほした。ヨシヤ晩餐會の樣な十分な時間と御馳走とは無くとも、此の如き忙しい間に催したる此の誠意の籠つた會は、日本の敎師と學生間の情誼を遺憾なく發揮して、傍で見るさへ嬉しかつた。

翌る日自働車で市中を駈け巡るに、市街の大通りを除けば、高低不同で、郊外は概ね高丘だ。キヤピタル丘に登り、ボランチーア公園に水道貯水地を利用したるを眺め、轉じてクイン、アン丘まで一週し、一力亭と呼ぶ日本料理店で午餐を了し、午後は鋼索車で小丘を一とつ越して、一哩ばかり隔つるワシントン湖に遊ぶ。湖は四方を小山で圍み、我が箱根の蘆の湖より大で、夏時の浴場もあり、ボートを漕ぐ遊客も多く、眺望は甚だ好い。鋼索車は片道十五分で達す。沿道は盡とく新開の村落、新築の木造で、廣い庭園の附屬した小さな住宅が多い。また市中には、新開地だけ

に、不動産賣買紹介業者が到る所に多く、其外には齒科醫が多い。

北太平洋鐵道の汽車

桑港行の北太平洋鐵道汽車が、シャトルを發したのは午後五時、此驛には、赤帽を冠つて旅客の手荷物を運ぶ日本の青年が數人居て、余等の爲に親切に車室の世話をして呉れた。汽車は、シャトルから桑港まで約一千哩を四十時間許りで達するのだ。で、乘車賃一等一人二十六弗六十五錢。其の構造は、客車十五六輛連ねて、一車ごとに黑奴の給仕が一人づゝ附屬し、一車中、左右六室づゝの寢臺を設け、寢臺は上下二段で、中央を通路とし、寢臺の前通は左右から幕を引き、中央を釦で留めるのだ。燈は瓦斯を用ゐ、喫烟室は洗面室と接續し、便所も其所にある。洗面所には、一度づゝで使ひ棄てる手巾が、數十枚積み重ねられ、姿見鏡、櫛、石鹸などの、化粧具は遺憾なく具はり、便所には大く卷た紙もある。客車は一車ごとに名があつ

て、車内の席次には、一席ごとに番號がある。で、それを記憶して居れば、汽車中で迷ひ兒となる心配が無い。婦人客には紙袋を渡すので、何の用かと見れば、帽子を入れて上に吊すのだ。成程高價なる鳥の羽を華美に飾つた婦人帽は、下に置けば直ぐ破損するから、之が保存は困難らしい。

シャトルを五時に發し、六時タコマを過ぐ。此所は海灣に臨んだ市街で、棧橋には大汽船數隻繫泊す。暫らくして汽車はコロムビヤ河を船で渡る。如何にするかと見て居れば、全列車を三段に離して、三列と爲し、前方から順次に一大汽船中へ積み込み、頓て船は河上に漕ぎ出した。此夜恰も中秋の明月、空は殘りなく霽れて、磨き出したる鏡の如き月の光りは河水に映じ、金波動き、銀龍游ぐ所、涼しき川風に面を吹かせるの樂しさ、何とも言へぬ。

食堂車に入れば、給仕は皆な黑人で、日本人に對しては輕蔑するらしい。食品の分量は何れも多く、一皿で二人分は十分だ。で、二人以上一組の客は、互に異なる

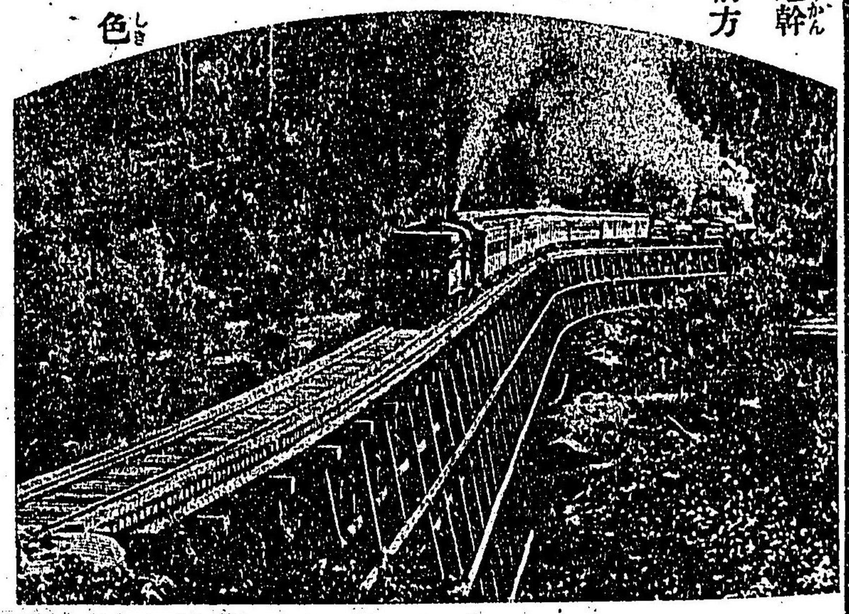
物を注文し、分けて用ふるが普通だ。是れは旅客の多くが夫婦同伴者だから、寢臺でも、食物でも、夫婦同伴客を本位として定めてあるのだ。空氣が甚だしく乾いて居るので、氷塊を用ふること夥多しく、到る所の驛々で盛んに積み込み、水と言へば必ず氷を加へる。また果物は北米西部の名物だけに、水瓜、甜瓜、林檎、杏など、果實大に、味ひ美で、日本内地では類の無きが多い。車中の物價は、牛肉一皿五十仙、スープ二十五仙といふ比例で、分量多く、且つパンや氷水は無代だから、割合に廉い。食堂の給仕には、通例仕拂額の十分一を與ふるが例で、車室附給仕には、二晝夜位の距離では、一弗與ふるが普通な相だ。此の車室附給仕は、寢臺の始末や、靴磨きまで、親切に自ら始末するのだ。

夜が明れば、汽車は最早ワシントン州を過ぎ、オレゴン州を走つて居る。日本へも多く輸入せらるゝオレゴン松の本場として、汽車は山間を走るに、山は蔚く森林で、松、樅、檜などの老樹が、何れも眞直ぐに立て、高さ百五十尺以上なるを常とし、天

を摩するばかりの眺め、日本の松の樣に老幹蟠屈の趣味無きも、仲々に壯觀だ。頓て前方遙かに雪を戴いたシヤスタ山が見える。高さ一萬四千四百尺、富士山より一千七百尺高い。汽車は次第に山に近づき、後には曲折迂廻して、其の山脈を過ぐ。最高所は三千六百尺といふ。

此日は終日シヤスタを望み、夕に其の麓を過ぐ。牧場數十里に連なり、數百の牛は、閑に夕陽に眠る。牧草綠に、滿天蒼く、山嶺の雪は其の間に白いので、色彩の配合殊に美だ。

シヤスタ山間の北太平洋鐵道汽車



此夜八時、シャスタスプリング驛に著き、暫時停車して見物させる。此所では、炭酸鑛泉の噴出するを利用して、ホテルを設け、瀑布を導き、水力電氣で電燈を點じ、水上には紅紫色々の燈を配置して、光彩陸離、極めて美觀だ。會たま月明かに風清く、最も旅情を慰む。覺えず一句『汽車千里カリホルニヤの月見かな』と口吟んだ。

此所は最早オレゴン州を過て、カリホルニヤ州に入たのだ。

翌る朝、未明に鷄の鳴く聲を聞く。言語風俗の耳目に入るもの、一切本國と同じからざる中に、毫も本國に違はざる鷄の聲を聞たときは、一種奇異の感に打る。頓てサクラメント河を過るとき、また列車を汽船に積で渡る。斯くしてオークランドに著けば、其所は桑港灣の岸で、桑港市は灣の對岸に見ゆる。此所の海中へ長く築き出した棧橋で、汽車を乘換へたと思へば、實は然らず、早くも渡船の中に在り。渡船と云ふも、宛ども停車場の如く、三階で、幅廣く、數多の椅子は配置せられ、酒舗もあり、食堂もある。其の船で走ること二十分間で、早くも桑港市の渡船停繫所へ著た。

整頓せるホテル

ホテル到著と客室選定

曾て日本紳士の一行が、二三人で先づシャトル港へ上陸し、市内第一等のホテルへ著き、室に就ての談判が濟むと、給仕が案内して、小さな箱の樣な室へ入れた。周圍には大きな姿見鏡があり、下は氈毹を敷き、隅の方に椅子もある。其れにしても數人の客を容れるには狹い樣だと怪しんで居ると、間も無くまた『何卒御出で下さい』と云ふので、一行中の一人は大いに怒り、『ナンだ、此んな狹い室へ入れた上に、這入たかと思へばまた直ぐに出ろとは何事だ、我々日本人を馬鹿にするか』と叱つた。何んぞ知らん其れは室で無く、昇降機の中へ入れて、下から四五階の上へ、徐々と釣り上げたのを、餘りに靜かに動かすので、一向に氣が附かず、最早室へ通されたと思ひ違ひしたのだと云ふ實話もある。實に四五階乃至は十數階の上まで、

昇降させるにも、總て此の通りに、頗る完全に出來て居るのが、外國のホテルだ。

實にホテルは外國旅行中、日々夜々の家庭である。其の待遇が親切で、萬事が意に適へば、旅行の趣味は何とも言へぬが、若しそれが不完全では、旅行の不愉快は此上も無い。で、各國のホテルは、皆な如何にせば旅客を樂ませることが出來るかと、苦心に苦心を重ねて居る。

客が停車場へ著くと、大きなホテルの馬車又は自働車は、其所へ迎へに來て居る。ホテルの名を呼ぶと、其ホテルの搬荷夫が、飛で來て、大小の鞄を世話し、馬車又は自働車に積み込み、客も其の中へ乘せる。馭者は一と鞭あてると、馬車は走つて、ホテルの玄關先に著く。スルと中からまた他の搬荷夫が飛で出て、靴を帳場の前に運ぶ。帳場には、支配人が、客の名簿を前に置き、客室の圖面と鍵とを後ろに備へ、チヤンと待構へて居る。

客がホテルへ著くと、先づ客室の有無と、室代を交渉する。室には第一階から、二

階三階乃至は五階十階とあつて、一階二階が最も高い。日本で云ふ二階が第一階だ。で、上になるほど室料が廉い。また浴室附は別に其の料金を拂ふのだ。同じ室でも、食事代は歐羅巴風と亞米利加風といふ區別がある。歐羅巴風は、食事無しで、客は、外に出て食事するとも、又はホテル内で、別に食事料を拂ふて食堂に入るとも隨意だ。亞米利加風なれば、室に食事料を合せ、一日何ほどと定めてある。

また室の選擇にも、一室に一人もあり二人もあり、普通は一人一室で、二人以上は夫婦と小兒が多い。友人の同行者あるときは、二室連接を選むのが便利である。其の客室の交渉が濟むと、客は支配人の前に備へた宿泊人名簿の中へ國籍と氏名とを自ら書き、客室の番號が定まり、其室に屬する鍵を渡され、給仕の少年が案内して、例の昇降機で、二階、三階、乃至五階六階と、客の所屬の階上まで運び揚げられ、それを出てから定められた室へ行き、愈いよ客室内の主人公となるのだ。

大なるホテルの客室は、五百乃至七八百なるもある。其の室の番號は、第一階を

百番以下、第二階を二百番以下といふ樣に定め、ヨシや第一階の室の數が五十か六十でも、第二階には百一番から起るが多い。是は、一百何番と云へば二階、二百何番と云へば三階と、分り易い爲だ。

偖、室に入ると、煖爐と寢臺と椅子とが、來客用とも二個乃至三個、別にテーブルにインキ壺と、用紙と狀袋、吸ひ取り紙などが載てある。裝飾の油繪額も一二面は懸り、電燈と電話と呼鈴もある。洗面器、石鹸、手巾が二個、大きな水指と水こぼし、小さな水呑などがある。客が室へ這入ると直ぐに、搬荷夫は大小の鞄を昇降機で吊り揚げて運んで來て、室へ入れて隅の方へ片附け、鞄の皮帶を外しなどして手傳つて居る。此時に客は先づ搬荷夫に若干の心附を遣はさねばならぬ。次に室附下婢が來て、水さしの水を運ぶ。湯を命ずれば湯を持て來る。尤とも湯殿附の室なれば、隣室に、湯槽があつて、栓を捻れば湯でも水でも自在に出る。其の傍に便所もある。若し湯殿附で無いと、先づ便所の所在を尋ねて置く必要がある。客室には

皆な番號があるが、便所には無いから、一度行けば大抵覺えられる。

斯くして室に入り、上衣を脱ぎ、便所へ行き、顏も洗ふて、衣裳を改め、椅子に腰かけると、これから後の滯在中は、此の室が實に自分の家庭である。が、吳々も室の番號を忘れてはならぬ。若し忘れたならば、外へ出てから、廊下で迷ひ兒とならねばならぬ。また外出には、必ず扉を鎖し、鍵は支配人室へ托して置き、歸つて受取るが普通だ。

最も注意を要する食堂

食事には外へ出て、他の料理屋へ行くも宜いが、毎日々々出るのも厄介だ。殊に雨の日などは出るのが甚だ厭やだ。此の時にはホテル内の食堂へ出るか、又は自分の室へ取り寄せるの外は無い。尤も晝食は、外へ出た序に大抵出先で濟ますが、朝食は多くはホテルで了すのだ。室へ取寄せて寢衣の儘でやるも妙だが、給仕への心

附は食堂へ行くときの倍額を氣張らねばならぬ。普通には、食事が濟むと、即時に勘定して、給仕へは、其の勘定額の十分の一の標準で遣はすが、室まで遙かに何階となく昇降機で運び上げさせる時には、心附けを多くするのは當然だ。で、給仕も、此の心附の多いのを樂しんで、室での注文を喜んで居る。

朝の食事は、米國では、眞ッ先きに果物、次は珈琲か茶に、パンとバタと、半熟雞卵二顆と、ハムなどが普通で、別に氷塊を入れた清水が備へられる。またオーツミルに牛乳を注いで、粥の樣にして匙で啜ることもある。總て客の命令に從ふのだが、英吉利では、朝の果物や、氷塊入りの水は無い。歐羅巴大陸では、オーツミルも滅多に用ゐぬ爲に、注文しても急に間に會はぬ。

朝食と晝食には、服裝の制限も無いが、晩餐の食堂には、英國ならば必ずフロックコート又は黑色のモーニングコート位は著ねばならぬ。が、米國や獨逸は、頗る不規則で、脊廣服でも苦にならぬ。但し食堂に入る前に、手と顏を洗ひ、髭は常に

伸びない樣に剃り、髮も櫛を入れ、垢づいたカラーやカフスは取り替へて出ぬと、自分は氣が附ぬでも、他の客には吃度笑はれる。また給仕などにも輕蔑せられ易い。日本から往く豪傑風の人には、髮や服裝に注意する者を、氣障なハイカラだと嫌ふ人もあるが、其の國々の習慣を顧みぬときは、蔭で笑はれて、恥をかくのだ。次には食事中、ピチャ〳〵口に音をさせたり、舌打ちしたりしてはならぬ。之が爲に他の客から同席の故障を言はれた者もある相だ。此んな事は、其人のみか、國の恥辱にもなるから、最も注意を要する。

ホテル食堂の料理にも、「テーブル、ドット」とて、定つたものを供するのと、一品づゝ特別に客から注文するのとある。洋食通になると、選擇して注文する方が宜いが、ビステキやオムレッの外には、洋食の名目さへも分らず、何時もライスカレーばかり注文する樣ならば、「テーブル、ドット」で、先方の選擇に任せるが宜い。直段も其の方が出來合ひだけに甚だ廉い。其の「テーブル、ドット」でも、ソップは大抵清だの

と、濃いのと、二種あつて、何方をと給仕は料理目錄を示して尋ねるのだが、此の料理目錄が、普通は佛蘭西文だから、仲々讀めない。で、日本の或る紳士が、最初の一品を指し示して注文すると、ソップが出た。次にまた分らぬから、其の隣りのものを指して注文すると、またソップが出たといふ珍談もある。またサラダには何か肉を取り合せるが普通なのに、サラダだけ指した爲に、柴葉バカリ持て來たといふ奇話もある。

倫敦などの大きなホテルでは、宿泊料を一週間ごとに勘定する所もある。スルと勘定の時で宜かろうと思ふて、給仕の心附を怠つて居ると、食堂の椅子に腰かけても、誰も用聞きに來ない樣になる。で、勘定しないときは、二回に一度位づゝ、食事をして立つとき、卓上のナプキンの下へ、ソッと一志ほど置いて來るのだ。受持の給仕は、脇でチャンと白眼んで居て、食堂を出るとき、『難有う』を叫んで、扉を排いて送り出すこと、甚だ現金だ。

給仕の氣轉と熟練

ホテルの給仕には、何れも特別に必要なる資格が要るので、各國で、給仕は、特別に之を養成して居る。何故となれば、客は世界各國の人で、言語の通ぜぬ者も多い。然るに一々其の意向を呑み込で、客が何も言はぬでも、早くも其の擧動を見て、何が希望であるかを察し、一を聞て十を察するどころか、一も聞かない前に十を察する樣でなければならぬ。故に彼等は、一度給仕したる客は、素早く其の嗜好を覺えて、茶が好きか、咖啡が好きか、其の茶または咖啡には、砂糖を二個入れるか三個入れるか、酒は葡萄酒か、其他の酒か、一度で早くも呑み込み、次の席では、客が言はぬ前に準備して置く樣になる。また假令片言まじりでも、成るべく廣く各國の語に通ずる必要もある。其れでまた性質は堪忍強く、客が何を言ふても、怒る樣な顏せず、沈著て、氣が利いて、其上に容貌も醜くからず、萬事に就て、客に嫌はれ

ぬ様な者で無ればならぬ。で、生意氣で、粗暴で、言語は不通で、皿や小刀の持運びに、ガチャ〳〵音させたり、食堂に居ても、客の顔に注意せず、自分達の仲間同志で、ヒソ〳〵話し合ひ、客から小刀の柄で、テーブルを打ち鳴らして注意を受ける様な者は、外國のホテルでは、給仕の資格が無いのだ。

何所までも金の世の中

ホテルでは、咖啡を食堂で飲まず、次の喫煙室で飲むのが常だ。で、咖啡受持ちは、別に給仕がある。是は別に其時ごとに勘定して、之にも仕拂ひ額の十分一の標準で、毎回心附を遣らねばならぬ。

食堂内には給仕長があつて、斷えず睨んで全室を監督し、給仕の不行屆を叱つたり、客の爲に席を定めたりして居るが、是にも三日に一回位づゝは必ず心附を遣るのだ。其の方法は、食事を了して楊枝を嘶へ、食堂を出るとき、扉の傍に彼れが立

て居たらば、豫め掌中に米國は五十仙、英國は一志位の貨幣を握り、彼れと握手の挨拶するとき、手早く握らせるのである。是も怠つて居ると、意外の所で恥を掻くことがある。

其外、室まで度々郵便物を持て來たり、來客を案内したりする小僧や、昇降機を擔當する者にも手當てが要る。また毎日の室内掃除や寢臺の始末と洗面器の水や煖爐の火、湯殿の湯などの世話は、室附下婢が受持て居るから、是にも時々手當てせねばならぬ。尤とも短かい逗留なれば、此等は出發するときでも宜い。

其他、常に華美の服裝してホテルの入口に立ち、客の爲に馬車や自働車の世話もし、行く先きの通路や、訪問すべき市街の方角、偖は汽車の發著時間まで、何事でも詳かに知て居て、客の爲に萬事の相談相手には最も重寶な門番が、何處のホテルにも必ずある。是にも二日に一度位づゝ手當てが要る。

また夜分遲く歸つたときなど、他の門番が玄關を監督し、客室の鍵までも預つて

居る。其れが、客の馬車が著く音がすると、走り出て、雨の日には傘を翳しかけたり、馬車の泥除を當たりして手傳ふときには、是にも手當てが要る。

また毎夜室内で靴を脱いで、扉の外へ出して置くと、翌る朝は必ず綺麗に磨いてある。是は搬荷夫がするのだ。で、出發の時には、其の搬荷夫は、客の鞄を階下へ運び、馬車まで積み込むで、送て出るから、其時に必ず何ほどかの手當をやらねばならぬ。

若しも此等の手當てを遣はすことを怠ると、其の鞄に、ホテルの使用人同志の暗號を用ひ『此客は祝儀を吳れぬ奴だ』などと、客の知らぬ様に書きつけて送る相だ。

旅客に必要な總ての設備

大きなホテルでは、啻に旅客の宿泊と、食事の便利を計るのみで無く、之に附帶して、まだ種々の旅客に必要なる便利を計つて居る。

各國を旅行すると、一國ごとに貨幣が違ふので、旅客は貨幣の兩替に至大の困難

を感ずるが、其れには、ホテル内に、兩替所があつて、各國の貨幣を、其國の貨幣と兩替して居る。で、米國から英領加奈太へ、若しくは英國から佛國へ行くと、前の國で使ひ餘した貨幣を、更に其の國の貨幣に兩替することが、皆なホテル内の特別取扱所で出來る。また市内へ小包物などを送り出すにも、使ひ小僧がチャンと控えて居る。其ほか衣服の洗濯、または火熨斗あてなども、ホテル内で、之を業とする者があつて、翌日までには立派に出來る。

まだ其外に郵便局、電信局、讀書室、信書認め室、玉突場、新聞雜誌賣捌所、偖は土産とすべき其土地の名物品や、旅客に必要な案内書、繪葉書、化粧品、寫眞の種板、ヒルムなどの類までも、皆なホテル内に陳列所があつて、正札附で賣て居る。で、些細の物を市街まで買ひに出懸ける必要が無い。また之を買ふ爲に、ホテルの召使ひや、案内人に、上前をハネられる心配も無い。

また客室内には、大抵電話が備へ附けられ、加入者番號帳も副へてある。ホテル

内への使用は無料だが、ホテル外だと料金を拂はねばならぬ。是は各國とも電話は概ね私設會社の營業となつて居るので、一回使用するごとに何ほどかの料金が要るのだ。其のまた電話の機械据附位置が、白人の身長相應に設けてあるから、日本人には背伸びせぬと屆かぬ位だ。

能くある湯殿と便所との失敗

或る領事が、夫人同伴で米國へ赴任したとき、桑港のホテルの五階の室に入り、夫人が入浴するとて、室附下婢に命じ、湯が出來たと知らせられて、單身で浴室へ這入たまでは宜いが、本來西洋の湯殿は、湯槽傍の壁に附て居る栓を捻れば湯でも水でも自由に噴き出すので、一回使用すると、槽の底の栓を抜て、鐵管で流して了ふて、些しも槽外へは流さぬ裝置であるのだ。話かはつて、其の日本客の下層の客室には、俄かに雨水が漏り出したので、客は大いに怒り、給仕を呼で談判する。給

仕は不思議に思ふて、上層に赴き、室附下婢に注意して、若しやと浴室を覗かせると、夫人は平氣で、日本の湯殿へ行た樣に、湯槽から盥に湯を汲み出して、ザブリザブリと室内に撒して居た。

是はまた別な失敗談で、或る紳士、始めて巴里のホテルの浴槽に入ると、湯が頗る溫い。西洋人は皆な日本人の樣に、熱い湯には這入らぬので、彼國の下婢が準備する湯は何れも溫いが常だ。尤も傍の壁に、湯と水と二つの管があつて、捻れば湯でも水でも自在に出るのだから、湯だと思つて捻つた栓が、生憎水で、益ます冷めたい。驚いて栓を捻りかへしたが、ドウ間違へたか水が勢ひよく噴き出して仲々停まらぬ。其の中に湯は全たく水となり、湯槽に溢れかゝつて來たので、今は如何にせんかと、其所らを見廻すと、電線で吊り下げた呼び鈴があるから、思はず指頭で二ッ三ッ之を押すと、下婢は手に手巾を提げて飛で來て、外から急いで扉を開けば、此方は女には決して見せるべからざる赤裸體で、寒さにブル〳〵震へて居るに、女

も驚きながら、『貴方は呼鈴鳴らしましたか？』

浴槽の序でに、便所の事を話せば、浴槽附の室には、便所も浴室の中にある故、自分だけの専用だが、湯殿附でないと、他の客と共同に用ゐるのだ。其の便所も、婦人用と男子用とは、全然區別せられ、入口に明かに書いてある。内部の構造は、何れも同じで、陶器の壺の上の腰かけにかゝつて、大小便を了し、用が濟むと、傍に吊ら下つて居る引綱の握りを強く曳くと、壺の周圍から、水がサッと噴出して、忽ち鐵管の中へ流し込で仕舞ふ。其のまた室内には、鍵があつて、中に居る間は、内から鍵を閉ぢ、何人が來ても這入れぬ樣にするのだ。然るに日本の一紳士、誤つて婦人便所へ飛び込み、また其上に内から鍵を掛けることを忘れながら、先生平氣で腰かけて、用を便じて居ると、外から貴婦人が、何の氣無しに扉を排いて這入て來て、額を打ち著けるほど近づいて、喫驚すると、此方も驚いたが、早速の氣轉で、隻手を伸し、彼方の手を握つて、『イヤ、お早う！』

加州巡遊記

大火災後の桑港市

炎々たる猛火が、五階六階の窓々から、夜の闇を破つて、大蛇の舌の樣な、紅ゐの焔を吐き出して居る。其の最上層なる八階の窓の上に。白き寢衣の儘なる妙齡の婦人が、半身を外に現はし、聲を限りに叫んで救ひを求め、狂ひに狂ふて悶へ困むを、下から眺めたる消防隊が、彼女！彼女！と手に汗握れど、見渡す四方の町々が、盡く燃え上りて、焦熱大焦熱の地獄を現出する大火の中では、到底火中の美人を救ふ手術も無くなりて、長く煩悶せしむるに堪へず、兎やせん角と評議の末、ヅドンと一發、銃丸飛んで、憫むべし彼の女は、火焔の中に斃れた。此は是れ千九百六年四月十八日の夜、桑港市中に起つた地震の後に、猛火全市を燒き、狂餘天を焦し、て、ホテル、セント、フランシスの大建築が、上下一齊に燃え出したときの光景で

海上より見たる桑港

ある。ア、何たる悲劇ぞ！

大火後最早一年半を過ぎたる翌る年の九月二十二日朝、北太平洋鐵道で桑港へ到著した余等は、前年の慘劇で名高いセント、フランシスホテルへ投宿した。再建の工事まだ半ばなので、隣りの公園の一部を借りて、假りに設けた平屋建のホテルだ。街路を隔てたる本建築は、鐵骨の十二階が、宛から蜻蛉籠の様に骨ばかり組み立てられて立ち、其れでも食堂だけは、最早最下層の地下室で、白晝も電燈が花の如くに輝いて、料理店を兼業して居る。

市中は總てがまだ火事場其の儘の混雜で、建築材料が街々猶々に横はり、彼方にも此方にも鐵材を打ち鳴らす鎚の音は、ガン〜〜響いて耳も聾になり相だ。敏捷快速で名高い米國

の大都會に、火災後の建築工事が、何故に十八ヶ月も經て、まだ斯くの如く捗らぬかと、疑問は眞つ先に起る筈だが、實際を見れば何の不思議は無い。前日の地震と火事と竝び起つた大災害に懲りて、新建築は概ね鐵骨で組み立て、地震にも仆れず、火事にも燒けぬ樣にする上に、從來五六階が普通であつたのを、今度は多く十階以上とするのである。

斯く市中は、大火後の再建築に忙しく、全市を通じて未成品なるも、偶たま日曜の金門公園を訪へば、周圍に樹木茂りて、中央の芝生は未だ綠りの色深く、秋草は時を得がほに花を開き、音樂堂の奏樂正に止で、四方に散ずる雲の如き群集の中を、自働車、馬車、自轉車の走るもの絡繹たるも、道路淸く修められて砂塵を揚げず。森林の蔭には日本風の茶亭あり、日本茶を汲んで客に供す。

轉じて金門灣の岸に出れば、水に臨んで建てられたる名高きクリフ館は、近頃火災に罹りて、空しく死灰のみ堆かきも、一丁許り離れたる海中の膃肭獸島には、名

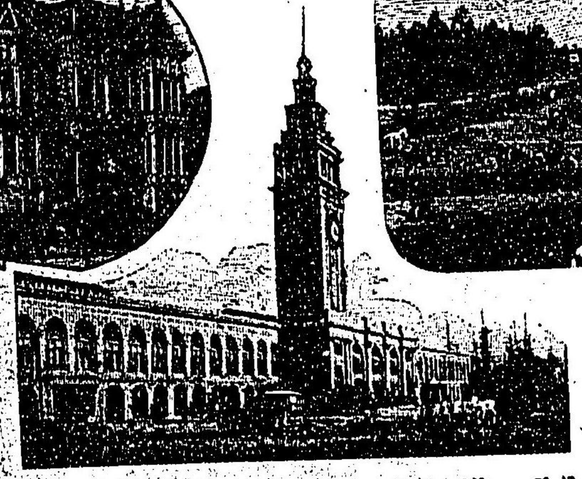
の如く臘胸獣が數十頭、巖上に群がり、嚴に獵獲を禁ずる故、彼等は短かき秋の日も無事に倦み、口を開いて欠伸するもあれば、中には水中に出没するも見ゆ。

クリフ館を少しく離れたるスートロ游泳場は、伊太利人スートロなる人の建築して、隣りの公園と共に桑港市に寄附したるもので、總建坪二千坪許*

桑港金門公園

同波船場

同日本領事館



*りの大建築、屋根は盡く硝子張りで、入場料十仙、入浴料は三十仙。浴場は海水を滿たし、深さ三尺から九尺位まで、淺深數室に區劃し、男女ともに肉襦袢一枚と爲り、泳ぐもあり、潜るもある。三方の周圍には、高きに據て

數百の椅子を並べ、其の背後には植木店、骨董店、生人形の陳列所などあり、また斷へず音樂を奏して游泳の興を對け、水に入らぬ者も、見物しながら耳を樂ませる。

日本人は、入場料を拂へば、見物は自由だが、入浴を許さぬのは甚だ殘念だ。

桑港市中の日本人

スートロ游泳場で、支那人と同じく入浴を拒まるゝほど、排日本の氣燄が高い桑港には、果して日本の勞働者が多く市中に徘徊するかと思へば、實は然らず。此所に在住する日本人は、多くは一家を構へた、獨立の營業者で、白人に使役せらるゝ者は殆ど見當らぬ。此事は始めて來た者の案外とする所だ。が、此れは其の筈で、此所には日本人の創立した銀行も數行あり、會社も數社あり、日本文の新聞紙も三四種ある。其他に横濱正金銀行の支店もあれば、三井物産會社や東洋汽船會社の支

店もある。また此地の日米銀行には、預金も百萬圓以上ある。是れ皆な本國から空拳で渡航して來た人々が、稼ぎ溜た資本である。其外美術雜貨店が四十餘戸、食料品の商店が二十餘戸、書籍店七八戸、印刷業が四五戸、洋服裁縫店のみ十數戸、旅館及下宿屋が五十戸もあるといふにて、其他を推知することが出來る。此等の人々は、大抵は前年の地震に伴ふ大火で、類燒の災厄に罹りながら、依然屈しないで、再び門戸を構へて、其の業を續けて居る。で、此等の中で、成功した者は田舍の方に多くの地面を買ふて、商業の傍はら、他の一方では農業もやつて居る。斯く商業家でさへも、農業が最も有利で且つ安全なるを認めて、資本を其所へ放下する位だから、其他の勞働者は、多くは田舍へ行て、農業に從事し、其の得たる賃銀を貯へて、本國へ送るもあり、または年賦で土地を買ひ、自ら農業を經營するもある。で、桑港市中に彷徨して、白人と職業を競爭する樣な者は殆ど見當らない位だ。無論勞働者も市中に居るが、其れは日本人の經營する洗濯屋か印刷所の職工で、白人の家にあるは、僅にホテルの給仕、料理番の手傳ひ位だ。で、職業が無くて困つて居る者は殆ど無いといふても宜い。

實に桑港に在る日本人は、最早移住民時代を過て、事業家時代になつて居る。田舍へ往ても勞働者として白人に使はれるで無く、自ら事業家として、白人を使ふて居る者も少くない。況て日本人を使用し、農業を經營して居る日本人の地主は夥多しい。サクラメント附近のフローリンの村落や、フレズノ町の一部は、立派に日本人が建設したのである。リヴイングストンの大和殖民地なども同樣だ。況してサンタローザの長澤鼎氏の葡萄園や、ミツドルリバーの牛島謹爾氏の馬鈴薯園、偖はメルローズの堂本氏兄弟の花園など、全カリホルニヤ州で、黄白全人種を通じて肩を竝べる者が無いまでに進歩して居る。で、其等日本同胞の農業事情を見んとて、先づ茲に數日間田舍廻りを試みる事になつた。

滿目沃野のカリホルニヤ平原

十五萬三千六百五十方哩といふ殆ど日本全國に匹敵する大面積のカリホルニヤ州は、太平洋の岸に沿ひ、南北約一千哩、東西約三百哩の沃野、北にオレゴン州と境を接するシヤスタ山脈は、東南に走つて、シーラネバダの山脈に連なり、ネバダ州と界し、其等の山脈に圍まれたる大平原は、北方シヤスタ山中から流れ來るサクラメント川と、東南ネバダ連山の間から流れ來るサンノキン川とが、ともに注ぎ入る所に桑港灣が深く陸地の間に灣入し、其の灣口の狹き所が金門灣で、桑港の大市街は其の西南岸に立ち、對岸にはオークランド、バアクレー、アラメダ等の新興市街が連なる。

桑港灣に注ぐ兩河の中で、サクラメント川流域の平原が約二萬方哩、其の中心にサクラメントの一都會が、カリホルニヤ州廳所在地として立ち、サンノキン川流域には、二萬二千餘方哩の平原があつて、フレスノ、マセド、スタクトン等の市街が其の間に散在し、尙ほ其西方には、サンタクラヽや、サリナスや、サンタマリヤだの、ソノマだのといふ平面の面積三萬五千方哩餘あり。何れも氣候が溫暖で、土地が肥え、半熱帶の植物には頗る適當して居る。余は其等の實況を見るべく、桑港灣の對岸へと渡つた。

オークランド日本人の花園業

第一日は、フルーツベル附近の花園業を見べく、桑港灣を渡船で越した。渡船といふても三階の大きな汽船で、一時に二千人位は乘ることが出來、三階も二階も數百の椅子が配置せられたる廣堂で、宛も停車場の待合室と同じだ。また最下層は食堂と爲て、乘客は簡單なる食事も出來、また麥酒や、ウキスキーや、茶でも咖啡でも飲むことの出來る酒舗がある。灣の東岸も北岸も、渡船の棧橋が幾つとなく海中

まで築き出されて、船が著くや否や、汽車は直ぐに連絡して走り出すのだ。

桑港灣の東方對ふ岸はオークランド、バークレー、リッチモンドなどの市街が長く連つて、其の中央を電車が間斷なく往來し、オークランドにもバークレーにも、日本人の商店が甚だ多い。是れ前年桑港の大火以來、同地から灣を越て對岸の此地方へ移つて來た者が多いからな相だ。

オークランドから電車で、南の方へ往くと、メルロース、フルーツベルなどの村落は、日本人が多く農業に從事して居る。フルーツベル停留所で下りて、名高い堂本さんの花園はと聞くと、園藝の方は直ぐ其所だが、花園は此の先きの停留場のメルロースだといふので、先づ園藝場の方から訪ふた。二所とも堂本氏兄弟の事業だ。

元來白人間では、室内でも、庭園でも、裝飾の大部分は植物で、食堂内は勿論、居室の窓の下でも、卓の上でも、或は廊下にも椽側にも、鉢に植ゑた植物を備へ、または上から吊し下げて置くことが頗る流行し、是は何れも根附きの物で、棕梠とか、

蘭とか、月桂樹とか、所謂盆栽ものだ。また宴會席などは、卓上に飾る花が、御馳走の要部と爲り、ホテルや料理店の食堂では、是非とも花が無ればならぬ事になり、また祝賀の所へも、愁歎の場所へも、花を贈るが多く、船中でも、汽車中でも、親友知人への贈りものは、花が最も多く行はれて居る。此の花は、剪り立ての生き生きした、香氣の馥郁たるのを贈るので、一日も經てば萎れて仕舞ふのだ。で、其等の花や盆栽の需要は夥多しい。

カリホルニヤ州で、方今花樹園藝の栽培に從事して居る多數の人々は、概ね日本人で、中にも堂本氏兄弟の事業は、カリホルニヤの賣花王と呼ばれ、若しも堂本花園から、一と朝、桑港へ花卉の發賣を止ると、同市の其日の裝飾が備はらぬといふ大勢力を有て居る。

圃間に垣を繞らし、内には樹木が茂り、風車が高く空中に廻轉し居る下に、溫室の硝子屋根が、長く數棟連つて居る屋敷が、堂本氏の園藝場である。主人に導かれて、其の園藝場を見ると、風車で水を汲み上げ、喞筒で園中へ灌漑し、各室に蒸

氣を通はして、寒帶、溫帶、熱帶の各地の植物は、各其室を異にし、棕梠や月桂樹は、皆な鉢に植ゑた儘、箱に入れて汽車で運び出す、其の鉢も、素燒なるは直ぐに家の近傍で製造し、陶器は日本から輸入し、殊に奇らしきは、日本の酒樽に植ゑたるが多い。是は近來米國の流行で、樽に植ゑた月桂樹の、高さ五尺位なるが、普通一鉢五十弗(百圓)位、棕梠も三十弗位といふことだ。

更に堂本氏の馬車で、メルローズ迄送られて、其所の花園を見る。規模は園藝場よりも更に大仕掛けで、硝子屋根の長さ三百尺、幅二十尺位の溫室や、其他の建物が三十餘棟竝んで、其中には、四季の花が盡とく備はつて居る。殊に此時は、薔薇、菊、石竹が花盛りで、毎朝開いた花を、幹から剪り取り、馬車に積で桑港まで送り出すのだ。聞けば石竹一本に一花あるのが一打日本貨で約五圓位、菊は更に高價な相だ。其の苗は日本から取り寄せ、種類は黃菊、白菊、最も多く、花は大輪に咲かせて、眞直ぐに育て、莖を一尺五寸位に剪る。是は食卓の上の花瓶に指すのだ。

此所の花園では、日本人と白人と、總て五十人許りの勞働者を使ひ、年中溫室の内で花卉を培養し、土地の面積は、約二十町歩で、室を溫むるには蒸氣を送り、水を灌ぐには風車で斷へず地底から汲み上げ、四五間の高さの櫓の上の水槽に貯へ、喞筒で各室へ配水して居る。また苟くも花卉に蟲が著けば、直ぐに石灰などの殺蟲劑を散布し、快晴の日には、晝間覆被を掀けて光線を與へ、夕刻には直ぐに之を被ひ、雨を厭ひ、風を防ぎ、蟲は最も之を嫌ひ、其の花を養ふことは、猶ほ慈悲深い親が、愛兒を育てる樣に苦心して居る。

元來カリホルニヤ全州で、日本人の花園業者は、堂本氏兄弟を頭として、二十餘人あり、土地の面積八十英町餘を使用し、溫室が百四十餘棟、百十數人の勞働者を使ひ、最近一ヶ年の賣上げ代金が、剪花で六十萬弗、植木で五萬弗に上り、四十萬圓以上の收入を得て居る。

フルーツベルから歸路、オークランドを經て、電車でバークレーにカリホルニヤ

大學を訪ふ。此所は從來日本學生の多い所、現に二十餘人あり。此の大學は、桑港「クロニクル」新聞社主ハースト氏の寄附で建てられ、現在の大學生が二千八百人、其中で、十分の四は女子だ。而かも男女の學生を同室で教授するのだが、何れも二十歳以上の年齢ながら、其れで男女の間に何の憂ふべき危險も無く、父母も、社會も、意とする者がない相だ。で、此日は校外の演劇練習所で、男女打ち雜つて、シイエクスピヤの「ハムレット」を稽古して居た。

サンノキン川流域の馬鈴薯農園

若し夫れ在カリホルニヤ州の同胞中で、日本人の最大成功者と言へば、必ず先づワツソンビルなる長澤鼎氏の葡萄園と、ミツドルリバーの牛島謹爾氏が馬鈴薯園を推す。で、オークランドへ遊んだ翌る日、また桑港を發し、對岸からサンタフヒー線の汽車で、サンノキン川の岸に出で、豫ねて其所に待ち合せた牛島氏の石油發動

船で、所謂牛島農園に行つた。唯だ見る河岸一萬六千英町の沃野、開闢以來、空しく蘆葦の茂るに任せた沼澤の地を、近年牛島氏は次第に買收し、沼澤を浚渫したる土を積で、堤防を築き、新たに拓いた農園は、土地飽くまで肥え、馬鈴薯の栽培には最も適し、今は將に收穫期に近づいて、薯の莖は人身を沒するまでに高く伸び、見渡す限り萋々と茂つて居る。其の農園を一週するには、數隻の石油發動船あり、圃間を巡視するには、數輛の馬車あり。主人牛島氏は、常に桑港に住むも、時々家族を伴ふて此の圃間の別墅に來り住むといふ。

去て附近の開拓工事を見れば、高さ二間ばかりある蘆葦の茂る間、先づ川筋を開鑿して其の泥土を兩岸に運び、其所に堤防を築くに、蒸汽機關の浚渫船を使用し、起重機に伴ふ浚渫機械は、巨人の手の如く、掌を開いて水底の泥沙を攫み、クルリと轉じて築堤の上に至り、攫みたる拳を開き、泥沙を棄てゝ歸る。斯くして見る間に浚渫と築堤兩つながら成る。機械力の作用、巧妙驚くべし。

此夕サンノキン河岸のスタクトン市街に上陸し、汽車でマルセド町に赴き、其所に泊つた。ホテルをセントラルと呼ぶが、流石に田舎は簡單で、支那人のボーイ一人の外は、帳場の主人も、荷物運びも、客室の水の世話まで、主人の老翁が一人りで働らく。

リヴイングストンの大和殖民地

南太平洋線と、サンタフイー線と、大陸横斷二大鐵道の間に介まりて、桑港から百三十八哩の東南、スタクトン市街から、五十哩離れた平野の間に、新たに開かれた三千五百英町の新部落が、大和殖民地と呼び、南太平洋線のリヴイングストン驛と、サンタフイー線のクレシー驛とが、其の南北兩端に接して居る。余はマルセドから馬車を驅り、殖民地内の皆部某氏を訪ふた。橄欖の垣根の内に、無花果の樹が茂つて、風車が高く其の上に廻轉し、斷へず用水を汲み上げ、下には七面鳥、鷄、鵝鳥

などが遊んで居る。主人皆部氏から、採たてのトマトーや、茄子の鹽漬で日本料理の午餐を饗せられ、食後また勧められて、圃間に頭がつて居る水瓜や甜瓜を、手當り次第に自ら撰り採り、小刀で挟て味ふ。美味言ふ可らず。リヴイングストン停車場の前で、繪葉書を買はんとて、郵便局へ行くと、食料品と雜貨とを賣る商店の主人が、村長兼郵便局長で、無論郵便事務も商店の一隅で取扱ふて居る。聞けば警察署長は、ホテルの主人が兼ねて居り、裁判所の法官は菓樹園の主人で、其の細君は産婆な相だ。新開地の事務の簡易なるは概ね此類だが、殊に驚いたのは、停車場で、驛長が、札賣り、貨物係り、電報係り、總て一人で兼ね、構内は恰も空屋の樣で、それで汽車が來ると、上著を脱で働き、自身で「シグナル」の任務まで兼ねて居る。米人の能く働くには感服だが、乘客もまた貴婦人まで、一々自分の手荷物を始末して、他人を煩はさぬには最も敬服だ。

フレスノ町の同胞の樂園

リヴイングストンから、南へ汽車で三時間、フレスノ町はカリホルニヤ州中、同胞の土地所有者最も多き所、全町二萬の人口中に、日本人は七千人あり、桑港から南方約二百哩の田舍に、我が同胞の樂園と爲て居る。中で廣島縣人神川理一氏の商店最も大、東京の三越呉服店に似たるデパートメント、ストーアで、別に食料品部と自轉車部の兩店もあり、大通りの街角を占め、日本移民の預金も取扱ふて居る。

此所は空氣の乾燥が甚だしい地で、世界唯一なる天然製乾葡萄の産地として名高く、見渡す限りの平野は、皆な葡萄園で、今は恰も葡萄摘採期とて、日本勞働者は、概ね之に從事し、賃銀は日給と分量給との二種あり、分量給で、早朝から日暮れまで働らけば、一日の收入が七弗(約十四圓)に上り、少なくも、人皆な一日二三弗の收入がある。其の作業は、低い葡萄樹の下に、腰を屈めて果實を摘み取り、薄い箱

の中に竝べ、日光の下に陳列して乾かすのだ。で、脊の高い白人では困難な上に、終日長時間根氣能く働くのは、日本人の長所として、極めて重寶がられて居る。收入が多いだけ、濫費も甚だしく、日本人の旅館、料理店の外に、遊廓も支那人の賭博場もあり。折角働らいて得た金を、其等の爲に盡とく捲き上げらるゝも多い。が、葡萄期節の九月一ケ月間に、彼等が本國へ送る金額が百萬圓に上る相だ。で、神川商店の自働車を借りて、郊外五哩のカネーロードといふ公園までの大道を乘り廻し、歸つて市中で寫眞を撮らんとすると、忽ち日本人が百人許り集つた。

フレスノでは、日本人の讀書家が多く、雜誌太陽や文藝倶樂部は、毎月各三百部以上賣れるといふので、以て日本人の多いことが知れる。其の翌る日、余は再びマルセド町へ歸路の汽車中に、白人の行商が、余に近寄て、日本語で、『お早う!! 貴方日本の本要りますか』といふ。何があるかと差出したのを見ると、明治十一年に出版の、『島田一郎梅雨日記』と、同じ頃大阪で出版された『鈴木主水』であつた。

ヨセミテ溪遊紀

六十年前黄金の洪水地

桑港から東南に百七十三哩、カリホルニヤ州平原の眞ん中に、日本同胞が新たに建設したるリヴイングストンの大和殖民地の兩側を、南太平洋鐵道とサンタフイー鐵道との兩線が並行して走り、其の兩線が一所に集まるマルセド驛から、別に東方に分岐して起るのがヨセミテ鐵道である。余はマルセド町に宿つた翌る朝、ヨセミテ溪の國立公園に遊ぶべく出懸けた。時は明治四十年九月二十八日、同行者は桑港の鷲津尺魔氏、別に姉崎嘲風、峯島活石の二氏は、一日遲れて桑港を發し、ヨセミテで會ふ約束である。

今より六十年前、千八百五十九年に、カリホルニヤ州なる、シーラ、ネバダの深山中、マルセド川の岸に大金鑛が發見せられ、其の產出額が夥多しいので、『黄金の

洪水』と稱せられ、世界の金相場に大下落を生じ、爲に各國では俄かに貨幣本位變更問題が囂すしく起り、經濟學者の間では『本位戰爭』と稱せらるゝほど、激しい議論が闘はせられた。隨つて、今まで亞米利加印度の土人の外には、白人の脚を入れた事の無い山中へ、各國から金鑛採集の冒險家が群集し、マルセド川の沿岸には、日々に二萬五千の勞働者が居た。此の金鑛發見の結果、カリホルニヤ州が俄に開けて、現時の桑港市などは、其後急激に發達したのである。で、其頃まで西班牙領であつたのを、後に北米合衆國で買收し、今は五六萬の日本同胞も、其の附近に散在する樣になつた。

マルセド川の水源、ネバダ連山の奥深く、世界屈指の奇勝ヨセミテ溪が、白人に發見せられたのは、金鑛發見の後三年で、北米合衆國が、數十哩に亙る溪山全部を包括して、自然の儘なる絶景を、國立の大公園と定めたのは、千八百六十四年の事で、其の絶勝景まで、マルセドからまだ大約百哩ある。ヨセミテ鐵道の八十三哩は、

專ら其所へ行く爲に出來て、此年五月開通した許りだ。

遊覽專門のヨセミテ鐵道

マルセドの田舍ホテルを朝早く發し、南に走る南太平洋とサンタフイーとの兩鐵道線を横ぎつて、余等の乘たヨセミテ線は、東に走る。線はマルセド川の岸に沿ひ、專ら遊覽者を目的とし、一日二回づゝ往來するのだ。川は名高い割合に大ならず、平野を走ること約三十哩許りで山間に入る。流れ極めて清く、水底の砂礫も個々數ふべく、兩岸に重なる巨巖には、老樹其の根を巖上に托し、能くも仆れぬと怪まるゝほど直立す。風光既に凡ならず。進むに隨つて景は益ます奇だ。其等の奇景の間、所所に採鑛の跡が多い。バクベーといふ地には、電力應用の金鑛精煉所がある。鑛物を左右の溪間から運んで來る。其の傍に唯だ一軒の料理店がある。鐵道の保線工事で、汽車の進行頗る遲く、最早正午に近いので、乘客は皆な午餐の爲に車を出た。

汽車は一時間其所で待て居る。家は川岸の崖上に建てられ、欄に倚て流れを眺むれば、水上には鐵の吊橋あり、水を堰して水力電氣の發電所に利用す。マルセドから三十六哩の山間、人跡稀な所に、此等の設備がある。流石に米國の工業は盛んなものと、先づ感心を禁じ得ぬ。

四時過る頃鐵道の終點驛イルポーターに著いた。停車場の全建築が、自然の獨木で組み立て、柱、椽、梁、棟ともに削らざる儘なので、趣味面白く造られて、先づ大いに旅客の目を樂しませる。此邊りは最早四面盡とく青山聳え、マルセド川は其の間を流れ、岩を嚙み、石に激し、雪かとまがふ飛沫を散して走る。其所に夏季だけ營業する天幕ホテルが兵營の樣に竝ぶ。イルポーターとは、西班牙語の入り口で、英語の入口だ。ヨセミテ溪公園は、此れから始まるが、溪山の全景を賞するには、一週間を要すると聞き、時はまだ早いから、乘合馬車を仕立てゝ出發した。馬車は「ステーヂ」と稱し、四頭立で、道路は砂地だから、砂塵漠々と立ち騰つて、全身忽ち眞

白くなつた。乘合の他の客は、豫め準備した塵埃避けの外套を著て居る。

山中に四頭立の乘合馬車

イルポーターから、ヨセミテ溪の中心まで、十四哩の間は道路開け、所謂四頭立の四輪の馬車は、客を横に二人づゝ三列に並べ、馭者は前に踞しかけ、馬は二頭づつ二列に並ぶ。中には六頭立のもある。

行くこと暫時にして、巨巖は道の左右より傾き懸つて、頂上に合し、馬車は其の間を過ぐ。穹門巖と呼ぶ。更に行くこと暫時にして、突如として一大巨岩より成る高山は、面に當つて天を摩して立つ。高さ海拔七千三百呎、溪中の平面より四千尺、一直線に峙ち、一草木なく、唯だ滑かなる灰色の巨岩だ。山麓は開闢以來未だ斧斤を加へざる老樹が、蟲々として天を鑽し、高さは概ね百五十尺以上なりと云ふも、宛から巨石の下の雜草ほどに見ゆる。裾野の彼方に聳ゆる我が富士山は、遠く望むが

故に秀麗なるも、此れは眼前咫尺の地に、頭上を壓して直立するのだから、壯嚴雄大、見上ぐれば膽先づ之が爲に奪はる。之をイル、カピテンと云ふ。西班牙語の大將の意だ。またヨセミテとは、土人の語の灰色の大熊だ。此の大將の樣な巨巖が灰色で、全溪を睥睨するので、彼等は之を大熊と名けたのな相だ。

是より奥は、溪間狹く、左右には絶壁の連山が、屏風の樣に列なつて、歩一歩奇勝を呈するも、松、檜、樅、槲などの老樹が、森々として密林を爲し、晝尚ほ暗きが上に、日は暮れかゝつて、最早眺むることが出來ぬ。漸く進んで暗中を行くこと暫時にして、頓て一點の燈光が認められ、近づけば其所には、五六の小商店が散在して小部落を爲し、更に巖陰を廻つて、橋を渡れば、意外にも其所は、恰かもイルミネーションの如く、電燈燦として星の如くに輝やき、二階建のホテルは、晝よりも明かに、中には今や音樂が盛んに起つて、四方を繞らす山々に反響し、何れの邊よりか傳はる飛瀑の水聲と唱和して、天樂を聽く樣だ。馬車は其所に著いた。是は

全溪唯一のセンチネルホテルだ。乃ち此所は溪間の中央、溪山の眺望を最も縱にする所な相だ。

深山中の贅澤ホテル

時は既に秋の季で、此所のホテルも毎年の例として、近く一週間後には、一と先づ業を廢する相で、宿泊の客は甚だ少ないと云ふのだが、尙ほ食堂には三四十の貴女紳士が居た。流石は世界の富豪ばかり來り遊ぶ所とて、何れも立派な服裝で、食堂の給仕は皆な婦人だ。料理も甚だ高尙で、山間で捉れる「マウンテン、トラウト」といふ魚、恰かも日本の「やまめ」の大きい樣なのを、フライにして出した。此所の最も馳走な相だ。珈琲は佛蘭西風の少量で最も美味なもの。葡萄酒も、ボルドー産の千八百八十年頃のであつた。それで室料は、浴室附屬の二人一室で六弗、晩餐は一人三弗ほどづゝと記憶する。此のホテルには、前年の夏時、大統領ルーズベル

ト氏も來り留まり、溪山の勝を愛して、一週間滯在した相だ。夏は極めて涼しいので避暑客の輻輳するときは、建築が足らぬ爲に、周圍に天幕で、臨時の客室を增して設けるが、秋の季には、最早寒くして、住むことが出來ぬ相である。宜なる哉翌る朝、寒氣餘り甚だしいので、戸外の寒暖計を見ると、午前七時に華氏の三十八度だ。室外は斯く寒いが、室内は蒸氣で暖めて、何所も七十度、溫々として春の樣だ。隣りに寫眞屋一戸、土産物商一戸あり。旅客日用の品々は、大抵賣て居る。繪葉書や、寫眞のヒルムなども澤山に備へて居る。

雄渾秀麗なる溪山の奇勝

ヨセミテ溪の兩側、直立して七八千尺の絶壁を爲し、人は身を懸崖に倚せて、仰いで絶壁を望み見るべく、溪間は宛ども壺中の天地を爲し、絶壁の上、四方蒼く山嶽重なり連なつて、終歲雪を戴だき、雪の溶けたるは、走つて溪流と爲り、絶壁よ

り落ちて飛泉と爲り、瀑の最も高きは三千二百七十尺と云ふ。地質學者の說に據れば、斯く兩側に絶壁を爲すは、何れの時代にか、中間の地層深く陷沒したるにて、兩側は宛から屏風の如くに壁立し、中間は溪と爲り、マルセド川は其の底を流れて、兩岸には、磊々たる巨巖が、小山の如くに横はり、喬木は絶壁に添ふて眞つ直ぐに高く伸び、高さ何れも百五十尺に上る。水の走るときは急湍と爲り、湛へるときは池と爲り、溪間風無れば、池水鏡の如く平かに、四方の山影、巖影、樹影、反映して、雄大の眺望、秀麗の風光、世界を通じて、正に比類が稀な相だ。

センチネルホテルは其の溪間の中央に建てられ、溪流は軒端を繞つて流れ、畫の樣な橋は流れに横はり、橋下の深潭は、老樹に圍まれ、屋を壓する四方の絶壁は、仰いで辛ふじて青空を望む所より、萬丈の白縮緬の樣な飛泉が、半腹まで落ちて、下方は飛散して雲霧と爲り、殆ど其の行衛を知らぬ。中にも最も美なるは、上層より一千六百尺落ちて、一たび山背に隱れ、再び近き懸崖の上から更に五百尺落ち來り、二段と爲て、懸るのが、ヨセミテ瀑と呼ぶのだ。ホテルの樓上、廊下を一週すれば、世界無類の大パノラマが眺められる。

此所で邂逅すべき約束の姉崎嘲風君一行は、昨夜未だ到著せぬ故、余等は此朝ホテルの馬車で、先づ溪間の勝區を探るべく出懸けた。此所は國立公園と云ふても、唯だ道路を開いただけで、毫も人工を加へず、自然の風景を大切に保存するのみ。

亞米利加印度の土人が穴居したる洞窟もあり、前を仰げば圓塔形の秀峯が、一半は崩れて陷沒し、恰かも巨椀を半分に割りて伏せたる樣なのがある。半圓塔と名く。また其の山影を逆まに映ずる池もある。俯して巖の上から望めば、鏡の如き池水は、澄みて水晶の如く、面貌も明かに反映す。また左右に連なる絶壁の巓は、雲に入て盡る所を知らざるが如く、蜿蜒として數十哩に亙る。

溪間を分け入れば、溪盡きて三面懸崖峙つ所、林間に十數頭の馬を備へ、一隊の

旅客が憩ふて居る。聞けば彼等は是より馬で絶壁の上まで登り、山上を跋渉するのだと云ふ。彼等は如何にして登り、また如何なる處に宿するか、余は先づ之を疑ふたが、焉んぞ知らん、ヨセミテ溪の壯遊は、實に此の山巡りにあるのだと、馭者の説明を聞き、覺えず快哉を三呼した。

馬蹄蹴て躋る懸崖の巖角

馬車をホテルまで旋すと、嘲風君の一行は既に到著して待つて居た。聞けば昨夜、溪の入口なるイルポーターの天幕ホテルで泊つたと云ふ。一同手を握つて相賀し、些し早いが共に卓を圍んで、午餐を喫しつゝ、直ちに登山の準備を命ずるに、一行は、姉崎嘲風、鷲津尺魔、峯島活石の三氏と、余と外に案内者が一人、總て五頭の騾馬に跨るのだ。騾馬は普通の馬と驢馬との混血兒で、形は小なるも頗る強く、加ふるに性質最も怜悧だ。

馬の準備は成れり。一行五人、騾馬に跨つて發す。余が乘馬の名はモセス、本年八歳といふ。余は生來まだ馬に乘たことが無い。それが今、頭上四千尺の絶壁の上まで、雲を踏み分けて登ろうと云ふので、心中聊か危惧の念無きを得ぬ。が、幸ひに騾馬は極めて柔順で、余は一行中の眞ン中へ入たから、手綱さへ握つて居れば、馬は命ぜざるも自ら進む。

マルセド川の溪流が東から西へ流れ、北側は、入り口のイル、カピテインの雄大なる秀峯巍然として雲表に聳え、續いて鷲ケ峯から、テナヤ山脈が波濤の如くに連なつて、ヨセミテの二段瀑布は、連山の間から落ち來り、更にインデアン溪谷を越て、北圓塔に至り、溪流の水源が二條となり、マルセド本流は、東南から來り、他の枝流は、東北にテナヤの細流が、一旦ミロル湖に注ぎ、更に西に流れてマルセド川に注ぐのである。頭を轉じて南方を見上れば、溪の入口のイル、カピテインの向ふ側に、一大寺院の形して聳ゆる寺院巖、少しく離れて孤立する寺院の屋塔の如き

寺院尖塔巖など、巖と稱するも皆な高さ數千尺の峻嶺、唯だ一巨巖から成るので斯く名けたのだ。更に東方に、最も高く聳ゆるのがセンチネルドムで、マルセド川上流とテナヤ溪流との間に聳ゆるのが南圓塔。其の圓塔の半分が全く缺けて居るので、一に半圓塔とも稱し、之と竝んで、ブロデリック山と自由頂の兩山峙ち、東南には海拔一萬尺のスターキング山が、絶頂に雪を戴いて立つ。此等兩側の山脈と山脈との間は、何れも地層が陷沒してヨセミテ溪を爲し、陷沒の懸崖は、世界無類の奇勝を形づくつたのだから、山背から流れ來る水は、皆な絶壁に懸つて飛泉と爲る。而かも左右絶壁の間、廣き所は一哩半、狹き部分は半哩に過ぎぬ。余等は今此等の絶壁を左右に眺めながら、馬をマルセド川の上流に進め、今朝數多の旅客が馬を立て憩ふた所まで行くと、其れから先きは最早歩々峻坂を攀ぢるのである。晝も小暗き森林の間を過ぎ、數本の巨木を巖の上に聯べて造りたる橋を渡りつゝ、上流を眺むれば、水聲轟轟雷の如く、全川の水は飛泉と爲り、三百五十尺の高處より落るの

が、ヴアーナル瀑だ。更に羊腸の山路を登るに、驟馬は果して強く且つ賢こく、傾斜急なる坂路にして、而かも巨石の崔嵬たる上を躋り、誤つて躓くも、靜かに自ら膝を折り屈み、偃して腹を地に著くること數しばながら、毫も仆ることなく、登り登つて、先刻見たりしヴアーナル瀑*を遥かに脚下に見るとき、忽ちまた面に當つて更に大遭遇す。飛泉は高さ七百尺のネヴアダ瀑が、實に絶壁の頂上から落ち來るのだ。

ヨセミテ溪半圓塔

同ヴアーナル瀧

馬をネヴアダ瀑の下に立て、全身を飛沫に濕しつゝ、此の絶壁を如何に登るかと、

案内者の行く所を見てあれば、頓がて左方に轉じて半圓塔の南側を、自由頂の山腹に攀づ。路は電光形に屈折して、瀑の側を躋るのだ。人間が歩いても、躋り難い山腹を、馬は屈せずして躋るに、馬上の客は、斷えず靴が崖側の巖に觸れ、汕斷すれば忽ち馬から溪底に墜ちて、身は微塵と爲て碎け相で、手に汗を握りながら、一生懸命に鞍壺に攫まつて、三十分ばかりで頂上に達した時は、覺えずホッと一と息した。余等は最早ヨセミテ陷沒溪の絶壁を攀ぢ盡して、海拔八千尺の山上に達したのである。馬を下つて松に繫ぎ、飛泉の落ち口に臨み見れば、往昔の氷河の跡は、花崗巖を穿つて盤渦と爲り、巖壁を侵蝕して、走つて空を下る。氷河の名、之を聞くこと久しきも、實際は今始めて之を見るのだ。傍に立て樹枝を攫みつゝ、巖角に倚て下方を望めば、眼先づ爲に眩み相だ。試みに手を水中に浸せば、冷かなること氷の樣だ。

絶壁の上の巨石の面に、磁石を彫め、其の周圍に略ぼ四方の位置の説明を刻んで

ある。傍らの木の蔭に、婦人用の便所も設けてある。流石は公園だ。海拔八千尺の山上に、馬を躋らせる路を通じ、磁石や便所まで備へてあると、感心しながら不圖見ると、Ladies toilet（貴婦人用便所）と白く書いた中のiの一字を何者の惡戯か塗り消して Ladies to let となつて居る。すると嘲風君は早くも見つけて、『ヤア妙々——其所に賃貸の貴婦人があるでは無いか』

再び馬に跨つて懸崖の岸を過るのだが、日は既に西山に傾きかゝつて、山上のホテルまではまだ三哩もある。で、馬は急いで疾足に行く。雙眼鏡で崖の下方を望めば、ヨセミテ溪の底は、今朝過ぎた細逕が絲より細く、天を摩するかと見たる喬木は、芝生の小草よりも小さい。眸を放てば、東北方遙に海拔一萬二千尺のクラウドレストの峻嶺は、雪に掩はれ、夕陽に映じて白玉よりも鮮かだ。頭を旋らせば南方に近くスターキング山は、頂上に雪を戴いて、綿帽子を冠つた花嫁子といふ觀えである。時に冷風横さまに吹き來つて、先刻からの汗は盡く收まり、徐ろに衣服の薄

きを覺ゆるので、人馬ともに勇を鼓し、黄昏に氷河點に著いて、唯だ一戸のグレシヤースホテルに入る。センチネルホテルから此所まで十二哩。

直立懸崖四千尺の絶景

グレシヤーポイントは、ヨセミテ山上の最大壯觀と聞くも、日が暮れたからホテルに入るに、二階建の木造、客室十四五。余等より前、男女七人の客あり、地は海拔七千二百尺、冷氣甚だしく、客は皆な休憩室に集まり、熾んに薪を燃して煖を取る。ホテルは主人老夫婦の外、眼鏡かけた老婢と、朝鮮人のボーイ一人のみで、先著の客はシカゴの若夫婦、倫敦の老辯護士夫婦と其の息子、バンクーバの廣告募集人、桑港の土地賣買紹介者等、東西兩半球の人を一堂に會したが、日本人にして此のホテルに投宿したのは、今夜の余等が始めてゞある相だ。

食後、余は鷲津尺魔氏と同室に入たが、衾が薄いので、二人二寢臺に横はり、二

枚の衾を重ねて被つた。が、まだ寒くて終夜眠られない。で、翌る朝は夜の明けぬ前に起き出て、樓上の欄干に倚て眺めて居ると、東方の山々は雲際漸く白く、脚下のヨセミテ渓は、まだ白雲に掩はれて海の樣だ。頓て近く半圓塔を前にして、遙にクラウドレストの雪の山が、紫色して輪廓明かに、其の背後に棚曳く紅ひの空が、刻一刻に薄くなるかと見る間に、太陽は其の山肩から覗き出る一刹那、波濤の樣に起伏する遠山近嶺が、忽ち靈とく指點せられて、昨日は仰いで眺めたネバダ瀑と、ヴアーナー瀑とを、今朝は俯して眺めるので、先づ余等が位地の高いのを悟られる。顧みて柱上の寒暖計を見れば、三十七度だ。此所から一直線に下方へ下れば、センチネルホテル附近まで通ずる細逕もあるが、余等は更に終日山

ヨセミテ渓グレシヤースポイントの絶壁

上巡りの壯遊を縱にする積りで、朝食前、先づ氷河點を訪ふた。

海拔七千二百尺、絶壁直立四千尺、屏風を立てた樣な懸崖の上に、扁平なる巨巖が笠の如く半空に横はつて、上には數人を坐せしむるのである。石上は莚の三疊も敷き得べきほどの廣さありて、其の一半は空間に突出するのだから、其の上に立たんとすれば、神悸き眼眩じて、肝膽爲に寒く、何人も夏尙ほ肌膚に粟を生ずるといふに、況して今寒威膚を侵して、口邊より吐く一呼一吸は、白く水蒸氣と爲て立ち昇るのだから、益ます戰慄を禁じ得ない。が、余は戰く足を踏み締め、三脚を懸崖の岸に立て、嘲風君一行が石上に立つ圖を撮影した。其の背後に、高さ二三丈許りの巨石が幾つも横はつて、之を推せば容易に動く。宛然我が日本の笠置山上にある動ぎ石と似て居る。

シイラ、ネバダ、連峯上の壯觀

グレシヤースホテルの傍、路は四方に通ず、其一は巨木の壯觀を賞すべき路、此所より山路一日にして始めて其所に達すべきも、余等は時間無れば行かず。今日は飽くまで山上巡りの壯觀を縱にすべく、朝餐後、再び騾馬に跨つて發す。山中第一の高處八千百十七尺のセンチネル圓塔は、ホテルの南方五六丁の近くに在り。傾斜最も急なる所にまで攀ぢ躋り、馬を下りて絶頂に登る。其所は恰も釣鐘を伏せた樣な形で、ヨセミテ全溪を下瞰し、周圍の連山は盡く指顧の間にある。立て眸を放てば、遠樹近嶽盡く余が前に御辭儀する樣に思はれ、意氣軒昂、天地を一と呑みにした樣で、愉快なること得て言ふ可らず。山に草木なく、灰色の一大岩だ。が、絶頂の最高所に、偃して横に伸びた松が唯だ一本ある。

行くこと數時にして、また絶壁の上、山は裂けて長さ二丁餘、深さ四千尺の底に達する大龜裂がある。之を龜裂點と云ふ。龜裂を隔てゝ向ふ岸を望めば、絶壁の上に立つ人馬は、大さ指頭ほどだ。馬を下つて懸崖近く進めば、また神悸き魂寒

い。が、此邊には、崖角の最も危險なる所に鐵欄干を設け、石上には磁石を備へ、所々に勝區の名稱を書して樹つ。

其所から更に西に進むと、三峯重なつて、斜めに頭を突き出し、恰かも蛙が三匹並んで飛び出たかと見ゆるがある。之が三人兄弟山。次に寺院の屋上に、尖塔の叢立する樣なのが寺院岩。連なる絶壁と孤立して、峻峭危拔、尖塔嶄然として立つのが寺院尖塔岩など、我が妙義山を數十倍したる樣な奇景壯觀を眺めつゝ過ぎ、轉じてまた森々たる喬木の林間に入る。樹は皆な開闢以來斧斤を入れず、高さ百五十尺乃至二百尺の老木、巨巖の上に生長し、其の最後には、風の爲に僵れて朽腐し、苗は自然にまた其の間から生じ、數百年の後にはまた朽腐し、幾回となく之を繰り返すので、地上は全たく朽木で掩はれ、馬蹄で蹴上ぐる砂塵は、盡とく是れ朽木の粉末、宛から線香の樣な香氣あり。地味の肥沃なる儘、木の生長極めて速かに、通例一百年にして百五十尺に達し、百五十年にして概ね僵るといふ。其僵木の傍に立て

ば、横はりたる老幹は、人身より高い。聞けばヨセミテ溪の他の勝區に名高い巨木では、立木の幹に隧道を穿つて、其中に馬車を通行せしむるといふが、此所の巨木から考へれば、毫も不思議なことは無い。

森林中の溪流の岸、僵木の傍に踞して行厨を開くに、今朝ホテルで調へた料理、木製の皿二枚を以て上下を掩ひ、之を開けば、三種のサンドウイッチ、胡瓜の酢漬、コールド牛肉、パイの菓子、林檎などあり。清流を掬して喰へば、美味言ふ可らず。食後、案内者は、一同の遺棄したる反古紙、木皿などを集め、火を放つて燃し了る。散らばつて山中の美觀を傷はんことを防ぐのだ。彼等が公德を重んずる美風は、嘉すべし。

再び馬を驅て、西に進み、地層陷沒の懸崖、稍や盡きて、傾斜急なる坂路を下り、半腹から東方を望めば、ヨセミテ全溪の景勝を一貫して縱に眺め、近くはイル、カピテンの秀峯と、寺院岩、三人兄弟岩から、北圓塔、半圓塔まで、皆な一望の中

に集まる。此所をインスピレーションポイントと呼ぶ、全景一覽臺とも稱すべし。此時南方に近く、絶壁に懸る飛泉は、高さ一千五百尺、風に動いて、霧と散り、末は落る所を知らぬ。其の狀宛ら美人の面を被ふ羅被の樣だ。之れを美人覆面被瀑と呼ぶ。瀑を觀了りて溪底に下ればイルカピテンの下に出づ。前日黄昏に過ぎた地點だ。

待つこと暫時、豫ねて前日命じ置いたセンチネルホテルの乘合馬車來る。之に乘て元と來た道を走りつゝ、仰いでイルカピテンを望めば、魏然天を摩して、宛から乾坤を睥睨する偉人の樣だ。途すがら路傍に多く月桂樹の叢生するを視て、紀念の爲に數葉を摘んで懷裡に藏すれば、馥郁として滿身香ばしい。黄昏にイルポーターの天幕ホテルに投宿す。

輕快便利なる天幕旅館

天幕のホテル、日本には甚だ奇らしい。直徑十八尺の八角形なる天幕内、寢臺、

用箪笥、洗面器、電燈、電話、まで備はり、其中に一人乃至二人を容れ得るのが五六十棟連なる。余等の入つたは第四十六號だ。食堂は長方形の大天幕あり、浴室と便所とも別にある。汽車はホテルの前まで來り、馬車は數十輛備はる。郵便電信も自由に發し、貨幣の兩替も、案内者の雇ひ入れも、此山間で不自由が無いは勿論、夜間は家の内外に無數の電燈を點じて、燦然花よりも鮮かだ。其れで晩秋には、天幕も家具も、一切撤去して運び去るのである。余等は此所で入浴して、數日來の汚垢を流し去る。翌る日は、またヨセミテ鐵道で發し、晩れには、最早桑港市中の客と爲つた。

外國語修養の不十分は、海外旅行者が、出發前に何人も先づ最も心配する所である。成程各國語に通曉するほど結構な事は無いが、假令言語は不十分でも、今は海外到る所に同胞が居り、案内を頼む位は容易い事で、道連れも到る所に澤山ある。金錢の世話にさへならぬ丈けの準備があれば、世界の各國を高踏闊歩することが出來る。案じるよりは産むが易い。百聞は一見に如かず。思ひ立たら躊躇せず、安心して出發するが肝要だ。

北米大陸の横斷

サクラメントの日本同胞

陸上深く灣入したる桑港灣内、南からはサンノキン川、北からはサクラメント川、注ぎ來る兩水の沿岸、中部が、カリホルニヤ平原の大沃野を爲し、其等富源の集まつたのが、灣口に桑港の大都會を建設したのである。

が、サクラメント川の流域には、更にサクラメントの一都會があつて、カリホルニヤ州廳は其所にある。桑港から、停車場を其儘なる大渡船で、灣を横斷して對岸のオークランドに渡ると、直ぐに汽車が横に著くので、何時陸から船に移り、また何時船から汽車に移つたか、注意せざれば分らぬほどだ。其のオークランドから、東に走ること三時間で、サクラメントに著く。

此所は從來日本人の來り住む者多く、立派な日本人町が開け、日本の旅館も料理

屋もあり、更に市街から五哩離れたフローリンの村落は、全然日本人で開かれ、戸數百、人口五六百の同胞が、荷荷や、苺や、トメトー、ホップスなどを耕やして居る。自働車で其所まで行くと、今正に熟した瑠璃の如き荷荷が、累々として枝頭に簇がつて居るのを、同胞の園主は、余等を遠來の珍客として迎へ、幾らでも自由に摘で喰はせた上に、歸りには、大籠一個を土産にとて、車の中へ入れて呉れた。

ソートレーキの一夫多妻教本山

一夫多妻といふと、東洋人には奇らしからねど、白人にして此事あるは、「モルモン」宗に限る。其宗の大本山は米國ユタ州鹽湖市に在る。

夜間サクラメント市を發したる汽車は、翌る朝シイラ、ネバダの山脈を越れば、沿道總て是れ平原荒野、見渡す限り人家を見ず、汽車走れども走れども、秋風に戰ぐ枯草の外には、所々に小さき湖水があるばかり。湖中の水は、多量の鹽分を含み、

人が其の中に入るも、水が重いので決して沈むことが無いといふ。鐵道修繕工夫の中に、所々に日本人が居り、窓から顔を出せば、萬歳など〻叫ぶ。同胞の通るを見るが餘程嬉れし相だ。

其の翌る朝七時頃、汽車は鹽湖の上を走ること約一時間でオクデン市に著き、市中の一料理店で朝餐の卓に對ふた後、再び汽車で一時間許り南に走つて、鹽湖市に著いた。此邊に數多い湖水の中で、此所は最も大で、水は最も鹽分多く、魚介も生活することが出來ぬ。小亞細亞の死海と竝んで、東西兩半球の最も鹽分多き湖水だ。其の岸に建てられた鹽湖市は、方今三十萬餘の人口あり、ユタ州の州廳所在地だ。で、此の都市の建設者は、實に一夫多妻教の教祖ブリガミ、ヤング、で彼れは米國の東方を追ばれ、數多の妻妾と、信者とを合せて、百人ばかりの從者を伴ひ、通れて此の湖岸に達し、此所こそ我が永住の地、子孫をして生活を樂しませるに足る所だとて、當時まだ不毛の平原に、自ら市街の設計を定め、街路から寺院の位地まで、

指揮して建設したのが今より百年以前の事で、其れが現今繁昌の基を開いたのであるとすれば、彼れもまた一個の豪傑に相違ない。市の中央の街頭に、銅像が立て居るのは道理である。

ユタ州は、「モルモン」宗の信徒に開拓せられた地方だけに、大本山の勢力は頗る盛んで、其の寺院は、巍然として市中第一の大建築、附屬の大會堂は、一時に二萬人を入れ得る大伽藍だ。一年二回の大會は、宛も日本で門徒宗の彼岸會と同じく、春秋二期に催ほされ、全州各地の末寺から、名高い長老連が悉く集まつて、此の大會堂で、管長と共に祈禱と説教があるので、宛から雄辯の競進會だ。其の式場に參列すべく善男善女雲の如くに集まり、一年中で市中が最も賑ふのである。丁度余等は今其の時期に來た。ホテルは何所も滿員だが、幸ひに此所には有力の日本人も多く住むので、豫め準備せられて、門前拂ひも喰はぬ。著いた翌る朝、姉崎嘲風君と共に、管長を訪ふて、門下の長老が列座の前で、暫時面會した後、大會堂で大會の儀

式にも參列した。一夫多妻の敎旨は奉ぜねども、余等は此宗旨に宿緣ある樣だ。

大本山の大會を機として、年々ユタ州の産業博覽會が開かるゝ相で、市街を離れた其の會場へも往つた。博覽會場で最も多い出品は、此地方特産の砂糖だ。聞けば其州の砂糖栽培勞働者中に、日本の同胞が三千人も居ると云ふ。また其の博覽會場内に、名物の「マウンテン、トラウト」といふ川魚が、活きたる儘で多く陳列せられ、野菜と果實も特産物だけに、長さ四尺餘りの水瓜や、直徑三尺餘の南瓜が、正に他に類の無い奇觀を爲してある。

博覽會の餘興には、「パノラマ」、蓄音機、「メリー、ゴー、ラウンド」、「玉ころがし」など、多くは田舍漢だましに過ぎねど、中に風船乘りがある。彩服を著た壯漢が、球と共に昇りながら、逆さまとなつたり、直立したり、自由自在に身を働らかせつつ、雲際遙かに飛び揚つて、全身豆よりも小なる頃、球を切り離し、傘を開いて下る。其の大膽にして且つ巧いこと、數萬の群衆悉くあッと叫んで、喝采は急霰の

如くに沸いた。其の歸路は、餘りの雜踏で、余は電車中に同行者と離れて仕舞ふた。

海拔一萬二百尺ロッキー山上の鐵道

鹽湖市から聖路易市まで、ロッキー山の險を越て、大約二晝夜の汽車旅行、線路は數條ある。中で、最も溪山の勝に富むのは、デンバー及リオグランド鐵道だ。是はロッキー山間を流るゝグランド川に沿ふた線路とて、斯く名けたのだ。リオとは西班牙語の川だ。

夕に鹽湖市を發すれば、翌る朝はロッキー西麓の山間に入り、グランド川の岸を走つて、グリンウード驛に著く。此所には流れに臨んで鑛泉浴場のホテルが數戸ある。夏時の好避暑地な相だ。風景は漸く佳境に入るので、汽車は、此所から無蓋客車を後尾に附ける。其所には多くの椅子を配置し、旅客をして飽くまで溪山の美觀を貪ぼり賞せしむるは宜いが、燃料の石炭が惡いので、頭から煤烟を被つて、眼が

開かれぬ。此時汽車中のボーイは、一種の眼鏡を賣りに來た。形は日本の花見眼鏡の如く、薄革の被ひで眼の周圍を掩ひ、鼻の所は縦に切り開いてある。鼻の高低に依て加減が違ふので、彼れは先づ客の顏を見て『貴下には是が適いでしやう』と云ふ風に、豫め判斷して渡すが、日本人の鼻は概して低いので、出來合ひで程好く適まるのが少ない。で、散々に取り替へて『此れが宜しい―』と云ふとき、忽ち隧道の中へ入た。其所を出ると、『オイ君―眼鏡が逆さまだ―』と注意せられて、探つて見ると、隧道中で、狼狽て懸けたとき、鼻へ當る切り目は、逆さまに上へ向けて懸けて居た。道理で隣席の若い貴女が、僕の顏を見て、可笑し相に笑つて居た。

汽車は次第に山間に分け入り、後には溪流も帶より細く、隧道を幾つも潛つて、最後に、愈いよ急勾配になつたと覺しく、『列車を二つに離すから、食事するなら今の内に』と注意を受けた。此邊りには城門關と呼ぶ巨巖の間を過ぎたり、ホーリイクロッスとて遠山の嶺に、白く大なる十字架の形して見ゆるを眺めたりして、漸やく、山頂のテンネッシーパッスに達したとき、其所は海拔一萬二百四十尺である。

日本の富士の八合目邊りだ。四方の山々は皆な雪を被つて居る。時は午後一時頃だから、午餐を爲さんと食堂車に行くと、先刻食料品車を離したから今は何も無いと斷はられ、加之に、『ですから先刻注意しましたでは無い*』と應接に遑ないほどだが、腹は益ます減る。黄昏になつて、食料品車と繋がつたので、勿皇駈け込んだ。ボーイ走り來り報じて曰く、『最う少しでローヤルゴーチの絶景になります』と。此時食堂内には電燈輝いて、窓からでは外が暗い。風景を見るには

ロッキー山間の神聖十字

*か

一本小言を喰つた。

山の東方は、またエーグル川の溪流に沿ふて、隧道を出入するごとに、忽ち山、忽ち水、奇景百出、

室外に出ねばならぬ。で、今しも吸ひ始めた羹汁の匙を投げて起ち、室外へ出て眺むれば、左右の懸崖は直立して、晝尚ほ暗さうな峽谷の間、日は最早半ば暮れ、唯だ巖に激する谷川の早瀬が、白く雪の様になつて走るを見るのみだ。

午後十時コロラド、スプリングスに著く。汽車二時間の延著だ。然らざればローヤルゴーヂの絶景は、明るい間に十分眺められたのだ。斯る事は、米國の汽車では稀有な相だ。停車場から馬車を命じ、アラモホテルまでと命ずると、發したかと思ふと直ぐに著いた。其の筈だ、距離は僅に二丁、其れで馬車賃が一弗半、ア、今日は如何なる不吉の日ぞ。何ぞ朝來失敗の多きや。

好避暑地のコロラド鑛泉

海拔一萬四千百四十八尺のパイクス、ピーク、山麓のマニトーに、噴き出す鑛泉を利用して、浴場を設け、コロラド、スプリングス、との間の五哩ばかりは、普通

の鐵道が往來し、マニトーからパイクス、ピークの絶頂まで、九哩間は「アプト」式の登山鐵道だ。若しも日本で、富士山上に鐵道を敷くと言はゞ、法螺も宜い加減に吹けと、一笑に附せられんが、此所の鐵道は、富士山頂より一千尺も高い所へ登るのだ。

境を繞つて盡く山、摺鉢の底の様なコロラド、スプリングスから、マニトーに通ずる一區域は、夏時米國富豪の避暑地で、金錢は、噴き出す鑛泉の湯水よりも輕々しく使ひ棄てらるゝ處とて、ホテルの設備は遺憾なく整ふ。翌る朝、馬車でマニトーまで行たが、沿道の綿の木は、皆な黃ばんで、黃金の野に遊ぶ様だ。マニトーにも多くの旅館や別莊がある。が、山上の絶頂は最早雪を被つて、汽車の登山は大分寒からうと云ふので、空しく山下から眺め、馬車を旋して神の花園といふ地に出ると、日本ならば賽の河原とでも云ひ相な、松林の間に散在する奇巖怪石、千狀萬態なるを指し示して、馭者は一々說明し、上に笠を戴く様なのが蕈巖、方形なるが手荷物巖、二つ竝ぶが二た子巖、斑紋のあるのが菓子巖、層々重なるが支那寺院巖な

ど、形狀の類似から名を命るは、洋の東西其揆一だ。路の左右に巨巖狹く迫る所、巖上に汽船を擬て造つた酒舗が一戸ある。成る程海へは數千哩を隔つる此の山間、船を見た事の無い人ばかりの地では、建築を船に擬ねたも思ひ附きだ。甲板の上に長い望遠鏡を据ゑ、就て覗けば、バイクス、ピーク山上のホテルが、積雪の中に鮮かに見ゆる。

夕刻コロラド、スプリングスを出發し、デンバー市で暫らく下車すると、此所にも日本同胞數百人あり。日本料理店敷島館で、新鮮なる鯛の刺身と潮煮で、日本酒を飲み、米の飯を喰ふ。聞けば此所から最も海に近いニウオルレアンスまで、二千哩を隔つといふ。其地で新鮮な鯛を見るは、皆な冷藏汽車の輸送だ。

其夜十時にまた汽車に乘れば、翌る日は、終日カンサス州を東に走り、夕刻にはミッソリー河の岸で、二時間ばかり聖ジョセフ市に車を降る。五十仙均一の、停車場内なる料理店で晩餐を了し、電車で市中を一週し、車中に同乘の黑人が、若き婦

人を伴ふて、人目を憚りつゝ密に語り合ふを見て、人情には黑白人の別なきを面白く感じ、歸て停車場で立ちながら繪葉書を十枚ばかり認め、再び汽車に乘ると、終夜河岸を走ること三百哩、翌る朝車窓から望めば、河は俄かに大となり、長江滔々として南に流る。此所は最早ミッソリー河と、ミシゝッピー河と合したのだ。余等は其所の大都府聖路易に著いた。

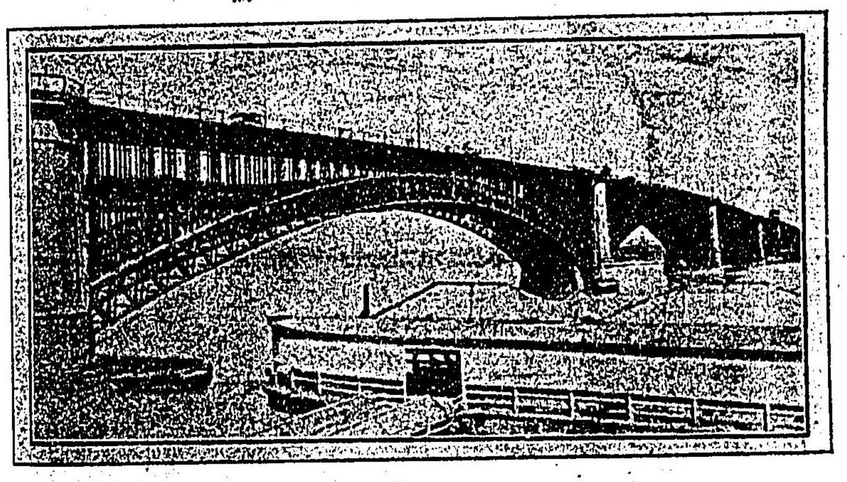
大博覽會後の聖路易

左なきだに大河のミシゝッピーに、ミッソリーの長流を合せ、洋々として南に流るゝ兩岸に跨つた此所聖路易の市街、右岸が最も盛んで、左岸は煙突の多く立つ工業地、甚だ東京の本所深川に似て居る。が、流れに跨がる聖路易橋は、端から端まで二千七十碼、其の工事には一千萬弗を費やしたといふので、トテも東京の兩國橋を以て比較することが出來ぬ。橋は二段の鐵橋で、下方に汽車走り、上方には電車

の軌道と、車馬道及歩道に別れて、水面上五十五尺、橋の幅は約十五間、一人ごとに五仙づゝの橋錢を取る。

此の市はミシゝッピー平原の中央に位し、ミシゝッピーと、ミッソリーとの兩大河の合流點より下流十七哩、河口のニウオルレアンス市よりは、實に一千

聖路易のセントロイ橋



百七十哩の上流で、高低區々なる河岸に、長さ十七哩に連なり、面積六十五方哩の大市街舊時は佛蘭西領なりし、を、千八百三年に合衆國に併せられ、去る千九百三年の萬國大博覽會は、其の合併後百年の紀念として開かれたのだ。で、佛領當時僅に人口百二十人の寒村

で、合衆國の一部となつてからも、千八百十一年には、未だ人口千四百人であつたのが、七十年後の千八百八十年には三十五萬人、千八百九十年には、四十五萬二千人となり、水陸運輸の便に加へて、沃野千里の平原の中央とて、商工業の盛大なること、今に紐育、シカゴ、ボストン、ヒラデルフイヤに次ぎ、米國第五等の位置に在る。

前年の世界大博覽會は、此市の郊外天然の森林を利用したる、森林公園の一部を開いて會場としたが、今では當時の建築の名殘りが、ワシントン大學と、聖路易美術館と爲て殘り、公園の栗鼠は、人に慣れて脚元近く飛び廻つて居る。其の傍を走る電車が、常に乘客を滿載するを見れば、大博覽會以後、此所の郊外が著しく開けて戸口の殖えたのが知らる。

西方の桑港や、サクラメント邊から、此所へ來ると、開けた年月が早いので、社會の秩序も立ち、物價も廉く、人も落ち著て居るのは、宛ながら馬關神戸邊りから、

名古屋邊に來た樣な感がある。で、西部では物價の最少額が五仙で、白銅以下の小貨幣を見ないのが、此所には尋常の銅貨も使用せらる。ホテルの昇降機の中に、毎朝積で置く新聞を、余は一部取て、西部と同じ樣に、五仙の白銅貨一個を殘して去たが、後に聞けば、一仙銅貨一個で宜しいのな相だ。其他ホテルの宿料、馬車代なども、概ね此の比例で、三階の湯殿附客室二個連接して、一夜の室代が僅に三弗五十仙、それで寢具も可なり惡くなかつたが、驚いたのは床蟲が居て、一夜で頸の邊りが夥多しく腫れた。

髮を刈らうと思ひ、何の氣も附かず一理髮店へ入ると、大失敗！黑奴の店だ。場所は聖路易市の大通り、オリーヴ街とグランド街の交叉點である。西部では多く見ざりし黑奴が、此邊には澤山居る。白人は彼等を劣等人種として全然交際せぬので、黑人の常職は、汽車の車掌、ホテルの運搬夫などが最上位で、其他は多く極めて下等の勞働に服して居る。余は今其の劣等人種の店に這入てから氣が著いたが、逃げ

出すも妙で無いので、平氣でズッと姿見鏡の前の椅子に腰かけた。

黑奴の理髮店でも、椅子は廻轉自在な上に、前後を昂低して、起臥も自由なるは、日本ではまだ齒科醫の外には多く用ゐられて無いのだ。余が髮を刈る黑奴は、若い男で、余を支那人かと聞いた。彼等の店へ來る東洋人は、大抵支那人と見える。余は、否、日本人だと答へると、談話は其儘中絶して、唯だ鋏の動く音ばかりであつたが、間も無く一人の若い黑嬬人が這入て來て、前の男と嬌めいた話を始めると、男は俄に浮かれ出し、余が髮はソコ〳〵に刈り了り、洗滌は他の黑奴の方へ廻し、自分は直ぐに隣りの室で衣服を改め始めた。余が髮を洗ひ了つて、更に他の黑奴に靴を磨かせて居たとき、彼の若い男は、他の朋友に何事か囑んで、自分は其の女と連れ立て外へ出懸けた。跡に殘つた黑奴の二人は、別に不思議とも思はず、相顧りみて笑ひ、畜生ッ旨く遣て居る哩と言ふたらしい。就業中は神聖で、何事が起つても手を休ませぬを誇つて居る米人の中でも、流石に黑人は違つたもの、客の面前で此

の嬌態を演じて居る。

聖路易に滯在すること五日、更にシカゴ及アルトン鐵道で、二百八十四哩を八時間で走れば、最早ミチガン湖畔のシカゴ市に著いた。

シカゴ市の地獄境と極樂境

鬼か人かと疑はるゝ壯漢が、鐵槌を大上段に振りかざして、今正に鐵柵内に追ひ込んだる、小山の如き巨牛の額を目がけ、發矢とばかり打つかと見れば、忽ちバタリと斃るゝこと一頭また一頭、忽ちにして五頭十頭暫く間に顚び仆るゝを、龕燈返しに柵外に投げ出すや否や、利刄を提げて待つ夜叉の如き壯漢は、矢庭に一と突き喉を刺す、サッと迸しる血潮の唐紅ひを、同じ儕輩の牛頭馬頭連が、血を搾る、皮を剝ぐ、膽を抉り出す、首を斬る、鮮血を汲み出す、肉を洗ふやら、全身を大鋸にて二つに挽き割るやら、續いて其の半身づゝを冷藏庫内へ送る、其所では直ぐに箱

に詰める、汽車にて送り出す、其間僅に一時間、其の作業の疾きこと、電光石火、巧妙なる外科醫の治療よりも速かだ。聞けば此所の一室で、一日の中に牛を屠ること二千六百頭づゝ、豚を屠ること六千頭づゝである。其れは地獄？あらず。是れ米國中部の最大都會、シカゴ市ストックヤード屠畜場中、僅にスウヰフト會社一工場の光景である。其所には斯かる屠畜場が、他にも七會社ある。而かもスウヰフト工場のみで、日々に二萬六千の工夫を使役して居る。此等の各會社は、何れも同じ場所に集まつて、世界の各國に對する肉類供給のトラストを組織し、彼等數會社の手心加減で、全世界の肉の相場を上下して居る。宜なる哉會社專用の鐵道は、八方へ引かれ、汽車は終日間斷なく東西南北に往來して、牛犢羊豚を運び來り、即日屠りて盡とく之を始末し、數時間前に汽車で送られた牛が、數時間後には最早罐詰と爲て運び出さるゝもある。是れでも人間業かと怪しんで立つとき、偶たま一陣の腥風面を撲ち、久しく停まるに堪へず、觀了つてホテルに歸れば、此夜食に味が無い。

歩して市中に出れば、忽ち聴く霹靂一聲ゴーと響いて頭上を過ぐ。空は工場の煤煙に曇れど、天は雨雲の横はるもの無きに、去りとは何の雷ぞと仰ぎ見れば、是れぞ市の中央を貫通する高架鐵道の電車が、間斷なく往來を續くるのだ。而かも地上には電車の往來する外に、馬車も自働車も、絡繹として引切り無く走る。*

シカゴ市の大通り

大統領リンコルンの像

碧波茫々百里に連なり、汽船帆船往來頻りなるミチガン湖畔、此所も往年の世界町に走つてミチガン湖畔に出づ。

*紛々焉たり、擾々乎たり、一歩油斷せば忽ち轢き殺され相だ。ア、是を文明といふものならば、文明も餘り羨ましいものにあらずと、匆々に横

大博覽會場跡を、其儘利用したジャクソン公園、共同椅子は、細波打ち寄する岸邊に列ねられ、パビリオンの趣味多き建物は、數百の公衆が自由に入て憩ふべく、樓上から眺むれば、東方一面の湖水は、宛かも庭苑の池として賞せらるゝ。面積五百三十二英町の大公園は、老槍古柳體裁能く植ゑられて、中に開けたる鏡の樣な池の岸には、大博覽會の遺物として、博物館や、美術館や、獨逸皇帝寄贈の獨逸館もあれば、日本政府から寄附の模造鳳凰殿もある。自働車を乘り廻はす老紳士夫婦もあれば、手を曳き會ふて散歩する若夫婦らしきも見ゆ。足一たび此所に入れば、先刻ストックヤードの屠畜場で、現世からの地獄を眺め、高架鐵道の下に修羅の街を徘徊したる恐怖と惡感とは、全然一掃し去て、心神始めて爽かだ。

去て更にワシントン公園に往けば、規模は前よりは少しく小なれど此所はまた、大溫室の中には、四時の百花が妍を競ふて開き、其所を出れば、鵝鳥池中に泳ぎ、羊群園中に戯れ、齷齪する人間界の憫れむべき境遇を笑つて居る樣だ。ア、公園の

公衆を慰さむる效能は、此所へ來て殊に著しく悟つた。前のが地獄なれば、此所は確かに極樂であらう。

ナイヤガラ瀑布水陸の壯觀

昨夕五時にシカゴの中央停車場から、紐育セントラル線で、東方に發したる余等は、夜半にミチガン州のデトロイトで、汽車を船に載せ、湖水を渡つて英領加奈太に入り、イリイ湖の北岸を走り、國境の稅關で、車中に寢ながら鞄を開きて檢査を受け、其まゝ前後も白河夜船、漕ぐは鼾聲か汽車の音か、唯だゴー〳〵と響きつゝ走つた。頓てコッコッコッと車室の扉を、車掌の黑奴が、叩き起すに驚いて眼を覺せば、汽車は一夜の中に五百哩餘を走つて、最早ナイヤガラの大瀑布に近づいたとの報告だ。余が時計ではまだ四時だが、汽車の時計は最早一時間進められて、午前五時だ。時は十月十九日の未明である。同行者は例に依て姉崎嘲風君と余だ。

ナイヤガラ瀑布の大觀を縱にせんと、故さらに湖北を廻つて來た余等は、若し觀瀑の機を誤つては一大事と、倉皇起き出で、衣服を改むる間に、汽車は進行を停めた。車聲の轆轤が止むとともに、窓外には忽ち轟々と萬雷の如き聲が轟ろくので、幔を拂ふて眺むれば、夜は僅に明けて、眼前の急流が、馬蹄形に峙つ絕壁に懸つて、忽ち大瀑布と爲り、乾坤を震動しつゝ落ちるのだ。瀑布は大山の崩るゝ如く、咆哮怒號して水煙の中に落ち、瀑布の底も測り知られず、河の對岸も認め難く、高さも幅も知るに由なく、唯だ一種莊嚴の大觀を見るのみ。

汽車は停まること五分間で動き出した。余等が觀瀑の慾望は、仲々是れで滿足は出來ぬ。汽車は下流一哩ばかりの地で、橋を渡る、對岸はまた北米合衆國だ。橋の中央で再び稅關の檢査を受け、河向ふのナイヤガラ驛で車を辭し、プロスペクト公園內のホテルで朝餐を了し、直ちに先づ米國側から瀑布の上流にと赴いた。

北米大陸の中央に横はる五大湖の中、イリイ、ヒユーロン、ミチガン及びシユー

ペリオルの四大湖の水は、盡く集まつてイリイ湖の東端から、茲にナイヤガラ河の急湍と爲り、水勢兩岸の石を削て、之を左右懸崖の間に集め、三十六哩走つてオンタリオ湖に注ぐのであるが、其の河の上端から、東に奔ること十四哩にして、中流にゴーツ島横はり、爲に河流は二と爲り、島の下、流れは左右とも、急に一大懸崖を走り、其所から落る水が、偖は世界無類の大瀑となるのだ。で、島の右岸を亞米利加瀑、左岸を加奈太瀑、一に馬蹄瀑とも呼ぶ。馬蹄瀑は、名の如く瀑布が馬蹄形に列なり懸るのだ。亞米利加瀑は、幅が一千六十尺、高さ百六十七尺、加奈太瀑は、幅三千十尺、高さ百五十八尺。此の兩瀑布が、一秒時間毎に運ぶ水量は、一千五百萬立方尺であると言はゞ、如何に其の眺めが壯大であるかゞ略ぼ想像されようと思ふ。

亞米利加瀑の上、矢よりも速き急湍に架けたる石橋を渡つてゴーツ島に行けば、鬱乎と茂る森林は、霜に染めて自然の錦を織り出し、今しも上流の山肩に昇りかけた朝日に映つて、木々の紅葉は益す鮮かだ。其の錦繡の森林を過ぎて、瀑の上流に出れば、忽ち細雨面を撲ち來る。此の快晴に此の細雨は不思議と、熟視すれば、是れ瀑布の飛沫が、散じて水煙と爲り、凝て細雨を爲すので、前方を望み見れば、旭光は水煙に映じ、五彩の虹霓は、脚下から起り、美しきこと名狀し難い。

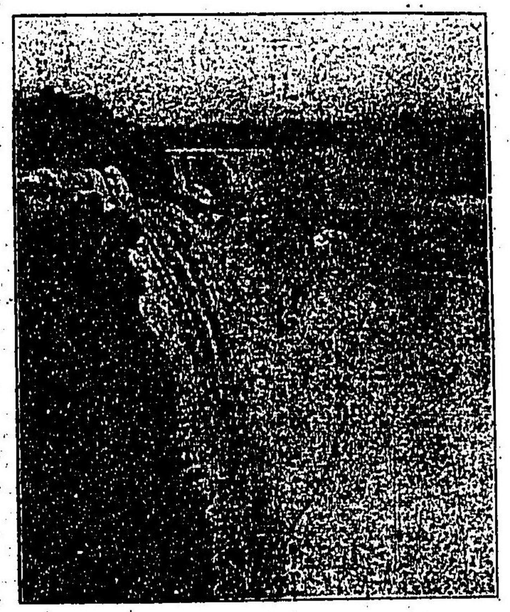
今は全身の雨に濡るゝも顧りみる暇が無い。懸崖の上から、巖角を攀んで身を屈め、偃して下方を窺へば、此所は加奈太瀑の右岸、下方は水煙立ち罩めて其の底を知らぬど、馬蹄形の輪廓を繞らして、浩蕩たる長流は、雪山の崩るゝ如くに落ち注ぐので、水聲轟々、水煙濛々、秒々刻々天地は之が爲に破壞せられつゝあるかと疑はれて、物凄くもまた勇ましい。

若し出來るならば、瀑の下まで降つて見たいと思ひつゝ、轉じて亞米利加瀑の上に行けば、懸崖の上に榜示があつて、瀧の下方へ行く道があるといふ。占めたッと、巖間の急坂を曲折して下ること數歩、其れから下は、獨木の一本柱の周圍に、螺旋

形の梯子が設けられ、グル〳〵繞りながら下ること二百階餘りで崖下に出た。見上れば眼界盡く水の大瀑布が、一面に白く天半から懸つて宛ら銀河の九天から落るかと疑はれ、恍惚として見とる〻時、忽ち一艘の小蒸汽船が、瀧壺目懸けて渦卷く激浪の中を突進して來る。此れは觀瀑の乘合汽船だ。が、此方の崖からは乘ることが出來ねば、余等は再び獨木柱の螺旋階を登り、一旦ナイヤガラ市街の環帶線電車發著所まで戻つた。

環狀線とは、ナイヤガラ河の兩岸に環の如くに敷かれた電車鐵道を、一枚の切符で乘り廻し、氣に入た所で隨意に降車し、飽くまで景勝を賞する仕組で、一人分の切符代が金一弗づ〻だ。で、余等は切符を買ひ、電車で、英米兩國を境する鐵橋を渡り、對岸の汽船乘り場で、別に乘船券と共に、傾斜鐵道券を買ふて、急坂を河岸へ降り、直ぐに汽船に移ると、乘客は皆な頭から雨合羽を被るので、男か女か鑑別が附かぬ。余は往きなり甲板上の一室へ飛び込むと、其所は婦人室で、驚いて逃

げ出した。頓て船は動き出して、先づ亞米利加瀑を下から見上げると、飛沫は驟雨の樣に頭から注いで、若し合羽が無れは全身盡くと濡れるのだ。船は盤渦の激浪中に動搖しながら、更に進んで加奈太瀑の下に向へば、馬蹄形に船の三方を圍む大瀑は、深淵中に怒濤を起して、咆哮怒號する下は、流れ急に、飛沫激しく、立ち昇る水煙は、船を包んで乾坤濛濛として爲に淡暗い。觀瀑の壯觀は實に此に至つて極まる。



ナイヤガラ瀑布

船を旋して再び環帶線電車に移り、馬蹄瀑の上流に走り、今度は加奈太側の崖の上から、偃して瀧口を眺め、再び電車を旋して、國境橋の下流を、河に沿ふて下ること約五哩、矢よりも速

き急流の兩岸、花より紅ひなる紅葉を眺め、また電車を辭して、河岸まで傾斜鐵道で下ると、其所に寫眞屋がある。急流を背景として、一枚寫せと勸める。拒辭してソコ〳〵に坂の上まで曳き上げらるゝと、此の間一丁餘りの上下の賃が、一人金五十仙づゝとは、隨分貪つたものだ。

更に電車で下流へ下ると、急湍は前面の山腹に衝突し、流れは直角形に轉じて、一大盤渦を爲す、また頗る壯觀だ。其の下方の鐵橋を渡れば、其所の下流は、最早流れ漸く緩く、輕舸徐ろにオンタリオ湖まで往來し、水に臨んで數戸のホテルがある。夏時は盛んなる避暑地な相だ。午餐を其所で了し、また電車で河の右岸をナイヤガラまで戻れば、環帶線の切符は全た く使用し了つた。

一夜の中に五百哩の汽車

午後七時ナイヤガラ發の汽車を待ち、停車場内に憩ひながら、繪葉書を認めて居

ると、不意に汽車が到著した。見れば紐育中央線の紐育行急行列車だ。が、時計はまだ七時前七分だ。時間は澤山あると思ひながら、姉崎君は手提鞄を携へて乘り込み、余は其の後ろから洋傘を投げ込んで、踏み段に片脚懸けると、汽車は最早動き出した。此國の汽車は、著くときにはガラン〳〵と鈴を鳴らすが、出るときはスーと聲もなく動き出すのだ。で、余が手提鞄はまだ外にある。余はア、危ないと、一歩退くや否や、汽車は姉崎君と余が洋傘とを載せて走り去つた。而かも余が乘車切符までも、姉崎君の手にあるのだ。余は實に汽車に乘り遲れた。時は七時に五分前だ。余は惘然として逝く汽車の後を見送つて居ると、驛夫は慰めて、モウ五分後にまた紐育行の急行列車が通る。貴方の連れの人は、多分此の先きのバッフワローで下車して待つであろうと云ふので、余はまた倉皇バッフワローまでの切符を買ふ間に、果然同じ線の急行車がまた到著した。本來此れが最初から余等の豫期した列車で、前のは同じく紐育行だが、他の地方を廻るのだ。其の發著時間が餘りに類

似して居るので、余等は早まつて失敗したのである。前に懲りたる余は、大急ぎに飛び乘る。汽車はまたスーとも言はずに直ぐに走り出す。一時間にしてバッフワロー市に著くと、姉崎君は、其の驛で、一人の擔荷夫と共に一々客室を覗きながら、余が到著を待て居た。『ヤア君―來たか、僕は君の切符まで持て來たので、乘り遲れた君よりも、乘り先んじた僕の方が、如何に心配したか知れなかつた！』と云ひつつ余が室へ乘り込むと。汽車はまた直ぐに走り出した。翌る朝七時までに、ナイヤガラから最早五百哩を走つて、余等は愈いよ北米大陸を横斷し、紐育市の中央大停車場に著いた。昨夜途中から電報を發したので、桑港で別れた小塚蘇南氏を首とし、二三の友人諸氏が此所まで迎へられた。紐育では、市の諸方に大停車場が幾つもあるので、電報に到著驛を明記しないと、迎ひの人々を困らすことが多い相だが、余等は幸ひに其事無りしも、恰も日曜で、夜は今漸く明けたばかりである。迎ひの人人は皆な未明に旅宿を出たのであると思へば、可惜安息日の靜かな夢を結ぶことを妨げたのは、甚だ罪深かりしを悔ゆ。

紐育繁昌記

地上の紐育市

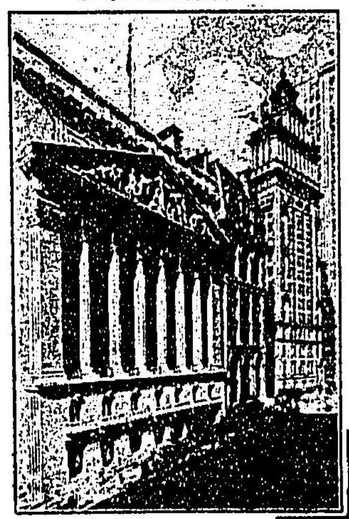
何れの都市か地上ならざらん。特に紐育市に限りて地上と斷はるは何の故ぞ。是れ空中にも紐育あり、地下にも紐育あり、また水上にも紐育あるが爲に、今は先づ地上の紐育から語らんと欲する故である。

今から二百八十餘年の前、千六百二十四年に、和蘭人が大西洋を越て來り、此所で貿易を土人と始め、白人の村落を起してから、後に英吉利人の爲に其の村落を征服せられ、英國の植民地として最初に統治したのがヨーク侯であつたので、其の名を取て新ヨークと名けた。其地が紐育灣の岸に位し、ハドソン河は北から其所の西を流れて海灣に注ぎ、東方は、イースト河の水路が、長島瀬戸（ロングアイランドサウンド）と紐育灣との間に通じて、紐育は宛から兩河と海灣の間に夾まる半島の形を爲し、海は陸岸近くま

で深く、天然の良港を爲したれば、貿易漸く開けて人口次第に殖え、終に獨立戰爭の後、北米合衆國の紐育州として、州政府を此所に置た。其後今日まで百十數年の間に、人口四百餘萬の大紐育市を爲すに至つたのは、世界に無類の驚くべき急遽なる發達である。

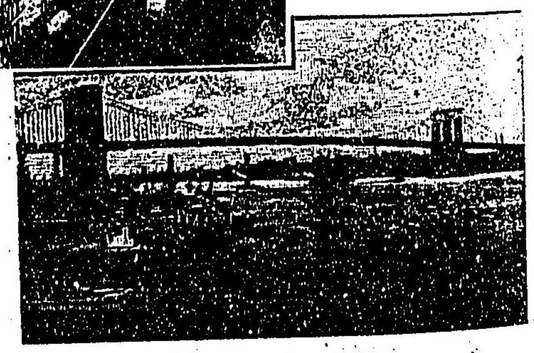
現時の人口四百餘萬の大紐育市も、細かに別てば、マンハッタン、ブロンクス、ブルクリン、クインス、及リッチモンドの五大都市から成り、舊來の紐育は、專らマンハッタン市だけであつたのだ。其所はハドソン河が西に、イースト河が東に、南は紐育灣で、北はハーレム川がハドソン、イースト兩河を接續して、周圍を總て水で繞らす一區劃で、恰も島の形を爲し、而かも最初の市街は、島の南端、舌頭の如く海灣に突き出た所から開けたのだ。今は其の一區劃の全部が、長方形の中央公園を中心として、碁盤の目の如く縱横に井然たる市街、立錐の地も無く開けて、雷に土一升に金一升どころで無く、終に其の北西にブロンクスの新市街を起し、更にイ

ースト川の對岸には、海灣と外海との間に亙りてブルクリンの大都會を起し、其のブルクリン區も、更に北東にクインス區まで擴がり、他の一方には紐育灣西南の對岸、ステーツン島にも、リッチモンド區が生じ、此等の各區を總括して大紐育と稱するに至つた。が、まだハドソン河の對岸にも、ホボーケンやジアーセー市などの大市街が、頻りに膨脹しつゝある。斯くて大紐育の中心なるマンハ



紐育株式取引所

紐育の夜景



紐育ブルクリン橋

ッタンは立錐の地をも餘さず建築で塡めて尙ほ足らず、上は空中に向つて十階二十階三四十階と、大建築は雲を突て次第に高く伸び、下は地底五十呎百呎と、漸く深く地軸を指して進み、猛烈なる膨脹を續けて居るのだ。

最初開けたマンハッタンの南東端を基點として、市街は北西に一條通り二條通りと十二條に通じて眞直ぐに縱に並び、更に一丁目から二百二十丁目まで横に列つて、中央公園は名の如く市の中央に長方形に設けられ、五條通りから八條通りの間、六十丁目から百十一丁目までの間に横はり、公園の東方を東何丁目、西方を西何丁目と呼び、ブロードウエーの大通りは、南端から起つて斜めに西部の中心を貫き、百二十七丁目に至つてハドソン河岸に達す。

碁盤目の如く正しく開かれたる市街の縱横に、汽車鐵道、鋼索鐵道、電車鐵道が、蜘蛛の巢の如くに通じ、地上に敷設した鐵道だけで足らずして、高架鐵道を架け、其れが尙ほ足らずして、終に地下鐵道を開通し、細長き全市を縱に貫ぬくブロード

ウエーの大道は。地下に四線の鐵道あつて、其中の二線は普通列車を往復し、他の二線は急行列車で、十五哩許りの間を僅に二十分で走る。其の地下電車が、稍や繁昌區域を過ると地上に現はれ、更に場末に向つて走る間に、何時の間にか高架鐵道と爲り、一線の電車を南端から北端まで乘れば、地下、地上、高架の三線を試めすを得べく、若しも六條通りの二十三丁目で、地上から高架鐵道に乘らうと思へば、其所に自働の階段があつて、其の最下段に起てば、毫も足を動かすこと無く、階段は自ら動いて一段々々と上方に最上層まで運び上げる。

若し夫れ軌道に依らずして市中を往來するに、馬車自働車の夥多き、時には自轉車も交りて、絡繹たる行人の間を走り、正に是れ肩々相摩し、毂々相擊ち、雜沓熱鬧驚ふるに物無し。其の道路は蓋とく歩道と車道と區別し、何れも路面を「コンクリート」か土瀝青で固め、路地の狹い所でも、甃石を敷き、濡れても泥無く、乾いても砂塵を揚げず、路傍に電信柱無く、空間に電話線無く、電車も電燈も送電線を

地下に埋設し、市街の間には唯だ歩車道の境界に並木の列なるあるのみ。去れば市内に多くの工場あれども、動力は皆な電氣で、黑煙を吐く煙突無れば、市中は總て無煙、無線、また無柱で、美觀を損じ、交通を妨げ、衞生を害するものは一切無い。

不思議なことには街頭の便所も無い。で、行人の便所に赴かんとするには、酒屋か煙草屋へ買物に入て用を便ず。其の酒屋も煙草屋も、日曜には總て休業と稱するも、裏口から這入れば、何時でも商賣を續けて居る。

道路廣く、障害物稀なるも、車馬の往來織るが如くなれば、小兒の街頭に遊び戯るゝは絶て無く、隨て馬車に曳き殺さるゝ樣な怪我は少ない。斯く人皆な忙し相に往來する中を、更に忙し相に駈け走る新聞賣子は、朝と晩との發行新聞を、小脇に抱へて早口に叫びつゝ飛び廻る中に、同じ新聞の廣告男が、腹と背中に廣い長方形の看板を鎧の如くに著て、其の看板には、其日の新聞の重要記事を、太い字で、極めて簡單にして面白相に書き附け、遠くからも眼に著く樣にして、ノソリ〳〵と徘

徊するもある。また兜形の帽子を冠つた體格肥滿の巡査が、徐々と街角に徜徉するもあり、高帽の馭者が、辻々に馬車を駐めて客待するもあり、ホテルの前の椅子に腰懸け、煙草を吹かしながら通行人を眺めて居る田舍人もありて、最多忙の社會にも、また最も閑暇らしく時を潰す人々も見ゆる。

新開の市街は、到る所道路廣きも、最も早く開けたる南端の舊市街、一に下た町と呼ばれるウォール街の邊りは、銀行、會社、取引所、軒を並ぶる世界金融の中心、今は倫敦のロンバード街の繁昌をも凌駕せんとする繁昌區が、道路甚だ狹く、幅が僅に七八間、而かも其の兩側の建物は、市中で最も名高いのが相對して並び連なり、巍然雲表に聳えて、概ね二十階以上なれば、道路は宛ら谷底に在るが如く、仰いで僅に蒼空を望み見るばかりだ。此の狹い道路の中央で、株式相場のモグリ賣買が、公然と一大市場を開き、往來の妨害と爲るも構はずして、盛んに取引をやつて居るが、古來の慣習は默許して、馬車も之を避けて通る。

去て勸工場を訪へば、世界で百貨商店の元祖、ワナメーカーは、シカゴのマアシアルフイルドと竝んで、米國人が、世界の最も大仕懸けなる店と誇るだけに、衣食住總ての必要品は言ふも更なり、東西各國の美術品、裝飾品、玩弄品、如何なる物も備はらざる無く、其の商品の夥多き、世界的の共進會、即賣の博覽會、金さへあれば萬物總て此所で望み次第なり。商品の多いのみにあらで、最上層の料理室には、客の好むが儘に料理も供し、聞くは放樂の音樂は、斷えず嘲喨たる名人の樂譜に耳を澄ませる。其の二階、三階、乃至五階六階への上下には、所々に昇降機を備へて、客には一歩も昇降の足を勞せしめず。其の昇降機にも普通と急行とあつて、何れの昇降箱にも、何れの陳列室にも、到る所人を以て塡め、買物代金を帳場へ送る電線は、網の如くに八方に架けられ、金錢と計算書と、自働的に線の上を走り廻ること、狩り出されたる二十日鼠に髣髴たり。

更に馬車を中央公園に驅れば、今まで戰場かとばかり疑はれたる雜沓の天地とは、

全然觀を異にして、其同椅子に倚て編物する婦人、芝生に寐ながら書を讀む學生、樹蔭に乳母車推す保母、池上に小舟を浮ぶる小兒、或は夫妻同乘の馬車、自働車、何れを見ても悠優自適。人間以外の別世界かと疑はる。公園の中心に、水道の貯水池を利用して池と爲し、其の岸の巨巖の上に、三層閣を設け、何人も自由に登臨して四方の眺望を縱にさせて、而かも澁茶を強ひられて、茶代を貪らるゝ樣な不愉快は無い。園内には自然の巖石に富み、之を利用したる泉石の配置は、頗る意匠の妙を極め、また其の附近には、美術館と博物館とあり、自然美の眺めに飽けば、轉じて人工美を賞するにも適す。

公園の西側は、米國大富豪の軒を竝ぶる五條通り、ヴアンダーヴイルド、ロックフエラー、ハリマン、モルガン、カーネギー、ゼームスヒルなどの金穴は、何れも公園に面して邸宅を構へ、樓上の窓縣を排げて、朝暉夕陰の風景を賞す。斯かる大富豪が多ければこそ、上は九天から、下は奈落の底まで、天工を奪ふて鬼神をも泣

かせる様な大事業が仕遂げらるゝのだろうと、感服して路傍に立ち、連續して走る自働車を、見るとも無く眺めて居ると、近寄て何か言ふ男がある。熟視すれば乞食が錢を呉れといふのであつた。大富豪の多い此の都市にも、貧民もまた少なくないと見ゆる。

空中の紐育市

無根の事實を形容して空中の樓閣と言ふたのは昔時の夢、一たび紐育へ來て見れば、空中の樓閣は、雲を突て聳え、市街は宛ら深山幽谷の中を過る樣に、兩側の建築は懸崖絶壁の如くに連なつて居る。其の普通なるが十階以上、稍や高きものは概ね二十階以上、最も高きものは四十階から五十階である。で、人類は常に地上に住み、專ら地上を往來することと信じたりしに、今此所へ來て見れば、人は天上遙かに空中に住み、道路は空中から地上まで、縱に昇降機で往來して居る。大なる建

築内では、昇降機が汽車の樣に普通と急行との二種あつて、急行に乘ると、グッと頂上まで一直線に引き上げられ、また引下げられ、普通には、一階ごとに入る人と出る人が、恰も電車の停留場の樣に群がつて居る。此所の日本總領事館などは、ウオール街六十番地、第十九階目の裏手の數室である。曾て三井物産會社の支店で、給仕に賴んで、ソッと便所まで案内して貰ふと、急行昇降機で二十三階の上まで連れて行かれた。勿論下の方の室ほど價格が高いから、便所などは斯かる上の方に設けられてあるのだ。上でも下でも何れにして機械力で昇降するのだから、脚は些しも勞せぬ。汚物は、鐵管で地下へ導き棄てる故、便所は地下でも、二三十階の上でも、掃除には毫も難易の相違は無い。去りながら二十三階の上と云へば、東京淺草凌雲閣の二倍以上の高さである。其んな高所まで一々小便に昇ると聞かば、實際を見ぬ人は、恐らくは信用が出來まい。

二十階三十階と言ふ、未だ精確の高さが知れぬ。更に其の實際の高さを記すれば、

「パークロー、ビルデング」は、三十一階三百三十六呎で、屋根の頂上まで三百九十九呎、其の上に立てた旗竿の四十八呎を加へて、四百四十七呎、まだ其の地下室が五十七呎掘込んであるので、上下通じて五百五十二呎、乃ち九十間餘りの高さだ。其の建築費に四百萬弗を費やし、構内に九百五十の事務所と、十個の昇降機があつて、其の昇降する行程が、一時間に平均十六哩三分で、一時間に運ぶ人員が平均八百十四人。其の構内を借りて住む者が、三千五百人ある。まだ驚くべきは、其の昇降機の監視人が、總て其の借室人の名を記憶して居る相だ。

高いので名高きは「シンガービルデング」で、四十一階六百十二呎、地下の掘込を合せると、四十三階、頂上まで六百九十呎、即ち百十五間の高さだ。此の建築内で、室内を暖むる蒸汽鐵管の長さが十五哩。電燈の數は一萬五千。昇降機の急行は三十秒に三十階づゝ走る。此所では屋上の旗竿一本をペンキで塗るのに、金一千弗の懸賞で募集した事がある。雲に入る天半の長竿に攀じ登つての離れ業だから、一千弗

でも高くは無いとの評判だ。

最も大なる建築は「メトロポリタンビルデング」で、幅員が二百呎、奥行が四百廿五呎、高さは地下の掘込から五十一階六百九十呎、「シンガービルデング」と同じだが、面積は此の方が遙に大だ。此等が最も高きを以て誇つて居る間に、「イクイテーブル」生命保險會社は、今六十二階の大建築に著手して居る。此の勢ひで進むならば、紐育の建築は、那邊まで高くなるか想像も著かぬ。空中の樓閣は、正に事實となつた。其の大建築が、イースト河の右岸に、林の如くに立ち並んで居る。が、是れ紐育の樣な華崗岩から成る堅固な地盤にして始めて望むべく、他の國ならば、忽ち地震で倒れて仕舞ふのだ。

地底の紐育市

空中の樓閣、既に月世界にまでも達かうとして居るとき、地下の鐵道が、また奈

落の底までも屆かぬ間は止まぬといふ勢ひで廣がつて居る。紐育の市街は、到底世界の怪物だ。

地上の市街に、電車は間斷なく走れども、未だ通行人を運ぶに足らず、更に高架鐵道を市内の要部に設けて、電車は斷えず霹靂の聲を行人の頭上に響かして居るが、是だけでは未だ目に餘る無數の群集を運ぶこゝ思ひも寄らず。此に於て終に地下に幾多の鐵道を敷設し、電車で間斷なく彼等を運ぶことゝ爲つた。

實に大紐育の最要部なるマンハッタンの全面積が、二十二方哩餘の所へ、今は二百二十萬の人口が住で、一方哩に約十萬人づゝの人が居る。從來世界で人口最も稠密といふ倫敦が、一方哩に三萬八千人餘といふのに、此所は其の二倍半である上に、まだ何程まで增加するか測り知られぬ。其の市街は四方皆海と河とで限られた島だから、此上毫も廣がる事の出來ぬので、勢ひ上は空中へ廣がり、下は地底へ掘り下げる外無いのだ。

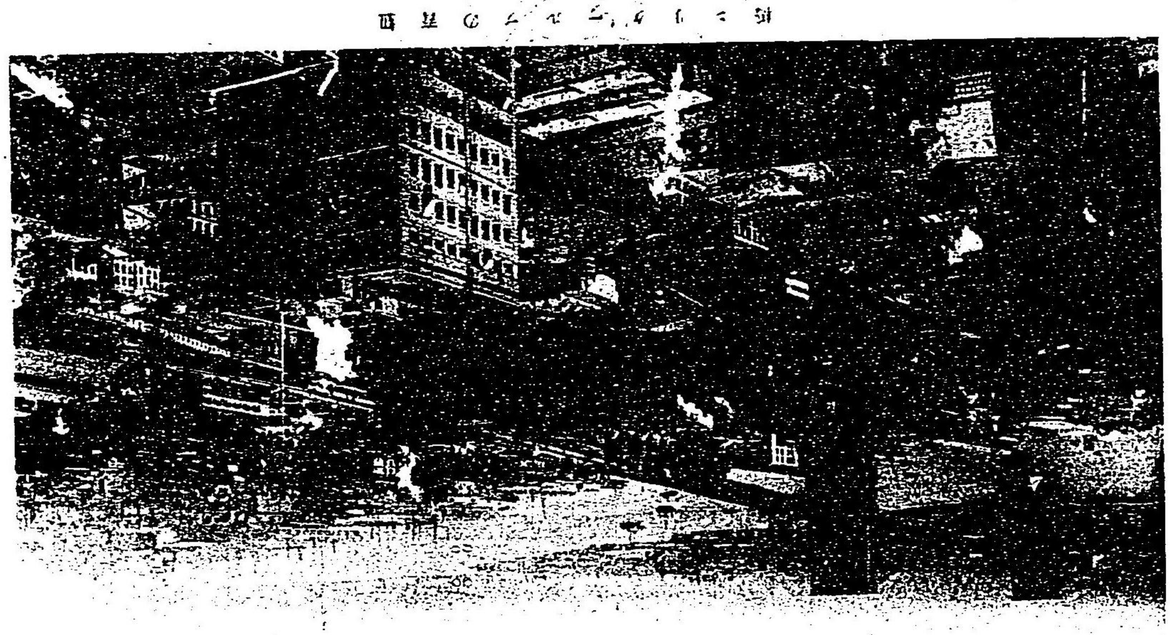
斯く市街面積の廣げ樣が無いので、イースト川の向ふ岸に開けたブルークリン區が、最早百四十萬の人口ある大都府と爲り、女王區の人口が、二十一萬に上り、其他にブロンクス區、リッチモンド區の總て五大區を合せると、大紐育市の人口は、千九百六年の末に、四百十一萬人と爲つた。で、其の紐育とブルークリンの兩大都市を接續したる全長六千五百三十七呎のブルークリン大鐵橋が、毎日橋上の電車で運ぶ人員だけでも、平均十三萬五千人に上る。

まだ其の外に、同じ河にウイリヤムスバーグといふ最近架設の世界最大の鐵橋が、長さ七千二百呎なるもある。それでもまだ足らず、同じ河に、も一つ長橋の架設中だ。實にや市中で地上鐵道、高架鐵道で運び切れずに、地下鐵道をも間斷なく走らせ、また橋や汽船でも、到底十分に交通を滿足させられぬ所から、終に河の底や海の底にも鐵道を敷設することになつたのだ。

單に地下鐵道と云へば、倫敦でも巴里でも伯林でも近來澤山あるが、紐育のは全

然無類の大規模で、複線の中間に、更に急行列車の複線があつて、地下に軌道が四線並び、それが南端の海岸から、東北方九十六丁目まで、長い市街の中央の大通り、ブロードウエー街の地下を走つて、更に其所から二岐となり、一線はブロンクスに向ひ、一線はキングスブリッヂに向ひ、南端より北端まで、一時間を費さずして走る。其の工事は千九百年に著手し、千九百四年に竣工し、三百二十一萬二千立方ヤードの岩石と土壌とを採掘する難事業を、滿三年間でやり遂げて、而かも其の工事中、唯だの一日でも、道路の通行人を妨げず、全然地中で工事を續けた相だ。また此の難工事の全線を通じて、賃錢は端から端まで五仙均一だ。

更に驚かるゝのは、河底の鐵道である。イースト河の河底は、深い深い地中を近頃出來たばかりの二條の電氣鐵道が、例の普通と急行と並行して走つて居る。またペンシルバニヤ鐵道の隧道が、イーストとハドソンの兩河の底に四個ある。此等は何れも河底といふよりも、寧ろ海底といふべき、海灣に近い水底の地中に、鑿りな



から鐵管を繋ぎ合せ、隧道は此の大鐵管で出來上つて居るが、其の大仕懸けと言つたら、無論世界無比だ。

水上の紐育市

紐育の發達が此の如く急なる其の最大原因は水だ。抑も和蘭人が始めて此所の海灣から上陸して、土人と貿易を始めて以來、歐羅巴の貨物は多く此所に集まり、北米大陸の貨物もまた此所に集まり、終に東西兩大陸の貨物集散の中心と爲た。で、市街は次第に膨脹し、遂に現時の大都會を見る樣になつた。去れば紐育の發達は主として此の海灣の賜ものである。後には其の海灣に人工を加へ、如何なる大船舶も、世界の各國から往來して、ハドソン川とイースト川の沿岸に、艀舟も用ゐず、棧橋も要らぬ樣に、數百の船渠を櫛の齒の如くに造つたのが、益ます紐育の發達を促がしたのだ。で此の海灣と、河流と、船渠と、總て水の利用が紐育の生命である。

試みに船をマンハッタン區卽ち從來の紐育の最南端、紐育灣の岸、サウスフイリーに發し、船首を右に轉じて西北にハドソン川を溯れば、右舷のマンハッタン區の岸には、一號から百七號までの大船渠が、恰かも櫛の齒の如くに連なり、何れの船渠にも、世界を横行する大會社の大汽船が、陸岸に密著して、何れの船も、皆な倉庫の中に繫がれてあるかと疑はる。頭を旋して左舷の對岸を望めば、ジャーセー市の岸にも、同じく大船渠が櫛の齒狀に連なつて、大西洋を往來する大汽船が、其所にも帆檣林の如くに立つ。其等の兩岸または川の上下を往來する汽船は、縱横に浪を蹴て、通り違ふもの織るが如く、水上にもまた世界無類の繁昌を現出す。

マンハッタン區の岸、櫛齒形の船渠が稍や盡きる所、綠樹水に臨んで長く連なるが河岸公園、水に對する共同椅子は、四時遊覽の客群がり、河上には徐ろに波に棹さして社會の忙しきを知らぬらしき短艇も多い。曾て日本の筑波千歲の兩巡洋艦が、紐育へ廻航したとき、此所まで溯つて、碇を公園に近く投じ、市民の盛んなる

歡迎を受けたこともある。其の公園の中。西百二十三丁目の水邊に近く隆起する小丘の上には、南北戰爭の驍將グランド將軍と同夫人との墳墓が、大理石で築かれ、其の内に將軍夫妻の石棺を藏めてある。

將軍墓畔を過れば、公園も將に盡きんとするは、恰も東京の向島公園が、梅若塚で上流に盡きると似て、また其の上流へ三哩ばかり溯れば、我が綾瀨川に似たるハーレム川が、東の方に枝流を爲し、舊來の紐育市なるマンハッタン區は、此のハーレム川の二百二十丁目で盡き、流れを境として北方には、ブロンクス區が起る。ハーレム川に跨がる數條の橋梁は、兩區の市街を接續し、マンハッタンを縱貫する地下鐵道は、百二十五丁目から地上に現はれ、後には次第に高架鐵道と爲り、ハーレム川の鐵橋を渡つて、ブロンクス區の北端まで走つて居る。

ハドソン河の航行から、横に轉じてハーレム川に入り、マンハッタンとブロンクスの兩區の間を、幾つとなく橋の下を過ぎ、雷と轟く高架鐵道の電車を頭上に仰ぎ

つゝ、川筋を東に漕でイースト河に出れば、水面の幅はハドソン河と伯仲して、對岸はブルークリンの大都會である。船は下流に向ひ、右舷にマンハッタンを、左舷にブルークリンを眺めつゝ走れば、右方は人口二百二十萬、雲に聳ゆる三四十階の大建築が、河岸に列つて、人造の山を築けるが如く、左方も人口百四十萬の大都會、日々夜々に膨脹して、活氣は乾坤の間に磅礴たり。其の兩大市に跨がる長橋、最近千九百三年に出來上つたのがウヰリヤムスバーグの大吊橋、長さは七千二百呎、世界第一の長橋で、仰げば高き中央は、水面の上百三十七呎、橋上には四線の電車鐵道と二條の馬車鐵道の外に、二條の自働車道と、二條の人道とがあつて、何れも間斷無く車馬を運んで居る。其の橋下を過ぎて更に下流に進めば、名高きブルークリンの大吊橋は、長さ五千九百八十九呎、兩端からは六千五百三十七呎、幅八十五呎にて、橋上に二條の車馬道と、二條の電車軌道と、中央に廣き一條の步道とあり。中央の高さ水面上百三十五呎、橋の兩端の塔の高さは、百四十呎、塔と塔との間に通

ずる四大鐵索の直徑一尺五寸餘。其索で此の大鐵橋を吊て居る。其の橋上の電車で毎日運ぶ人員の平均は、約十三萬五千人で、行人の最も輻輳する午前七時乃至九時、午後の四時乃至六時の間は、橋上總て人を以て塡むるを常とすといふ。

ブルークリン大吊橋の邊り、河岸の上方も下方も、又船渠は櫛齒狀を爲し、河口の最南端なるサウスフイリーから數へて、橋の上下は第二十三四號で、上流は此の川にも船渠が百二三十號まで連なつて居る。斯くして漸く漕で、當初出發したサウスフイリーへ戻れば、丁度ハドソン河を溯りハーレム川を經てイースト河を下り、舊紐育なるマンハッタン區を一週したのであるが、其のハーレム川の對岸のブロンクス區、イースト河の對岸のブルークリン區、クインス區、紐育灣對岸のリッチモンド區の各市街を合せて、大紐育四百二十萬の人口を爲すのである。而かも此の如く大都會を爲す最大の生命は、世界の各國から大汽船を吸收する水である。實に水運は紐育の生命である。

大紐育の咽喉、サウスフイリーから、西南の海灣中、巨人右手を擧げて天を指しつゝ島中に立ち、出入の船舶を監視するが如きのがある。是が名高き自由の女神像、千八百六十五年に、佛蘭西から寄贈した大銅像で、高さ百五十一呎、兩掌の長さ十六呎五吋、中指の長さ八呎、礎石からの全長三百五呎五吋、此の一巨像ありて、先づ紐育灣を出入する旅客の膽を潰させる。此の銅像や、イースト河の吊橋や、其の河岸に連なる船渠や、偖は陸上に峙つ大建築、河底を貫通したる大隧道など、皆なる何事にも世界の最大を以て自慢とする米國人氣質を遺憾なく表はして居る。

米國東部の跋渉

米國獨立の發端地ボストン市

紐育を出發して、汽車の窓からニウヘブンのエール大學を左方に眺め、オイスター灣の海を右方に見て、名物の牡蠣を食堂中に賞しつゝ、北に向つて走るに、流石

は全米國中、最も早く開けたる紐育ボストン間の鐵道とて、プルマン式の客車は、最も贅澤を極め、室内總ての木材は、紫檀を用ひ、氈毳の上に個々特立せる椅子は、前後左右自在に回轉し、窓外の水を隔てゝ横はる長島を望めば、宛然故國の瀬戸内海に對する感がある。

車輪形に八方より集まる軌道の多きこと、世界第一のボストン市へ著たのが午後六時、鞄をホテル、ベルビューに投げ込み、室を定めて後、直ぐに外に出て、中央公園に近い一料理店に入ると、奇らしくも給仕は皆な婦人で、余等の這入た時は、食堂で音樂を奏して居たが、暫時にして止めて、多くの客も次第に出て仕舞ふ。まだ八時を過ぎた許りだが、客は余等三人のみとなり、電燈の數も半減と爲た。後に聞けば此家は婦人客を主とし、男子客は、大抵夫人同伴者で、それも午後八時には食堂を閉るが例なるに、不案内の日本人、男子ばかり三人で入り込だのだ。

流石にボストンは、米國獨立の旗を始めて樹てたる所、最も早く開けたる都府だ

けに、市街瀟洒、風俗都雅、紐育から來ると、大阪から奈良へ來た樣な感がある。

中にも美術館中の有名なる日本館は、明治の初年に、フエノロサ、ビゲロー等の鑑識家が、二束三文の廉價を以て、また美術の眞價を知らぬ日本で、買集めたる古美術品が、盡く此所に陳列せられ、日本の古屏風ばかりが一千雙以上ある。京都大德寺の寶物なりし宋畫の五百羅漢百幅中の十幅は、香港で一萬圓で買つたのだとか。土佐光起筆、保元平治物語白河殿夜討の繪卷物は、三卷の內、一は宮內省に、一は岩崎家に、他の一卷が此れだとか。或は久安四年の裏書ある法華堂の根來曼陀羅だとか。稀世の珍品が、日本を去て、此所に在るのが夥多しい。中には黃金造りの太刀で、買ふた時の代價が僅に金九圓で、現時の相場は一萬圓以上といふのもある。今は特に日本美術館建築中で、東京美術學校の卒業生數人と、一人の日本經師屋も居て、專ら保存に力を盡して居る。

此夕ボストン、トリビューン新聞の記者來り、寫眞を取るから一寸玄關まで出て

呉れと云ふので、出るや否や、パッと一閃、「マグネシユーム」を燃して、余等の影を鏡玉中に收めて去たが、翌る朝の新聞を見ると、日本の文學博士姉崎、大銀行家小塚及び大出版業者坪谷といふ肩書で、麗々と新聞紙上に揭げられた。總て全米國到る所、新聞記者の來訪甚だ五月蠅く、而かも三四分間の面會にも、長く引伸して、一段餘りの記事を作るが此國の特色だ。

ボストン郊外の秋色

空は隈なく霽れたが、朔風は面を撲ち、數しば帽子を飛ばさんとする十月二十五日の朝、余等は自働車で、ボストン市の內外を乘り廻すと、此國獨立の劈頭に、英軍と戰ふて名高いバンカー丘は、市內の小丘ながら、今は壯大なる紀念碑が立てられ、碑の內部、頂上まで昇降機で登臨が出來る。更に去て郊外に出れば、レキシントンやコンコルドの村落、皆な獨立當時の古戰場で、此國には絕好の紀念地、車上

で眺めながら走れば、路傍の木々は皆な霜に染め、或は黄、或は紅に花よりも鮮かだ。林間の農圃は丘陵起伏の間に散在するので、此國には奇らしくも小規模の耕作法を用ひ、農夫手から鋤を執て、「キャベッ」の畦を耘ぎるのを見ると、坐ろに故國の秋が偲ばれる。

コンコルドで有名なる碩學エマーソン氏の舊居を訪へば、閑靜なる林間の一軒家、翁逝て主人は最早變りたれど、昔ながらの橡の木は、漆黒色に熟したる實を庭中に散る黄葉の中に落して、秋は一としほの色を添へぬ。

歸路ケムブリッヂにハーバード大學を訪ふ。此所は我國現代の名士、小村壽太郎、金子堅太郎、目賀田種太郎等諸氏を

ボストンバンカーヒル獨立戰爭紀念塔

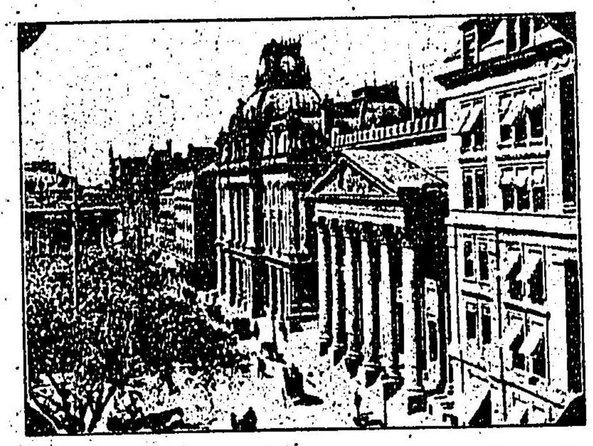
出したる校舍、日本には殊に關係が深い。白人の一學生は、普ねく各科の講堂を案内したが、了つて門を出るとき、彼方から金一弗下さいと、案内料を請求した。

姉崎君は今後暫らく此所に留まつて講義に從ひ、余等は今後此地を去て英領加拿太に赴くので、此夕ホテルで三鞭の別杯を擧ぐ。三人は、日本を發して以來、形影追隨二箇月、今夜袂を分てば、明朝は最早余等は加拿太のモントリールの客となるので、兩者の間、忽ち三百四十一哩を隔つると思へば、惜別の情殊に深い。

冬の朝のモントリール市

夜は今明けかゝり、汽車は一大長橋を走る。此所は亞米利加と加拿太を境する五大湖の水を合せたセントローレンス河だ。國境は最早未明に越えたので、橋の北岸は加拿太のモントリール市、ウキンゾル停車場で汽車を辭し、構内の料理店に入ると、朝餐は一人前五十仙均一だ。

驛を出れば寒氣急に猛烈で、寒暖計は華氏零下二度、途中は氷結して、馬車の馬は滑り勝ちだ。ホテル附近の壯大なる建物は、多く寺院で、カセドラルの圓塔は、市中第一の壯觀と稱せらる。市の北端、マウント、ロヤールの麓で、博物館を一覽し、更に紅葉の美しき林間を、紆餘曲折して山上に登り、洋を横斷し、下流のクエベック市か、または此所まで溯航し來りて、同社の鐵道と連絡するのだ。此の眺望に富だ山上の公園は、頂上に雪滑り競爭場あり、今後一箇



モントリールのセーズス街

*降を放つて脚下を眺むれば、全市は一望の下に簇つてセントローレンスの大江は、洋々として東に流れ、ヴイクトリヤの長橋は、江を横斷して架かり、加拿太太平洋汽船會社の大船は、歐羅巴から大西

月の後には、盛んに利用せらるといふ。

眺望は壯大なるも、寒氣の酷しきに避易し、山を下つて、何か溫かい物で腹を煖めんとて、料理店に案内せよと、馭者に命ずるに、此地は元と佛蘭西領とて、今も佛人多く、我等の馭者も、佛人で英語を解せず、餘程氣轉を利した積りで、馬車を毛皮屋の店頭へ附けた。餘程我等が寒む相に見えたと思はる。此所は寒*地とて、防寒服の毛皮は甚だ多いが、直段が何れも高いので、陳列所を一覽し、何も買はずに出ると、寒い上に冷かしたからでもあらうか、寒さ益ます加はる。それにも屈せず更に市内の公園で、大急ぎに紀念塔を撮影して、再び前の停車場へ歸れば、何時しか余は手袋を半分遺失した。

セントローレンス川激流の汽船

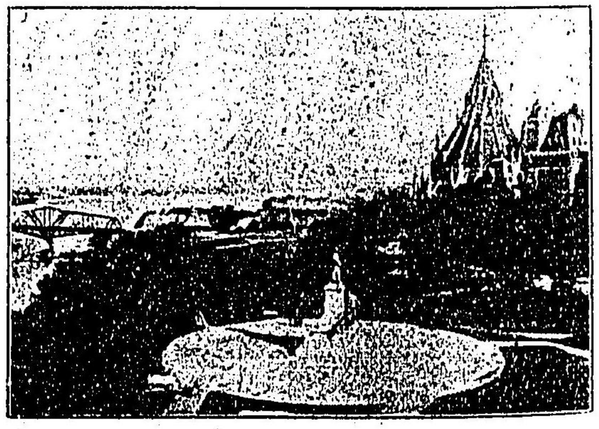
英領加奈太の首府オツタワ市

寒さ嚴しいモントリールを、午後四時に發し、汽車はオッタワ川を横ぎつて、湖水に似たる流れを右に眺めつゝ、東方に走れば、水邊の漁村には小學校の前で、天使の樣な男女の兒童が、打ち群れて遊ぶ風俗は、今まで亞米利加の大陸で見たとは全く異なる服裝なので、之を同車中の人々に尋ねると、此の邊りは、百年ほど前までは、佛蘭西領で、英佛多年の戰爭の結果、和睦して英領に歸したれど、當時の協約にも、佛人は降伏にあらで、聯合なりとて、國語と、敎育と、宗敎と民法とは、佛蘭西領有時代のを變更せぬとの條件であつた。今も此のクエベック州内に、三百五十萬の人口中、二百五十萬人は佛人である。で、小學校にも、英國式と佛國式とあつて、此所のは佛國式の小學校だと聞て見ると、成る程風俗が著しく變る理由も分つた。

唯だ敎育のみでなく、加拿太には、政治上にも、英吉利派の保守黨と、佛蘭西派の自由黨の二派あつて、總督だけは、五年の任期で、英本國から任命するが、内閣

は議會で多數を占むる代議士中から組織せられ、更迭は度々ある。宗敎は、英吉利派の新敎と、佛蘭西派のカゾリック敎と對立し、小學校も、此等の寺院で設立するので、國民は是非とも入學せしむる義務敎育では無い。恰も日本舊時の寺小屋敎育と似て居る。

黄昏オッタワ市に著く。此所は加拿太政廳の在る所、國會議事堂も此所にある。停車場から、小橋を隔てゝ對岸の一ホテルに投宿すると、生憎普請中で、客室に蒸氣來らず、相替らず寒い。食堂に入ると、四方の壁に澤山の大鏡を懸けて、電燈が四方から映じ、無數の燈影反射して、星の如く閃めく。食卓の上に、大輪の菊花を多く飾てある故、頻りに賞めると、給仕は喜んで、一枝づゝ手折

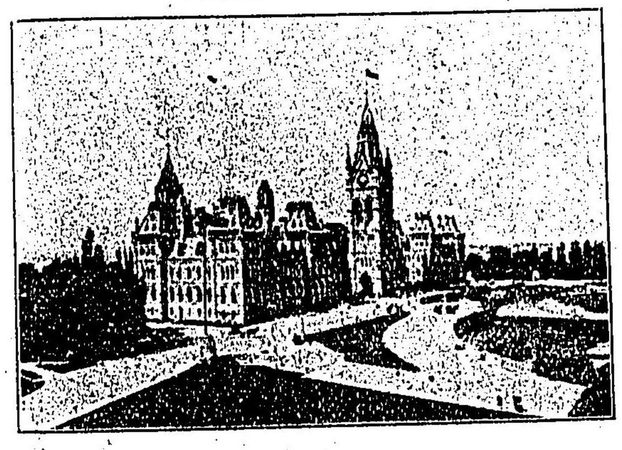


オツタワ市のパーリヤメント丘

て、余等の襟に挿んで呉れた。

夜半、物あり頻りに窓を打つ聲す。翌る朝見れば、霰が降つたのだ。頓て雪と爲て、朝餐の食堂に入る頃は、飛雪紛々として綿をち切て投るが如く、窓外は忽ち一面の銀世界と化し、馬車を命じて日本總領事館を訪ふ頃は、地上積ること最早五六寸、恰かも日曜とて、街頭行人稀に、電車の往來も少なく、余等の馬車は雪を蹴立てゝ走れば、路傍には、例の天使の樣な小兒等が、林檎の如く頰を赤くしつゝ、雪球を圓めたり、中には橇を雪の上に弄そぶのもある。見れば路傍の並木はまだ多く紅葉を殘して居る。誰やらの駄洒落に、此所ら邊りは加奈太ゆゑ、紅葉のあるのに雪が降るッ。

オツタワ市の議事堂



總領事館に、總領事と一人の書記生との外は、現今未だ此市に居住する一人の日本人も無い。此夕オツタワを發し、余等二人でドローイング室を買ひ切り、晩食を室内に運ばしむ。汽車はグランド、トランク線、室内溫かにして春の如く、四百七十一哩を一夜の夢の中に走つて、翌る朝はまた紐育市中の客となつた。

特色多きヒラデルフイヤ府

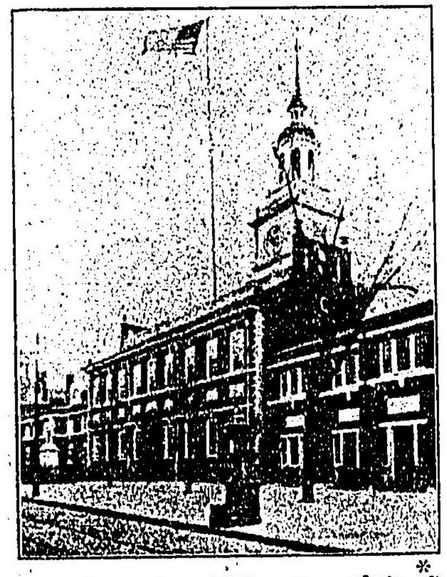
雪の加拿太に避易して、匆々に紐育へ歸れば、ハドソン河畔の紅葉は、今を盛りと色づき、秋は今正に闌はである。是より更に南方ヒラデルフイヤから、華盛頓に遊ばんとするに、同行の蘇南氏は、前日夏服で零度以下の地方を跋渉して大いに困しんだのに懲り、今度は全然冬服で出懸けた。

紐育市を拂曉に發し、ペンシルバニヤ鐵道のイースト河底隧道は、工事成るに垂んとして未だ成らぬ。で、渡船で河を越え、對岸から汽車で走ること一時間餘りで、

ヒラデルフィヤ市に著いた。人口百三十五萬の大都、全市が申し合せた樣に、三階建の赤煉瓦、青い窓掛を垂れて、玄關の階段には白色の大理石を用ゐる。此の青、白、赤の三色は、正に此市の特色だ。尙ほ一色を加ふれば、黑い人種が甚だ多い。

此所には雜誌の發行部數世界第一で、廣告料の高いことも*でから、社内の參觀を求めると、流石は米國だ、受附の婦人は容易く承諾し、一枚の小紙片を交附し、給仕に二階へ案内させる。二階でまた婦人の一事務員に、其の紙片を出すと、直ぐに其所の給仕子僧に案内を命じた。何所でも參觀者を案内する

ヒラデルフイヤ獨立館



*世界第一といふ貴女家庭雜誌の本社がある。それを訪ふた。唯だ見せて呉れといふも妙ならずと、二人で、一ヶ年分づゝ注文し、前金を拂込

ときは、若干の案内料を貰ふのが普通だから、子僧は大喜びだ。先づ見る三階の大廣間は、一面編輯部、一面事務室で、總人員は約百五十人、盡とく婦人だ。續いて背後の一大工場へ行くと、三層の工場は、最上層が植字室、其の次が印刷所と製本室、最下は荷造り場と發送室だ。作業は上から下へ、順次に運んで、發送所からは眞ぐに馬車で送り出す。此月の發行高は、正に百二十萬部だ。ソコで廣告料を見ると、縱約一尺五寸、幅約九寸五分の、表紙裏の色刷が、一頁一回金五千弗、驚く勿れ我が金一萬圓だ。

去て造幣局を視るに、金銀を溶解してから、引伸ばして薄板とし、更に圓く貨幣の形に打ち拔き、之を水壓機で壓搾して文字を印刻し、最後に箕に上せて選擇し、分量不足のものを排斥し去ること、恰も豆を簸るが如く、此所で見ると、金銀貨は殆ど砂礫の樣だ。別室の世界各國貨幣陳列場へ行くと、日本の古金貨大判が、燦然として異彩を發つて居た。

また轉じて市の獨立紀念室に入る。此所は始めて北米十三州の代表者が、獨立する爲に集まつて、北米合衆國の憲法を制定し、銘々其れに署名した所、當時の机も、椅子も、其儘に保存し、特に當時英國軍の進擊を報ずる爲に、盛んに亂打したる釣鐘が、大きな龜裂を生じた儘に陳列せらるゝは、此の國民の爲には最上の紀念に相違ない。

其所を出ると、馭者兼案内者は、支那人部落へ馬を進め、悠々と乘り廻した。後に聞けば、余等を支那人と見違へ、餘程氣を利かせた積りであつた相だ。

居心地最も好き華盛頓市

紐育を東京と見ると、華盛頓市は西京だ。此所は合衆國の政府及議會の在る所なから、人口は紐育の十分一ほどで、而かも商業地で無く、全たく政治上の都府だ。市街は美麗で、靜かで、街頭の兩傍には紅楓を列ねて植ゑ、ホテルの建築は壯麗で、

客の待遇も丁寧で、居心地頗る佳い。

ヒラデルフィヤ市からバルチモーア市を經て、華府に著けば、最早日が暮れた。

ホテル、アーリントンに入て、直ぐに電話を日本大使館に懸けると、舊友の埴原書記官は卽夜來り訪ひ、翌る日の市の内外見物の日程を考へ、午前は日本銀行員結城豐太郎氏を煩はし、午後は埴原氏自ら案内し、馬車、電車、汽車、自働車、あらゆる交通機關を利用して、終日思ふさま飛び廻る計畫を定めた。

チリチリチリン――と枕元に響く電話は、ホテルの給仕が、昨夜の命令に從ひ、午前六時を報ずるのである。今日十月三十一日の未明から日暮れまでに、余等は華盛頓府の内外を、時間の許す限り、韋駄天走りに飛び廻つて、飽くまで見物を縱にせんとするのだ。豫て準備せしめたる朝餐を、電燈の明りで了したとき、結城氏は既に來り訪はれ、馬車の準備も出來たので、直ぐに出懸けたのが午前七時。

街頭未だ行人無く、黃に染めた路傍の楓の竝木は、葉の大さ掌ほどなるが、一本

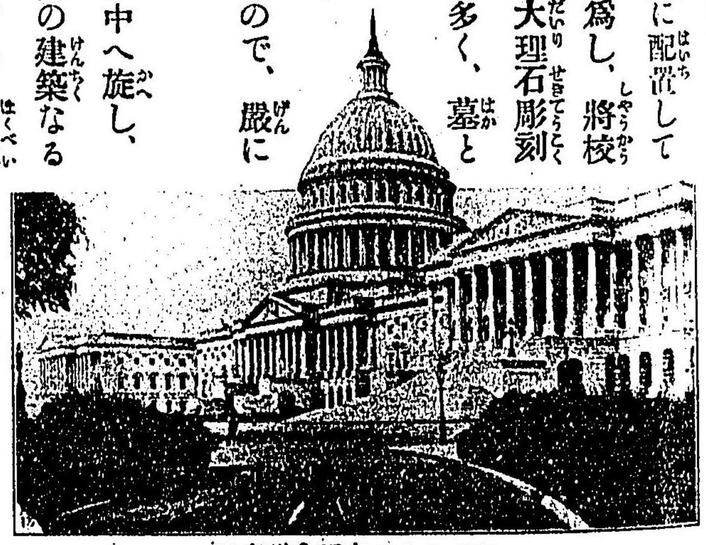
一本に明けて行く時、地上の霜に、馬車の蹄と輪との痕を殘しつゝ、故意と蓋を拂ふて、面を冷風に吹かせながら、先づ郊外二哩なるアーリントンの墓地見物にと出懸けた。勿論電車は未だ影も無い。市街の端れに、ポトマク川の橋を渡りながら、上流を眺れば、黄楓の影を水に映じて、錦の如き中を、一隻の川汽船が、上流に漕ぎ上る。

往くこと一哩許の郊外、次第に高く、丘上に兵營があり、士官の住宅と覺しき家家の前には、門の左右に數十の砲彈を圓錐形に積み飾つて居る。華盛頓の全市を瞰下す丘上には、八門の臼砲が据ゑてある。遙に望めば白色の高塔、錐の如くに上方に尖れるが、市外に高く天を刺して聳ゆるあり。是が佛國巴里のエッフエールの塔と並んで、世界最大なる二大高塔の其一で、名高い華盛頓の紀念塔だ。是から清く修められたる林間の道路を往けば、美麗なる石門を入て、愈よアーリントンの墓地で、此國の建國以來獨立戰爭南北戰爭及米西戰爭と、北清事變とに、陸海軍の戰死

者一萬餘人の墳墓を、宛ながら公園の樣に美麗に配置して飾つてある。兵卒の墓は、正しく縱横に列を爲し、將校の墓は、一基ごとに名工の意匠を凝らしたる大理石彫刻の塔を樹て、中には死者の肖像を刻みたるも多く、墓と墓との間は、廣い道路が縱横に通じて、自在に馬車を乘り廻すべく、徘徊しながら古人と語るには、絶好の遊覽地である。兵營に近いので、嚴に寫眞を禁ず。

ルーズベルト氏

馬車を華盛頓の市中へ旋し、先づ市中最大最美の建築なる國會議事堂を見る。是は北米合衆國の上院と下院とを合せ、釣鐘の樣な大圓頂閣を中


ワシントン府國會議事堂

央にして、數十級の階段を昇りたる高丘の上に立ちてられ、階段は總て大理石で、上院の議員席は約百、下院の議員席は約四百、階上は、新聞記者、婦人、議員紹介、及び普通の傍聽人と、何れも其の席を區別し、議員の控室、委員室、讀書室など、皆な善美の限を盡し、壁間には、第一期の大統領ジョルジ、ワシントン以來、歴代大統領の肖像、盡とく名人の手に成り、恰も美術館の中に入つた樣だ。

議事堂の對ふ側に、道路を隔てゝ立つ「レネザンス」式の大建築が、莊嚴美麗世界第一といふ議事堂附屬圖書館で、門に入て、光り耀く大理石の階段を左右に眺めながら、先づ正面の閲覽室に入ると、圓形の席を、數層重なる輪の如くに設けて、中央に圓く事務室を置き、其の周圍が目錄箱で、抽斗は箱の内外に設け、其中にカード目錄が備へられ、圖書は此所より貸出し、其の事務員は總て婦人だ。其の周圍に、輪廓狀の閲覽席は、恰ど角力の桟敷の樣に配置せられて、一時に五百人位這入て居る。室内は總て蒸氣で溫め、所々に寒暖計を掛け、六十度の溫度を平均に保たせて置くので、溫かなること春の樣だ。地下室の便所には、ボーイ常に傍に侍べり、大理石の洗面器は、栓を捻れば溫湯滾々として噴き出す。更にまた階段を登れば、階上には大小幾多の壁畫が、盡く名人の手に成り、讀書に倦める者は、樓上を散歩して、繪畫を評し、彫刻を品し、寫眞を眺めて精神を慰むることが出來る。其の周圍が書庫で、外から覗けば、圖書容積の大小で區別した書架も、一と通り見ゆる。況して上下兩院の議員室などは、一人一室づゝに區劃して、内には椅子、テーブル、文房具、一切具へられ、また特別の資格ある研究者の爲には、特別閲覽室も設けられ、三階の上には珈琲と午餐との食堂もありて、全館内には、平時一千人以上の人人集り居れども、滿室閲として咳の聲だに聞えねば、況して書庫の中で間斷なく上下する昇降機など、何所にあるやら知る人稀なる位だ。それでも樓上の一隅には、圖書の目錄も、繪葉書も賣て居る。最も驚かるゝは、二丁餘りの道路を隔てた議事堂の内から、地下を通じて壓搾空氣を應用し、彼方で必要の圖書を命ずれば、立ど

ころに之を地下から送つて、使用が濟めば直ぐに還つて來るのは、人間業で無く、圖書が自から地下を飛で歩くかと思はるゝ。此所の開館は、午前九時から午後十時まで、其間は無料で、何人にも縱覽させる上に、信用ある人なれば、自から圖書館まで行かずとも、電話で注文すると、直ぐに自働車で、市中へ配達して貸し出すのである。此の館内に日本畫展覽會といふがある。硝子蓋の箱の中に、日本の古錦繪數百種を竝べてある。新聞雜誌縱覽室には、世界各國のが集まつて居るが、日本文のは、僅に日米週報といふ紐育で發行する雜誌の外一種も無つた。

圖書館を出れば、最早十一時だ。更に米國建國の父ジョルジ、ワシントンの舊住宅を訪ふ爲めに、電車でマウントヴアノンへと出懸けた。此の電車、一日五回往來し、片道一時間づゝかゝるが、何れもワシントンの遺蹟見物の客許りで、六輛の電車は、何時も滿員である相だ。ジョルジ、ワシントンと言へば、米國獨立の始めに當り、國民軍を率ゐて、七ヶ年間の苦戰に、トウ〳〵英國軍隊を屈伏せしめ、北米合衆國獨

立の基礎を定め、推されて第一期と第二期の大統領と爲りたる人、而かも身を此のマウントヴアノンの村落から起し、戰爭が終れば、忽ち大將の軍服を脱で鄕里に歸つて農夫となり、また推れて大統領と爲れば、出でゝ合衆國の主權者と爲り、任期が了れば三たび村落に歸つて鷄犬を友とし、毫末も功績に誇らず、權勢を貪ぼらず、出處公明、進退高潔、一意國の爲に力を盡したること、古今東西を通じて、世界の歷史に比類無き大人物である。で、米國八千萬の國民は、ワシントンと言へば、神にも佛にも比べて尊敬し、國都にも其の名を附けて華盛頓と呼び、紀念の爲には、世界無類の高塔を立て、舊住宅へは、特に電車を引て、日々に數千の見物人が、唯だ其の遺跡を見る爲に出懸けるのだ。

電車に乘て先づ驚かるゝは、白人車と黑人車の區別だ。華盛頓市三十萬の人口中、十萬人は黑人、乃ち黑ン坊である。彼等は多く下等の勞働に從事して居る。聞けば全米國八千萬の人口中に一千萬の黑人が居る相だ。此の黑人に對して、白人は非道

く輕蔑し、結婚もせず、交際もしないので、電車でも、白人と黑人とを區別して居る。其の電車が走り出すと、一人の案内者は、スックと立ち、嚴々と音する車の中で、口に喇叭の樣な擴聲器を當てゝ、大聲で一々道すがらの名所舊蹟を説明しながら走る。

途中のアレキサンドリヤといふ市街には、ワシントンが信仰して、平生日曜には御參りに往たといふ寺が電車の中から見える。電車は川に沿ふて走り、上流には丘陵起伏して、嶮しい坂路もあるが、之を過ぎて愈よマウントヴアノンに著いた。

ポトマク川左岸の丘陵、四方に平野の農圃開け、周圍に老樹を繞らしたる邸園が、乃ちワシントンの舊宅で、鐵門を入れば、木造二階建の質素なる家屋は、居室、客間、讀書室、音樂室とも、何れも狹くして十人とも入れ兼ぬるべく、勝手、料理室、植物を養ふ溫室まで、總て當年の偉人が棲みたる儘に保存し、其の居室の寢臺は、今より百十一年前の千七百九十九年に、偉人永眠の場所である。窓外の庭を境する

黄楊の垣根は、昔ながらの綠りを改めず、邸内の胡桃の枝には、栗鼠頻りに上下して、自由の天地を樂しみ、雛兒を伴れたる鷄は、庭中を徘徊して、主人が世に在るの日に飼ひ馴らしたる面影を留む。

ジョージワシントン

此の質素なる邸宅が、米國創建の偉人の住みし蹟かと思へば、今更ながら此人の權勢に執著せざりし高潔なる人格が思ひやられて、轉た欣慕の念を增さざるを得ぬ。邸の背後の庭に出れば、ポトマク河は、悠々と緩く脚下に流れて居る。

ワシントン邸住宅

門前停車場の傍なる料理店で、輻輳する客に雜つて、牡蠣のフライに舌皷を打ちながら午餐を了し、繪葉書を買ふて直ぐに認め、紙袋にした南京豆の菓子を求めて車中に携へれば、之を嚼みながら喋々と語る仲間は、他

にも多い。

午後一時、一旦華盛頓市のホテルに歸れば、埴原書記官は、最早自働車を準備して待て居たので、直ちに伴はれて先づ大統領官舍の白宮殿に赴く。時刻遲れた爲に、大統領に接見する能はねど、室内は、導かれて隈なく見る。白く塗た石造の二階建で、本來は「イクセキユーテーブ、マンション」卽ち大統領官舍と言ふべきを、白色の建物なるより、何人も白宮殿と呼び、其名は世界に知られたるも、實際は甚だ質素で、間口が七十尺、奥行八十六尺の一と構へ、玄關を入れば、直ちに待合室で、次の應接室は、青、綠、赤の色を以て區別したる三室に、歷代大統領の肖像を掲げ、廊下には同夫人の肖像を掲げ、裝飾も甚だ質素で、一個の圓テーブルと數脚の椅子とを配置し、各國の君主又は國民からの寄贈品が飾られてあるのみ。其の壁間に、我が東京の宮城と、日光との寫眞が額として掲げらるゝのは、曾て我が小村全權公使が贈られたのだと聞ては、殊に余等の注視を曳いた。

去て雲を摩する華盛頓紀念塔を訪へば、五百五十尺の高塔、各國の石を集めて造り、日本の伊豆の下田邊から運んだ一個の石は、日本開國の紀念として用ゐられたのな相だ。塔の頂上まで、昇降機で昇り得るも、時間無れば之を見合せ、更に河岸の公園を一巡して、癈兵院を訪ふ。傷病軍人の住宅を、大規模の庭園内に設け、悠悠自適に殘年を送らしむる大樂園だ。更にロックリック公園に、天然の山水を利用したる楓林の間を徜徉するも、日は西に傾むいて、車を停めて徐ろに紅葉を賞するの暇なく、溪流の水を自働車の轍に蹴立て、數しば風の爲に飛ばんとする帽子を抑へつゝ、先づは華盛頓市の内外を一週して、ホテルに歸れば最早黄昏。埴原結城の二君と、卓を圍んで晩餐を偕にし、食後送られてペンシルベニヤ鐵道の停車場に赴き、ビッツバルグ行の夜行汽車で、走り出すとき午後八時。

此日終日、馬車、電車、自働車の各種を利用して、飛び廻つた里程が八十哩餘なる相だ。

煤煙黯淡たるピッツバルグ市

工場の煙突から間斷なく噴き出す煤煙は、半空に漲つて、モナンガヘラ川と、アレガニー川の沿岸、三十哩に連なり、天地爲に薄暗く、如何なる快晴にも、太陽を視ることの出來ないのは、是れピッツバーグ市を中心とする、鋼鐵大工場の壯觀である。

昨夜華盛頓を發し、今朝此所へ著た余等は、ジョンス及ラフリン製鋼會社に、日本の工學士明石照男氏を訪ひ、導かれて先づ同社の工場を見た。元來此の市が斯く製鋼業の盛大と爲たのは、近く五十年以來の事で、當初其の近傍に、天然瓦斯と軟石炭とが發見せられ、殊に附近の各地に、鐵鑛の產出は無盡藏とも云ふほどあるので、偖はモナンガヘラとアレガニーの兩川が、落合ふ所の中間の地區を中央として、幾多會社の工場が兩岸に設けられ、後には其等各會社が、トラストを組織し、一方

なる首領が、世界鋼鐵王のカーネギー氏で、ジョンス及ラフリン會社の一派は、其の反對者である。此等兩派の十數大會社が、皆な工場を設けてあるので、終に斯く白日も黯淡たる別天地を現出し、一丁先きは全然何物も見えぬ。此地で死だ者の肺を「スタムプ」として白紙に押すと、紙面は黑色になると言はれて居る。

焦熱大焦熱の地獄かと見ゆる猛火の中に働らく工夫は、流汗淋漓たる顏に火光を映じて、宛から赤鬼かと見ゆるもの、幾千百人。此方に鎔鑛爐の中で溶かされた熱鐵が、瀧の如く坩爐の中へ注ぎ込まるゝもあれば、彼方には眞紅に燒けた一と抱へに餘る大鐵塊を、大鐵盤に上せて、打ち伸ばすもある。鐵板の打ち出しは、煎餅を製するが如く、鐵軌の引き伸ばしは、心太を押し出すよりも容易い。其の熱鐵を飜弄する每に、火の粉は八方に飛散して、能くも人は燒け死なぬものだと驚かるゝ。

是れ實にジョンス及ラフリン會社工場內の光景だ。其所はピッツバーグの市內、川を挾んで兩岸に連なり、鐵道は四方に通じ、陸には汽車、水には汽船で、斷えず原

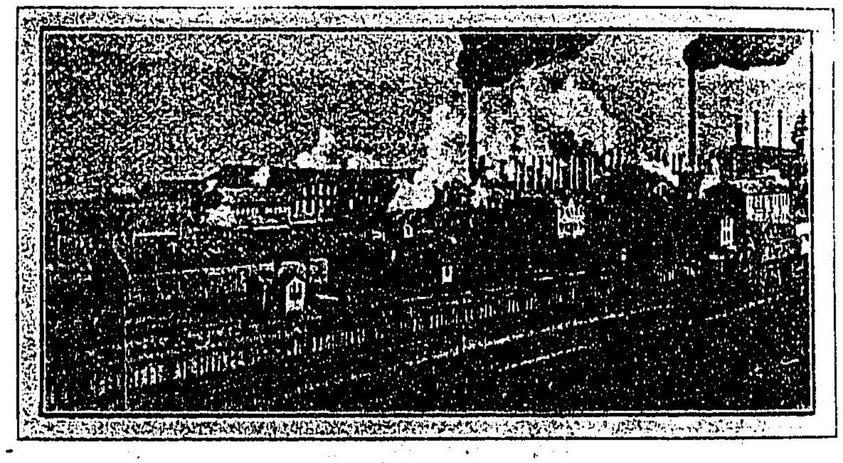
料を運び來り、製品を運び去る。

去て更にカーネギー會社の總務部を訪ふ。此所は三井物産會社の紹介狀を携へたれば、直ちに導かれて四層樓上に延かる。室に入て先づ驚ろきしは、支配人以下、各事務員の卓の抽斗に、『今それを爲せ』(Do it now)『幸福ならんと欲せば常に多忙なれ』(Keep bussy to keep happy)の二語を書き附けて居る。是れ社主カーネギー氏が、全社員に授けたる二大訓令である相だ。

立て窓外を望めば、全市人口十萬の都會、概ね工場と工夫より成り、近く一二町四方は、林立せる煙突を見るも、其の先は黯淡たる煤煙に籠められて、何物をも見る能はず。正に是れ煙の都府だ。若しも浪花津の帝おはしまさば『高きやにのぼりて見れば煙り立つピッツバルグは賑ひにけり』と御製あるべしと思はる。

總務部で、工場縱覽證を得て、電車で郊外六哩のホームステッドへ行く。沿道は概ね工場のみ。其所はカーネギー工場の所在地、モナンガヘラ川の岸で、對ふ岸の

ピッツバーグのカーネギー工場



プラドックも同じく工場だが、今余等の入りたる一工場のみでも、一萬五千の工夫を使役し、場内にも、鐵道は縱横に曳かれ、殊に奇なるは、梁上の鐵道で、熱鐵を鐵索に吊し、彼方此方に動かし運んで居る。余は今まで鐵道とは、物を載せて運ぶものとのみ思ひしに、此所では釣り下げて盛んに運ぶので、また一驚を喫した。作業の光景は、前にジョンス及ラフリング會社で見しと大同小異だが、其の規模は更に大だ。其の工場の建築は、鐵製の柱、鐵の棟梁で、構内は、皆な鐵板、鐵の枕木、滿目盡く鐵ならぬは無い。曾て千八百九十三年に、此の工場内で大同盟罷工あり、警察官は

制止の力足らず、終に一個師團の陸軍を繰り出し、數日間包圍したることありといふ。以て其の大仕懸けなるを推知するに足る。

出て、カーネギー氏が四大寄附といふ、圖書館、博物館、音樂堂と、工業學校とを視たる後、此夕、此市に近頃出來たといふ日本料理店に就き、鯛の刺身で日本飯を食ふ。時に心附て自ら衣服を見れば、今朝改めたカラーもカフスも、皆な眞ッ黑となつて居た。食後また汽車に乘れば、翌る朝は最早紐育市中、雲に聳ゆる高樓兩側に列なつて、街頭は恰かも大溪谷の觀を爲して居る。

大西洋の航海

豪奢無類の大西洋航路

北米大陸の觀光畧ぼ了り、將さに歐羅巴に赴かんとするに、大西洋を渡る汽船が數多ある。紐育港頭、櫛の齒の如くに竝ぶ船渠は、皆な大汽船の繫留に適せざる無く、歐羅巴通ひの汽船會社は、啻に二三のみならず。流石に歐米兩洲の旅客が、最も贅澤を盡して往來する所とて、全世界の航海中、設備の完全なるは、大西洋航路に勝るものなき中にも、其等の各會社中、最も完全なるのが、キユナード會社で、一千八百四十年以來、英國々旗の下に、大西洋横斷の汽船を浮べ、近年に至り、「カロリナ」「カアマニア」の二大汽船、各二萬噸の積量を以て、全世界の客船中、最大最美を誇つて居たが、今は更に三萬二千五百噸の「ルシタニア」「モレタニヤ」の二大船を大西洋上に浮べ、世界の航海史上に一生面を開くに至つた。遮莫、「ルシタニア」の出帆は十數日の後で無ければ望む能はざる故、余等は第二の大汽船なる「カアマニア」號に乘り、紐育市ジエーム街の第五十二號船渠に纜を解いたのは、十一月五日の曉天、未だ明けざる午前五時だ。

十一月三日の天長節は、生憎日曜に當り、外賓招待に便ならねばとて、紐育の帝國總領事館は、常例の夜會を四日の午後九時よりアストル、ホテルに催され、余等も

また招待を受けたが、汽船の出帆が翌朝の拂曉なる故、辭して其の夕に總ての裝を理し、余は小塚蘇南氏と丶もに二三の知友に送られ、馬車で船渠に赴く。時に午後九時で、繫げる汽船は分明に見えねど、電燈晝の如く燿やく大建築の内は、馬車の往來織るが如く、旅客の行李は積で丘を爲し、一々昇降器で二階に運ぶ。余等もまた、手提鞄を提げて、導く黑人の運荷夫に伴はれ、一巨柱の周圍を螺旋形に階上に昇れば、數歩にして其所に鞄を置く。注視すれば、身は既に大船の甲板上に在るのだ。斯く船に乘りながら、海は何所にあるか、未だ分らないのだ。水陸連絡の設備先づ其の完全なるに驚かざるを得ぬ。

宛然是れ浮き宮殿

本來旅客を旨とする大汽船とて、總ての設備に旅客待遇を主眼とするは勿論で、船室の大部分を一等船客に充て、また同じ一等船客中にも、A、B、C、の三級に

分ち、別に尙は特等室もある。Aは最上層、Bは其の次層、Cは上より第三層に在る。三等の一部を、割て二等船客室とし、三等船客は、舷頭大甲板の下層に在るのだ。余等二人は、Aの第五號室に入る。實に一等船客中でも最も優等の室を占む。室は前面右舷の角に當り、隣りたるAの七、九、十一の三室を連ねて特別室だ。二個の角窓は、二重の硝子で掩ひ、二基の電燈は、蓐上に臥しながら捻れば明滅が自在で、其の中の一基は、壁間から取り卸して卓上に置けば、また一個の置きランプともなる。簞笥の抽斗の間から横に板を曳き出せば卓と爲り、窓側の電氣を捻れば、發熱電氣は斷えず室内を煖む。洗面器には冷溫二種の水を運び、上下二段の寢臺には、屈折自在なる眞鍮の階子を備へ、憩ふにソーファーあり、衣服を藏するに押入あり。呼鈴一觸、ボーイ聲に應じて來り、靴を脱して扉外に置けば、直ちに携へ去て拂拭して來る。便所は大理石で疊み、ボーイは手巾を捧げて洗面器の傍に立ち、自然の噴水は、三分時毎に洗淨し去るのだ。諸もろ此等の設備を見ただけでも、最